
運命の人/赤い糸伝説

こやマンボウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の人／赤い糸伝説

【Nコード】

N3154J

【作者名】

こやマンボウ

【あらすじ】

「運命の赤い糸」で結ばれたカップルが、連続して破局した！

その裏にあるそれぞれの思いとは？ 「赤い糸連続消失事件」が終

幕を迎えると共に、「恋愛革命」を唱える者達は動きを見せ始める！

第二部「求めた運命は偽り」、開始！

現在、修正中。

プロローグ

唐の時代の葦固という人物が旅の途中、宋城の南の宿場町で不思議な老人と会う。この老人は月光の下、寺の門の前で大きな袋を置いて冥界の書物を読んでいた。聞くと老人は現世の人々の婚姻を司っており、冥界で婚姻が決まると赤い縄の入った袋を持って現世に向かい、男女の足首に決して切れない縄を結ぶという。この縄が結ばれると、距離や境遇に関わらず必ず二人は結ばれる運命にあるという。

以前から縁談に失敗し続けている葦固は、目下の縁談がうまくゆくかどうかたずねるが、老人はすでに葦固には別人と結ばれた赤い縄があるため破談すると断言する。では赤い縄の先にいるのは誰かと聞けば、相手はこの宿場町で野菜を売る老婆が育てる三歳の醜い少女であった。怒った葦固は召使に少女を殺すように命令し、召使は少女の眉間に刀を一突きして逃げたが殺害には失敗した。

縁談がまとまらないまま十四年が過ぎ、相州で役人をしていた葦固は、上司の十七歳になる美しい娘を紹介されついに結婚した。この娘の眉間には傷があり、幼い頃、やさいを売る乳母に市場で背負われていると乱暴者に襲い掛かれて傷つけられたという。葦固は十四年前のことを全て打ち明けて二人は互いに結ばれ、この話を聞いた宋城県令は宿場町を定婚店と改名した。

運命の人。

その言葉に前から違和感を覚えていた。正確にいうと「運命」という単語にだけど。

地球上に存在する人類は六十億人以上。だが、地球上、いやこの世に存在する運命の人は一人。結ばれる相手が運命の人だというのは、その他の人と結ばれる可能性はゼロでないといけない。

けど、現実が違う。限られた区間の中で見つけた相手と恋愛をする。結婚をする。

だから僕は、僕だけはそうはならない。

運命の人。

その言葉が前から嫌いだった。正確にいうと「運命」という単語がだけど。

地球上に存在する人類は六十億人以上。だが、結ばれる相手は予め定められている。それは、どんなに抗っても変えることはできない「運命」。

けど、現実が違う。結ばれることのない者同士が互いに寄り添い、崩壊していく。

だから私は、私だけはそうはならない。

プロローグ（後書き）

こんにちは、こやマンボウです。

初めての投稿ですので、いろいろ不備があるかと思いますが、ご了承ください。

本分は勉強という学生の身分のため、更新は数ヶ月おきになると思います。

気長にお待ち下さることを願います。

登場人物紹介 《第一部》

《主な登場人物》

道長 みちなが 昨也 さくや ・ ・ ・ ・ ・ 主人公 「クピド」でバイ
トする高二

奔洞 ほんどう 智美 さとみ ・ ・ ・ ・ ・ ヒロイン 「クピド」でバ
イトする高二

新島 にいじま 抄吾 しょうご ・ ・ ・ ・ ・ 「クピド」の店長

蓑宮 みのみや 滯 みお ・ ・ ・ ・ ・ 道長の幼馴染 陸上部

三浦 みうら 郁 いく ・ ・ ・ ・ ・ クラスメイト 御節介

楠 くすのき 正史 まさはる ・ ・ ・ ・ ・ クラスメイト

遠山 とおやま 和子 かずこ ・ ・ ・ ・ ・ 楠の幼馴染 三浦の親友

松本 まつもと 正宏 まさひろ ・ ・ ・ ・ ・ クラスメイト

秋山 あきやま 楓 かえで ・ ・ ・ ・ ・ クラスメイト

杉原 すぎはら 幹也 みきや ・ ・ ・ ・ ・ クラスメイト 女子に人気

長谷川 美久 ．．．．． 陸上部の先輩 杉原の彼女

皆本 清 ．．．．． 陸上部

清元 瑞穂 ．．．．． 陸上部の先輩

僅鴫 闘己 ．．．．． 転校生

壺端 透 ．．．．． 奔洞の友達

片山 篤 ．．．．． 壺端の一目惚れの相手

登場人物紹介 《第一部》（後書き）

登場人物紹介を作りました。登場人物が混乱してきたら、使ってください。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ / 一章 幼馴染 / 一話 転校

【道長】

遠山和子^{とおやま かずこ}が転校するらしい。

そのことがクラスを賑わしている。

六月。じきに期末テストを向かえ、夏休みに入る。そうになると、遠山とはもう会えなくなってしまう。彼女がこの町にいるのは終業式の二日後までらしい。

遠山はショートカットのこじんまりした女子で、あまり積極的とはいえない性格をしている。

「ということで、和ちゃんの送別会をすることが決まりました」

壇上^{みづらいく}に上がって、これまたショートカットの女子が声を張り上げている。三浦郁^{みづらいく}。すらっとした長身の持ち主で、遠山と異なり活発的な女子だ。クラスのリーダー的存在で遠山と一緒にいることが多い。

「終業式の次の日、十一時に駅前の『マリーの店』に集合ね。一応前日にも言うけど、みんな、忘れないように。それと、楠君^{くすのき}、逃げちゃだめだからね」

名指しされた楠正史^{くすのき せいし}は、顔を赤くし、同時に離れたところに座る遠山も赤くなる。楠と遠山は幼馴染である。二人が互いに意識し合っているのは丸分かりなのだが、一向に進展する気配がない。

「別にわざわざ名指ししなくても」

呟いたのは僕の隣の蓑宮滯^{みのみや みお}。身長そこそこ体型そこそこの体育系女子。同じ地域に住んでいる。

「確かにそうだな」

僕は彼女に同意する。

「大体、御節介なのよ。他人には関係ないのに首を挟まないでほしいわよね」

「そうそう。頼まれてもないのに、いい迷惑だよ」

僕らは仲良く頷く。

入学当初、僕と蓑宮は両想いだと思われて、三浦が僕らのキューピッドになろうと奔走していた時期があった。

「ま、確かにあの二人の押しのなさにはいらいらするわね。無理やりにでもくつつけようかしら」

三浦を否定したくせに、他人の恋路に踏み入ろうとしている。

「それじゃあ三浦と同じじゃん」

僕が指摘すると蓑宮は「違うわよ」と言ってちゅちゅちゅと指を振った。

「私達のは単なる勘違い。けどあの二人は本物よ。ほら、感じない？ 二人の背中から『誰か機会を作ってくれないかなー』ってオラが出てるでしょ」

——確かにそうだけど……

「あ、そうだ。三浦が放課後図書室に集まられて言ってたの。まだ道長には言ってなかったわね」

「うん。初耳」

「じゃあ、今言ったからね。ちゃんと来るのよ。それと、楠には言わないようにね」

放課後、遠山と楠を除いた二の一は図書館室の奥に陣取っていた。中央にいるのは首謀者の三浦。その周りには女子。その後ろに男子といった具合だ。

「それじゃあ、送別会についてなんだけど。集合時間を十一時って言っただけ、皆には十二時に来てほしいの」

「それって、和ちゃんと楠を二人つきりにするってこと？ 郁ちゃん」

中心付近の女子が聞く。

「ええ、それと座る席だけど、あの二人を隣同士隣り同士にしたいの。協力してくれる？」

三浦がクラスメイト達に、特に男子に向かって言った。

「よし、いいぜ。やってやるぜ！」

「ああ。俺達の力で二人の恋を实らせよう！」

「最後だからな。一肌脱いでやるか」

男子達が雄叫びを上げる。

それに釣られて女子達も意気込みを入れる。

「よし、やりましょう」

「ええ、そうね」

「押しのない和ちゃんのためにね」

クラスメイト達の士気が上がる。

司書の先生が睨んでいるけど、皆気にしていない。

誰かがペンを持って来て、座席表を作りだした。皆の要望を纏めて書き込んでいく。盛り上がってきたときに、凜とした声が白けさせた。

「私、帰る。バイトだから」

見るものを射抜くような瞳に腰まで垂らした黒い髪。奔洞《奔洞ひしどみ》智美である。会議中、彼女は一言も喋っていなかった。

「それじゃあ。道長、遅れるんじゃないわよ」

彼女の周りの女子たちがおどおどしている。

奔洞が出て行ったあと、皆が僕を見つめた。

僕は苦笑いを浮かべる。

「――行けよ……」

誰かが気を利かせて言った。

「バイト、遅れるのはよくないよ」

僕はそいつに感謝しながら、三浦に誤った。

「ごめん、抜ける」

「構わないわよ。それじゃあ、また明日」

「うん」

静かになったクラスメイト達に見送られ、僕は図書室を出た。

次の日、教室に入ると三浦が僕を待っていた。

「こっちこっち」と手招きする彼女の方へ向かうと、「ちよつとちよつと」と廊下に呼び出された。

「昨日のこと？」

周りの目を気にしながら聞く。

「まあね。で、お願いがあるんだけど、いいかな？」

三浦が「お願い」と言って手を合わせる。

「送別会で和ちゃんと楠をくつつけるつもりなんだけど、それ以前にくつついてもらうに越したことはないわけ。それでね、道長に楠の後押しをしてほしいの。できるかな？」

「あの、何で僕なの？」

「昨日、あの後空気取り戻すの大変だったんだけどな——」

三浦が上目遣いで昨日のことを口にする。

「——それじゃあ、具体的に何をしてほしいの？」

「えーとね。伝言役になってもらいたいの。私が和ちゃんを連れて待ってても、絶対来ないでしょ。だから、無理やりにでも連れて来てほしいの」

——それって、伝言役の域を超えてるじゃん。

そのことを口にする、彼女は「だったら強制者でいいわ」と引く気がないことを示した。

「強制者」ってそんな言葉ないぞ、と思いながら三浦の話聞く。

「お願い、道長。このままだと、あの二人は互いに思いを伝えずに終わっちゃう。和ちゃんは『これから離れ離れになるのに、そんなこと言って縛りたくない』って言って告白しないに決まってる。楠にアタックしてもらえないの」

彼女はじっと僕を見つめた。

「――確かに、お節介かもしれない。いえ、お節介だわ」

何も言わない僕に、三浦は俯いた。

「けどっ」

と、続ける。

「私は、嫌なの。――私は、和ちゃんがどれだけ楠のこと好きか、知ってるから…… そのことを伝えずに終わるなんて、絶対嫌」

「……………」

そうやって訴える三浦はたぶん友達思いなのだろう。

三浦からの依頼には後日回答するころにした。

昼休みに中庭をうろついていると、一人ベンチに座る楠を見つけた。

三浦のこともあり、近づいてみると、彼は呆と空を見上げていた。釣られて僕も空を見上げる。

今日の空は青天だった。雲一つない青空。吸い込まれてしまいそうなコバルト・ブルー。

僕は隣りに座って、楠に話し掛けた。

「空、青いね」

「うん」

「何でこんなことしてるの？」

「それは、その――」

「たそがれてたつてのはなしだよ」

楠が笑った。

「空って、何もないんだよね」

唐突に楠が話し始めた。

「高い所から街を見下ろしてもさ、車やら電車やらで全然無心になれないんだよね。でも空ってそういうのないから。いや、あるにはあるんだけどね。鳥とか飛行機とか。あと、雲もね。でもそういう

のって、言うほど目につかないんだよ。それにさ、ほら、空って端がないじゃん。でも街は区間が見えるし、海には水平線がある。果てや限界がある。いつまでも逃げてられない。夢が覚めてしまう」

「現実逃避？」

「まあ、そうなるかな」

楠は微笑んだ。

「受け入れられないわけじゃないんだ。ただ、実感がない。情報として識ってはいるけど、感覚として知っている気がしない……」

中庭には僕らの他に誰もいない。二人だけの中庭は広くて、吞まれそうな感覚に陥ってしまいそうだった。

昼休みはもうすぐ終わる。

腕時計で確認して、僕はベンチから立ち上がった。

楠が僕に聞いた。

「なあ、道長。お前と蓑宮ってどうなんだ？」

「どう、とは？」

「一時期デキてるって噂があったけど」

「別にどうともないよ。ただ近所に住んでて、進学先が同じになっただけ。それ以外でも、それ以下でもない。親しくないとは言わないけど、それ以上の進歩もない、ただのクラスメイト」

ぼくはすらすらと答える。

だってそうだから。僕と蓑宮の間にあるのは、近所の住人であるということだけ。そんなのは「運命」でもなんでもない。近所だったら同じ小学校に行くし、受験しなければそのまま同じ中学に進む。高校受験だって成績が近ければ志望校も同じものになってくる。蓑宮が好きだ、っていう方程式は成り立たない。

「——そう、か。ただのクラスメイト、か……」

楠はボソッと呟いて、顔をこちらに向ける。

「悪い、時間とらせて」

そう言う彼の顔は、暗かった。

放課後、下校しようとしていたら三浦に呼び止められた。

「道長、奔洞さんにちゃんと言っというてね」

「言っとくって何を？」

「そんなの決まってるじゃない。送別会よ、送別会。昨日言ったでしょ、『十二時に来てほしい』って。ちゃんと奔洞さんにも実行してもらわないと。あの様子だと約束破って十一時に来そうだし」

——「約束」って、約束なんてしてないだろ。それに、奔洞は十二時に来ないんじゃないかって、送別会そのものに来ないだろうし、別に言わなくてもいいだろう。

そう言おうと思ったけど、三浦のしつこさに嫌気が差してやめた。

「『強制者』の件考えてる最中だから、今は無理だよ」

「無理って、これは『強制者』の仕事と関係ないでしょ」

三浦は僕が断ると思っていなかったのか、早口になる。

「関係あるよ。『強制者』の件を引き受けるかどうかは、あの二人を応援するかどうかで決まるよね。送別会に意図的に遅れて行くのは楠と遠山を応援するということじゃん。だから、思案中の僕から言うことはできないよ。どうしてもっていうんなら、三浦が自分で言いなよ」

最後は突き放すように言うと、三浦は「そう。そうなんだ」と呟いて、僕にバイト先に連れて行くように要求した。

「奔洞さんって、毎日バイトしてるんでしょ。だったら連れてってよ。私が直接奔洞さんに言うわ」

断る理由がないので、三浦を連れて行くことにした。

僕と奔洞は町の商店街の片隅にひっそりと店を構える喫茶店「クピド」でアルバイトをしている。

「クピド」は定員二十名ほどの小さな店で、小説家をやっている新島抄吾^{にいじましょうご}さんが店長をしている。

茶色を基調とした落ち着いた雰囲気のレストランで、客は少なく、いつもカウンターに常連が一人二人いるくらいである。

僕らの通う天原高等学校は親の許可と学校側への報告を行えばバイトは認められる。

「それで、学校から歩いていけるところはないかなって探したら、『クピド』を見つけたというわけ」

三浦と「クピド」に向かう途中、会話のねたが他に思いつかなかったので、「クピド」の話をしていた。

「『クピド』までは徒歩で三十分ほど。一応バスが近くまで出てるけど、三浦は定期とか持っていないだろ」

「ええ。道長はバス通学なの？」

「いや、電車通学。奔洞がバス通学なんだ」

「へえー、奔洞さんが……」

三浦は思案顔になって俯いた。

「ねえ、道長。バイト終わるのって、何時くらい？」

「終わるの？ 大体八時くらいかな」

「八時か——」

三浦はふと足を止めた。

「道長。私、今日は帰るわ。バイト終わるまで待ってたら、門限過ぎちゃうから」

「そう。じゃあ、また明日」

別れ際に三浦がこぼした。

「——なんか、情けないわね。和ちゃんのために、とか言っというて、門限ごときで断念なんて」

「そんなことないよ。三浦は頑張ってるよ。普通、友達のためにそこまでできないよ」

三浦のその行動力にだけは凄いと思っている。

「そう。ありがとう。何か元気出てきたわ」

三浦は礼儀上のお礼を言って、僕と別れた。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ / 一章 幼馴染 / 一話 転校（後書き）

こやマンボウです。

ひとまず、一話です。

ラストまでの展開はすでに考えてはあるんですが、それを文字にしようとする、これがなかなか時間がかかってしまいます。

では今度こそ、数ヵ月後にお会いしましょう。

【道長】

「クピド」には、先に来ていた奔洞以外、抄吾さんも客もいなかった。

奔洞は一人カウンターに座って、コーヒーを飲んでいた。

「やあ」

僕は奔洞に声を掛けてから、店の奥にある一室に入り込む。ここで制服を着替えるのだ。

着替えて戻って来ると、奔洞はカウンターから出てテーブル席の一つに腰を下ろしていた。

奔洞と代わってカウンターに入った僕は、まず彼女がさっきまで使っていたコップを洗う。

「奔洞、使ったら自分で洗えって」

一人週刊誌に目を通してしている奔洞に言う。

「仕事のないあんたのために、わざわざ洗わずに残しておいてあげてるの」

こちらを見ないで奔洞は言った。

僕は溜め息をついて、洗い終わったコップを拭いた。

それから三十分、客は誰も来ず、僕はずっと暇を持て余していた。これが「クピド」の現状である。本当にすることがないのだ。客が来なくて。元々繁盛している店ではなく、喫茶店としてはコーヒーだけを飲むような店なので、一日五人客が来れば多い方である。日が沈んで店内が暗くなった頃、奔洞が週刊誌から顔を上げた。

「ねえ、道長」

「何？ コーヒーなら自分で淹れてよ」

「三浦に何か言われた？」

奔洞は僕を真っ直ぐ見つめた。

——何でそのことを知っているんだ？ 三浦と別れたのはここから大分離れた所なのに。もしかして近くにいた？ でも、それだとさすがに気づくだろうし。

「で、どうなの？」

奔洞は真剣なまなざしで聞いてくる。

「うん。少し頼まれ事を——。て、どうして分かった——」

「駄目よ」

——え？ 何が？

そう思ったけど、頭の隅では納得していた。

「三浦に遠山と楠をくつつける手伝いをしてほしい、みたいなこと言われたんでしょ。時間が無いからとか理由つけて」

まるでその場にいたかのように言い当てる奔洞に驚く。

「いい、道長。絶対に手伝っては駄目よ」

——何で？

頭の中が？で一杯になった。

——何で奔洞が嫌がるんだ？ もしかして、楠のことが好きなのか？

「ねえ、奔洞ってまさか——」

「楠の方からは何も言われてないんでしょ。だったら駄目。手伝っては駄目。楠のためを思うのなら、断りなさい」

——いい切らなくれよかった。

僕はほっと安堵の溜め息をついた。

——何だ、そういう理由か。まあ、奔洞の仕事を考えれば分かることじゃないか。

僕は分かっているながら、わざと聞いた。

「どうして？ あの二人はどっからどう見ても、両想いだよ。別にいいんじゃないかな。それに、二人は幼馴染だよ。そういうのって、告白し辛いんじゃないかな。そこを一押しすることの何が悪いの？」
僕の質問に奔洞は淡淡と答える。

「確かに、楠がそれを望んで依頼したのなら、後押しすることに然

ほど問題はないわ。けど、そうじゃないなら別にあの二人の後押しに、楠の意志はあるの？　ないでしょ。

当事者の意志のない手助けは、恋愛を強制的なものへと変えるわ。そして、当事者の意思を捻じ曲げるの。放っとくと強迫概念にまで発達するわよ。そうになると、それはもう一種の洗脳って言っても過言ではないわ」

——洗脳って……

「飛躍しすぎだよ」

「いいえ、道長。それほどのことなのよ。恋愛は人の人生を大きく変えるわ。なのに勘違いが起こりやすく扱いにくい代物なの。当事者ですら安易に一手を打てないのに、部外者なんて以ての外。道長は楠を不幸にする気？　楠のことを思うのなら、断りなさい」

【奔洞】

「クピド」から帰ろうとバス停に向かったら、クラスメイトの三浦がいた。

制服ではなかったもので、一度家に帰ってから、私が帰る時間を見計らって来たのだろう。

いつもなら座って待つんだけど、今日は三浦に合わせて立つことにした。

「どうしたの？　こんな所で？」

「あなたを待ってたのよ、奔洞さん」

彼女は私のことだけを、「奔洞さん」とさん付けにする。

「あら、何で？」

「白を切るのは止めにしましょう。和ちゃんの事よ」

「遠山のこと、ね。で、私に何をしろと？」

「昨日の約束、送別会に遅れて来るの、守って頂戴」

私はじつと彼女の顔を見つめる。

「……私は、私の行きたい時に行くわ。あなたの指図は受けない」

「……………」

「……………」

「……もういいわ」

彼女はくると私に背を向けた。

去り際にポツリと言う。

「今度は邪魔させない」

次の日から、遠山の転校の話は学校中に広がっていた。おそらく三浦の仕業だろうが、改めて彼女の行動力に驚かされる。どうやら、何が何でも遠山と楠をくつつけるつもりのようなのだ。

教室にはまだ数名の生徒しかいなかった。天原高校では部活の朝練が頻繁に行われており、始業ベルが鳴る5分前になってようやくクラスが賑やかになる。

今教室にいるのは、私と蓑宮、立元、古泉、堀尾の五人だけ。その内、立元は隣のクラスだ。蓑宮と立元と古泉の三人は前で談笑している。堀尾は窓際の席で一人、本を読んでいる。私は呆と蓑宮達の話聞いていた。

「杉原君に彼女がいるってほんと？」

杉原幹也というのは、うちのクラスの男子のことだ。

「うん、私見たよ。長谷川っていう美人の先輩」

「あ、それ私も見たかも。セミロングの人だよな？ 昨日一緒に帰ってたよ」

「そうか——。杉原君、彼女持ちか」

杉原は女子からの高感度が高い。

「どっかにいい男いないかな——。大人の感じの」

「無理無理。高校生じゃそんなのいないって」

「あ、でも最近楠君が中庭で一人空見上げてるでしょ。哀愁漂うって感じでよくない？」

「駄目駄目、楠君には和ちゃんがいるもん」

「そうよねー。あ、でもどうするんだろう？ 楠君、まだ告白してないんですよ。このままずるいって、結局告白せずに終わったりして……」

「あ、それありえるかも」

「でも三浦さんがいろいろ走り回ってるんですよ。今回の送別会だってそうだし」

「そうそう、最後のプレゼントに和ちゃんに甘い恋を、ってね」

「どうやら、遠山と楠をくつつける、という行為は一種のイベント化しているようだ。」

——クラスの違う古泉までもが送別会のことを知っているとは、学年全体に送別会のことは知れ渡っているのだろう。恐るべき三浦の情報拡散能力。

「そういえば、滯の方はどうなのよ？」

「え、私？」

「そうよ、告白はしたの？」

「こ、告白って誰に……」

「誰も彼もないでしょ。で、どうなの？ まだなんでしょ」

「え、何のことかさっぱり…… あ、私トイレ！」

蓑宮は教室を飛び出した。後に残された立元と古泉は二人でニマニマしている。

私は席を立つと教室を出た。

始業ベルが鳴るまで後二十分。時間に余裕はある。

蓑宮達の話通り、楠は中庭にいた。芝生を敷き詰めた中庭の中央には木が植えてあり、そのそばにベンチがある。楠はそのベンチに座っていた。周りには誰も居らず、彼は一人だった。

「空に憧れる人間には二種類あります」

以前、抄吾さんがそんなことを言っていた。

「手詰まりになった人と、する事のない人です。一般的に前者を逃避といい、後者を憧憬と言います。まあ、私に言わせればどちらも同じですが。」

空は広大です。私達が地球上にいる限り、果てを見ることはありません。空は海や大地と違って境界線というのがないからです。海には大きさがありません。もちろん大地にも。ですが、空は違います。大きさを表したりはしないでしょ？ 空というのは、海や大地とは違い、私達人間には手の触れることの出来ない世界なのです。

海も大地も、私達一人の人間にとってはとても広大です。でも、空はそれを軽く凌駕します。でも、それを眺めたところで得るものは何もあります。何故なら、空は私達の世界ではないからです。自分より勝るものを見たところで、得るものは然程多くはありません。自分との差が大きければ大きいほど、自分とは違い過ぎて見本にならないものです。それは空も同じことです。なのに空を見るのは、空に最初から何も求めていないからです。空を見る人達は、ただ後押しがほしいだけです。これしかないのだ、と確信する為に広大な空を見て諦めるのです。ですから、空を眺める者の意志はすでに決まっています。そしてそれは、揺れ動くことはありません」

今、楠は一人で空を眺めている。

改めて見ると、楠は筋肉質だった。普段はか弱い草食系男子に見えるが、何だかんだといって、サッカー部で活躍しているらしい。

短く切り揃えた彼の前髪から覗く眼は、空を睨んでいた。

私にはそれが逃避には見えない。もちろん、憧憬にもだ。

ただ、時間を潰しているだけ。そんな風に見えた。

休み時間になると、楠は逃げるように教室から出て行く。

理由は簡単。教室にいと三浦に捕まるからだ。三浦は日に日にその追撃の手を厳しくしていった。最初はそれとなく声を掛けるだ

けだったのが、今では有無を言わせず楠に告白させようとする。

すでに六月は終わり、遠山が去るまでに後一ヵ月もない。三浦は焦っているようだった。

だが、まだ一度も楠は三浦に捕まっていなかった。その原因の一つはクラスメイト達だった。先月の召集で一致団結して遠山と楠の恋を応援しよう、と盛り上がったが、それは送別会に関してだけ、という生徒がほとんどだったのだ。それに、あまりにしつこく三浦に迫られる楠に情が沸いたのか、彼を援護する者も現れた。要は、クラスメイト達はこの騒動を一種のゲームのように感じているのだ。三浦が告白させるか、楠が逃げ切るか？楠の色恋沙汰は生徒達の娯楽化していた。

そして、今日も昼休みがやって来た。

「待ちなさい、楠君。今日こそ告白させてみせるわ」

三浦の声が廊下に響く。先を走る楠は部活で鍛えた脚力を駆使して三浦との差を着実に広げていた。

楠が角を曲がる。校舎の外へと繋がるこの先は人で混雑しており紛れ込まれると探し出すのが難しい。三浦が楠を見失わないようにスピードを上げた。

角に隠れていた私は待ってましたとばかりに飛び出す。

私の登場に角を曲がる最短距離を封じられた三浦は、大回りするために外側に大きく体を傾ける。そこで私はすかさず手を伸ばして進路を封鎖した。

「ちよつと！」

追跡を止められた三浦が私に怒鳴る。

「ごめん。窓開けようとしてて……」

「ああ、もう。逃がしちゃったじゃない」

三浦が私を睨みつける。

楠が三浦に捕まっていない理由。それは、明らかに故意な私の妨害だった。

三浦は私に何か言いたげだったが、私を再度睨んだだけで去っていった。

私は楠の後を追った。

三浦に追われるようになってからは、楠は中庭ではなく部室棟で空を眺めるようになった。男女別に存在する部室棟なら三浦に見つかる心配はない、という寸法だ。

私は校舎から離れた位置にある男子部室棟に着くと、二階を見上げた。

案の定、そこにはいつもと変わらぬ格好で空を眺める楠がいた。私は周りに誰もいないことを確認して、男子部室棟の階段を登った。

上がって来た私を見て、楠は驚いた素振りを見せたが、何も言わなかった。

私は廊下の端に立って、中央にいる楠に話掛けた。

「あれから、答えはでたの？」

楠が「クピド」にやって来たのは、高校生になってすぐ、まだ道長がアルバイトとして勤めていない頃だった。

高校生になってから、私は「クピド」で本格的に働き始めた。

「クピド」には前から何度も顔を出していた。抄吾さんとは親しかったし、常連の名前は全員言えた。私の中学時代は「クピド」に入り浸りだったからだ。そんなんだから、私は「クピド」の意味と、もう一つの顔を知っていた。「クピド」とは即ち、「恋のキューピッド」のこと。「クピド」は、恋愛相談所を兼ね揃えた喫茶店。そして、私の仕事は恋愛相談士だ。

私の最初の依頼主が、楠だった。

「同級生に告白されたんです。そいつは同じ中学出身で、結構仲もいい奴で。でも、俺、幼馴染がいるんです」

楠はそう言った。

去年、私と楠は違うクラスだったので、彼は私のことを知らず、いろいろと喋った。遠山との思い出や三浦のこと。三浦は二人と同じ中学出身だった。

最終的に、告白は拒否することになった。

楠が帰る時、私は彼に聞いた。

「その幼馴染、遠山さんのことは好きなの？」

楠は俯くと、何も言わずに店を出て行ったのだ。

楠は、もう会うことはない、と思っていたのだろう。

私が楠と再会したのは、次の日の放課後、中庭でだった。ちょうど、楠が「付き合えない」と言って告白少女を振っているところに出くわしたのだ。

楠は大変驚いた様子で、暫く硬直していた。

「同じ高校だったなんて……」

「私は知ってたわよ」

楠は傍にあったベンチに腰を下ろすと、はあ、と溜め息をついた。おそらく自己嫌悪に陥っているであろう楠を見つめて、私は言った。「『クピド』はいつでも恋愛相談を受け付けております。困ったときはいつでもどうぞ」

結局、それから一度も楠は「クピド」に顔を出さなかったが。

相変わらず楠は黙ったままだ。

「別にいいけどね」

私はそう言って、楠と同じように空を見上げた。

雲ひとつない青空を、鳥が横切るのが見えた。

遠山と楠の関係はどうあれ、クラスでは遠山とのお別れムードが日に日に増していた。

クラスではいつも皆の中心に遠山はいたし、先生達も何かと彼女に接しようとした。そして、もちろん送別会の準備も進んでいた。

「場所は駅前の焼肉屋、『マリーの店』。和ちゃんの分は割り勘だから、そのつもりで。あと、プレゼントの用意も忘れずに」

三浦が図書室の本棚に手を置いて確認する。

「なあ、三浦。プレゼントって男子はどうすりゃいいんだ？ アクセサリーとか鞆とか分かんぞ」

「そうね。別に物じゃなくてもいいわよ」

それを聞いた男子達は隅に集まって、何やら討論し始めた。

「いや、それは迷惑じゃない？」

「大丈夫だって。貸切にするらしいし。おい、三浦。『マリーの店』は貸切るんだよな？」

「ええ」

「よし、それじゃあ——」

女子は女子で集まって思案顔になっている。

送別会での座席表を作っているのだ。基本は楠と遠山は隣り合わせにして、その周囲に二人とあまり接点のないクラスメイトを配置するのだが、それ以外の部分も全部決めることになっている。二人が隣同士になるように誘導するために、全員が自分の席を予め決めておく必要があるのだ。ほんとには男女別に分かれてくじ引きで決めるはずなのだが、男子だけ先にやったのをいいことに、女子は自分達で席の取り合いをしていた。

「端はまだ空いてる？」

「杉原君の隣りは？」

「駄目、道長が入ってる」

「えー。道長を別の場所に変えれないの？」

「無理よ。男子は控え持ってるから」

「くー。なら、前は？」

「いけるわよ」

途端にその席を巡って熾烈な争いが始まった。

私の席はというと、なんと楠の隣りである。楠が「クピド」にやって来た事は、皆知らないようだ。三浦は二人から離れた所に陣取

った。自分がいない方が会話が弾むとでも思ったのだろう。
遠山が引越すまで、後わずか。

週末、私は町の商店街にやって来た。この商店街には「クピド」が店を構えているが、今日はバイトではない。遠山のプレゼントを買いに来たのだ。

元々、町の商店街を一つに纏めたのがこの商店街で、端から端まで歩くと、十五分は優にかかる。いろんな店が敷き詰めており、まさに揺り籠から墓場まで、といった感じだ。「クピド」は商店街の端の端、大通りから外れて民家に入りかけた場所にある。調べると、ちよūdクピドの真ん前までが商店街の敷地となっているらしい。商店街は横に広いので、中央に縦に大通りが入っており、中心に向かえば向かうほど人気が多くなっていく。お陰で「クピド」のある所まで来る人はほとんどいない。

私が向かっているのは商店街の中央にある大型百貨店だ。私は遠山とは仲がいいわけではない。なので、小物入れ程度でいいだろう、と思ってやって来たわけだ。

商店街の中央は今日も人が多く混雑している。クラスメイトも見かけた。おそらく私と同じようにプレゼントを買いに来たのだろう。私は店に入ると小物売り場を物色した。洒落た物を見つけては、値段を確認して別の物に目を向ける。三百円以上の物は買わないつもりだったので、贈り物に使えるような物は予算オーバーになった。そんな中、目に付いたのが鉛筆コーナーだった。シャーペンほもらってもいっぱいあるだろうし、というか高いし、鉛筆なら安いし今時珍しいから他の人のとかぶったりしないに違いない。

一本七十円の鉛筆を一本だけ買って、店を後にする。

商店街の中を歩いていると、偶然蓑宮と出くわした。

私は決してクラスで浮いているわけではない。私が反発するのは

色恋沙汰だけである。だから、基本誰とでも時間は過ごせる。

ちようどお昼前だったので、私達は一緒に昼食をとることにした。適当なファースト・フード店に入って注文する。窓際の席に、私達は向かい合わせに座った。

「そういえば、もうすぐ夏休みなんだよね」

蓑宮がオレンジジュースを飲んでから言う。

「そうね。一学期をもう終わり。待ち遠しいわね」

私はジンジャエールを片手に答える。

「ねえ、奔洞さんはもう送別会のプレゼントは準備できたの？」

ちようど今選んでいたところなのだが、予算をケチって七十円の鉛筆一本で済ませたとは言えない

「まだよ。これから買おうと思っていたところ」

「私もこれからなの。よかったら、一緒に買わない？」

断る理由はなく、私達は一緒に午後を過ごすことになった。

蓑宮は元氣ハツラツ少女だった。かわいい物を見つけては歓声を上げて近寄り、値踏みする。

——いつの間にか遠山ではなく自分へのプレゼントになっていることに気付いているのだろうか？

彼女の後ろ姿を見つめながら私はそんなことを考える。

蓑宮のことは道長から聞いていたし、同じクラスメイトだったが、実際こうして話したり行動したりするのは初めてだった。

「ねえ、蓑宮さんって、休日何してるの？」

「何って、暇になったらバイトかな？」

「バイトって、道長と同じ？」

「ええ」

「ふーん」

蓑宮は右手に持ったオレンジジュースに口をつける。

昼食用以外にもう一つ買っていたらしい。

「ふーん」

蓑宮はもう一度オレンジジュースに口をつけた。

昼休み、校舎をぶらついていると、廊下の角で三浦が道長に詰め寄っていた。

「どうして手伝えないの？」

三浦が睨む。

「僕には、あの二人がくつついて、そのままずっと続くとは思えない」

道長はじつと三浦を見つめる。

「でも、二人は相思相愛なのよ。気が合わないってことはないはずよ」

「二人が互いに意識し合ってるのは認めるよ。けど、それは運命でも何でもない。十七歳という恋愛に心引かれる時期に、偶々傍にいた幼馴染に重ねているにすぎない」

――へえー。

「幼馴染という存在は特別じゃない。同じ地区に住んで、同じ高校に入学すれば、立派な腐れ縁が生まれる」

――なかなかやるじゃない。それにしても、幼馴染、ね。

「手伝うことの前提条件は、二人が相思相愛であったはずだね」

今度は道長が詰め寄る。

「――それは、奔洞さんの入れ知恵？」

「いや、本心だよ」

道長が去った後、私は三浦と対面した。

「意外だったわ」

三浦は私の姿を見ると、溜め息をついた。

「あんな風にきっぱり断られるなんて。やっぱりあなたの差し金か

しらね、奔洞さん」

三浦は私を咎める。

「さあ、どうかしら？」

心当たりはあるけど、それが原因だとは思えない。口にはしないけど。

「まあ、いいわ。それより、一つ聞いていい？」

「何？」

三浦が私を見つめる。

——何？ 約束守れとか？

「ねえ、どうして私の邪魔するの？」

「——」

——そうきたかー。いや、予想できたよね、これくらい。

「『クピド』だっけ？ バイト先。何が『恋のキューピッド』よ。

あなたが担当したというカップルは次々に破綻してるじゃない」

——「クピド」について知ってるんだ。

「私はその二人の仲がずっと続くかどうかを見て、別れるように薦めただけよ。『クピド』は恋愛相談所よ。恋愛を成功させる必要はないわ。私が手を貸すのは、ずっと結ばれる『運命の二人』だけ」

「？」

三浦が怪訝そうな顔になる。

「『ずっと結ばれる運命』？ 何それ？ そんなの分かるわけないじゃない。勝手に人の運命決めないでよ」

——ごもつとも。でもね。そうはいかないのよ。

「そうね」

私はただ相打ちを打った。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／**一章 幼馴染**／**二話 返答（後書き）**

二話目です。前回からかなり時間が経ってしまいました。基本的に一章三話ペースでいこうと考えています。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ / 一章 幼馴染 / 三話 送別会

【道長】

送別会の前日、すなわち終業式の午後、僕は奔洞に「クピド」に呼び出された。

「道長、明日、楠達の先回りするわよ」

奔洞はそう宣言した。

そして、資料室から顧客名簿を取り出して来る。僕の前に開いて見せたページには、「楠正史」の名前があった。

——楠は「クピド」の客だったのか。

「これ、いつから？」

「去年の六月」

「へえ。でも会った事ないな。それにしても、何で僕が？ それは奔洞の仕事だろ？」

「『クピド』として受けた仕事なのよ。あなただってその『クピド』の一人なんだから当然でしょ」

僕は反論せず、自分用のコーヒーを淹れた。

今日も抄吾さんは来ていない。

——客もいないんだからいいんだけど、いくら趣味でだしている店だからって、学生に預けすぎだろ。

「道長、私にもちょうだい」

奔洞がカウンター席からコップを差し出してくる。

ふと、三浦の事を思った。

——明日、楠達を後を憑けてるのがバレたら、面倒くさそうだな。差し出されたコップを掴み、コーヒーを淹れる。

「あら、今日は素直じゃない」

奔洞が驚くのと同時に、僕はコーヒーを流しに流した。

「なっ何すんのよ」

「ごめん。手が滑っちゃった」

棒読みで謝る。もちろん、コップはそのまま洗って、コーヒーは淹れない。

「はいはい、私が悪うございました」

奔洞は自分でコーヒーを淹れにカウンターに来る。もちろん、僕とすれ違いざまに足を踏むのを忘れることなく。

次の日、僕と奔洞は十時に「マリーの店」の前に集合した。皆が来る二時間前、楠達が来る一時間前という時間だ。

「って、早すぎるだろ。いくらなんでも」

「そう？ まあ、いいじゃない」

奔洞はそう言って、「マリーの店」から少し離れた所にある噴水まで歩いて行くと、設置されているベンチに座った。そして、片に下げていたバックから文庫本を取り出して読み始めた。

立って「マリーの店」に誰か来ないかときよろきよろしている僕に奔洞が言う。

「何してるの？ 突っ立ってても何もすることはないよ」

「んな、お前、それはないだろ」

もちろん僕は暇つぶしの道具なんて持って来ていない。

「じゃあ何でこんなに早く来たんだ？」

「私の親が家を出るのに合わせたからよ」

——はあー。

心の中で溜め息をつく。

辺りを見渡すといえるのはカップルが目立つ。この噴水は集合場所として使われるのと同時に、カップルの休憩場所でもあるのだ。

奔洞はベンチの右側に座っている。つまり、左側が空いているのだが。

周りのカップル達を見ていると、奔洞が空けたスペースが僕の為

に空けられたスペースに思えてくる。

周囲の雰囲気というのは面白いものだ。雰囲気しだいで相手の行動の意図がガラッと変わってしまう。周囲の雰囲気というのは本人達を作り出したものではないというのに。

もし僕がここでベンチに座れば、僕は奔洞が座っていいと承諾した、という風に思われる。となれば、奔洞は、僕が彼女は僕に気を許している、強いて言えば、彼女が僕に人間としてであれ異性としてであれ、興味を持っている、と思っていると思われだろう。

ベンチに座るか座らないか、というたった一つの選択でその人に対する感情が変わってしまう。

それが他人の作り出したものによって変化するとなると、まったく傍迷惑なものだ。

僕は奔洞の顔を盗み見る。

文庫本を読む奔洞の顔は無表情で、何を考えているのかまったく読み取れない。

結局、できるだけ奔洞から離れて、ついでに顔を見ないようにして僕はベンチの端に座ることにした。

奔洞は淡々と読書が続ける。

僕と奔洞の間は約六十センチ。ただのクラスメイトにしては近すぎるし、恋人としては遠すぎるあいまいな距離。

周りは恋人達で、ここは恋人が集まる場所。クラスメイト達が来るのは二時間後で、楠達が来るのは一時間後。

これだけの要素が集まれば、二人の間に何かが起きてもおかしくない。

けど、僕は何もせずに一時間を過ごした。

楠と遠山が来たのはほぼ同時だった。

僕と奔洞は二人が来ると、立ち上がって彼らの視界に入らないように移動した。物陰から二人を観察するのだ。

楠達は時刻を確認して、少しばかり話をしていると、店の中から店員が出て来て、二人を中に招き入れた。

「……………」

「……………」

そう、店の中に入ったのだ。

これでは外から観察することができない。楠達と同じように店の中に入るしかない。だが、それでは楠達に自分達がここに来ていることがばれてしまう。

「なあ、奔洞。どうするの？ 楠達、中に入っちゃったけど」

哑然としている奔洞に僕は言う。

「こういう展開は考えてなかったわ」

つまり、打つ手なし。

僕らはこの後さらに一時間、時間を無駄にした。

「それでは、和ちゃんの転校がよきものであることを祈って、乾杯」
三浦が立ち上がってコップを掲げる。

「乾杯」

皆がそれに続いた。

送別会が始まった。といっても、ただの食事会に過ぎないのだが。各々が思い通りに話し、食べ、時間を過ごす。

この時ばかりは、もう三浦は何も言わなかった。告白するにせよ、しないにせよ、これが遠山と過ごす最後の時になることは明白だ。送別会が始まって一時間が経った頃、遠山にプレゼントを渡すことになった。

まず、女子達がかわいい小物やぬいぐるみなどを別れの言葉と一緒に、遠山に渡していく。

女子が全員渡し終わった後で、今度は僕ら男子達が遠山にプレゼントを渡す番だ。

僕ら男子は遠山とはあまり接点がない。といって、男子だけ何も渡さないのは三浦が許さない。

僕らは前に出て一列に並ぶ。
トップバッターの松本がゆっくりと話し始めた。

「一年と数ヶ月前の春、僕達は遠山和子という女子生徒に出会った。
初めて彼女を見たとき、他の女子とは違って静かだったので、少し
安心した」

「誰が乱暴者よ」

女子の誰かが文句を言う。

今度は別の男子が口を開く。

「彼女はお淑やかで、それはもうお淑やかで、他の女子と違って女
子らしかった」

「……」

今度はあまり反応がもらえなかった。「お淑やか」を言い過ぎる
のはよくなかったようだ。

「そんな彼女と直接話す機会が来たのは、図書室に本を借りに行っ
た時だった。彼女は図書部員なのだと、そのとき始めて知った」

また別の男子が言葉を紡ぐ。

僕達からのプレゼントは、門出の言葉だった。物を渡そうにも、
男子だけでぬいぐるみを買うのは気が引けるし、そもそもどうい
うのが喜ばれるのかがよく分からない。そこで、買い物をする必要の
ないプレゼントとして、「言葉」が選ばれたのだ。出費ゼロ、失敗
背手も一人だけ恥をかくことはないこの方法は、実は楠が考案した
ものだ。台詞は皆で考えたが、楠の意見が大いに反映されている。

「彼女は誰に対しても丁寧で、気配りが上手で、かつ責任感が強か

った。そんな彼女に助けられたことが何度もあった」

女子の方も黙って聞いている。内容こそ伝えていないが、門出の言葉を使うことは予め女子に伝えてあった。

【奔洞】

また別の男子が言葉を続ける。

門出の言葉のことを聞いたとき、楠が何をしようとしているのか直感した。

だからその日の放課後、私は楠に聞いた。

「男子は遠山へのプレゼントに門出の言葉を使うらしいわね」

「うん」

「聞いたところによると、それはあなたの意見らしいけど、まさか、その場で告白するつもりじゃないでしょうね？」

「そうだよ」

楠は答えた。遠山に告白すると。

楠が遠山に好意を抱いていることは分かっていた。そして、それを恋だと考えていることも。だから、私は問うた。

「ねえ、本当に告白するつもりなの？」

「うん」

楠は先ほどと変わらずに答える。

「前に『クピド』に来たときのこと、覚えてる？ あの時にも言っただけど、その気持ちちが恋愛感情だという保障はなにのよ。むしろ、違う確率の方が断然高いわ」

私はかつて、「クピド」で楠に言ったことと同じことを言う。

あるとき楠は俯いて聞いていた。

「あなたのその感情は、幼馴染だとうことの『慣れ』が、付き合う

ことに対して安心感を生み、遠山に対して親近感を抱かせることになっっているのよ」

けどあの時と違って、今楠は真っ直ぐ私を見ている。

「他人に強制された告白は義務ではないわ。それに、一度告白してしまっただけでなかったことには――」

「奔洞さん」

楠が私の話を遮った。そして、初めて私の名前を呼んだ。

「何？」

楠は変わった。少なくとも、以前「クピド」に來た時とは違う。

楠は、私を見つめた。そして、ゆっくりと話し始めた。

「もう決めたんだ。僕はあいつを好きになった。確かに奔洞が言う通り、この気持ちは恋愛感情による『好き』じゃないかもしれない。三浦のような他人に強制されたものかもしれない。幼馴染で恋人同士という先入観が作りだした幻かもしれない」

「……」

楠が語る。おそらく楠の本音を聞けるのはこれが最初で最後だろう。

「けど、今感じているこの想いは――感じている、と思っているこの想いは、確かだから」

「……」

「十年経ったら、いや、五年経ったら、もしかしたら明日、この想いの正体が分かるかもしれない。けど、この想いを「恋」だと思ったことは、なかったことにはできないんだ」

楠は遠山とは幼馴染だ。だからこそ、人間愛と異性愛の区別がつき難い。時間が経てば経つほど、その判別はよりあいまいになり、自分の本音が分からなくなる。

私には視ることしかできない。サポートはできても、実際に決めるのは結局本人達でしかない。

「ねえ、奔洞さん。僕らはいつ『恋』をしたことに気付くか分かる？」

ふと、楠が聞いてきた。

「自分で悟ることはできないわ。テレビや小説、漫画などを通して、私達は『恋』という感情の大体の形態、パターンを知り、周囲の反応や言葉で、それが『恋』なのだと仮定する」

私が答えると、楠は予想通り、という風に頷いた。

「そう。僕らは『恋』を知識として識っていても、本当の意味で知ることができない。そして、僕らの持つ『恋』の情報は全て外部から与えられたもので、自ら得たものなんてない。だから、僕らは信じるしかないんだ。自分のこの想いを」

楠はそう言って、立ち去ったのだった。

今、目の前で言葉を紡ぐ楠を見て、私は彼を哀れに思う。

楠は「恋」は外部から与えられたものと言った。楠は、自分の直感を信じた。自分の感情を否定しておきながら。おそらく、本来ならもっと時間を隔ててから結論をだすつもりだったのだろう。けれど、時間は楠を待ってはくれなかった。ただそれだけ。それだけのことで、楠は結論を出さざるをえなくなったのだ。それまで慎重に積み上げてきた遠山との「ちょっと気になる幼馴染」という関係を犠牲にして。

まさに、「運命」の悪戯。楠は運がなかったとしかいいようがない。

告白したらなかったことにはできない。かといって、告白しなければ何も変わらない。

本来なら自らの意志によって踏み出さねばならない一步を、楠は「期限」という外部事情に身を任せて進んだのだ。

私は誓う。私だけはそうならない、と。

【道長】

楠が想いを紡ぐ。幼い頃から共に過ごしてきた者に向かって。

三浦の依頼を断ったあの日、去り際に彼女が言った。

「ねえ道長。あんたと奔洞さんってどういう関係なの？」

「別に何も無いよ。ただのバイト仲間」

「そう？　でも、奔洞さんとあんない会話ができるのって、道長くらいよ。この意味、分かってるの？」

「……」

僕は黙って三浦の次の言葉を待った。

「少なくとも、奔洞さんの方は気があるんじゃないかしら？　私にはそう見えるわ。たぶん、蓑宮もそう思っている」

三浦は僕と奔洞と蓑宮を関連付けようとする。

「蓑宮は関係ないだろ」

「いいえ、関係あるわ。ねえ、道長。蓑宮のことをいつまでも知らない振りはできないのよ。そして、それは奔洞さんも同じ。心の準備はできてるの？」

三浦は僕に問うた。蓑宮と奔洞、どちらが好きなのかと。

蓑宮は僕の幼馴染で、気心も知れ、困る要素は別にない。蓑宮が僕の家の際にすんでいたのは、「運命」によるものなのか？

奔洞とはバイト仲間で、そうなったのは偶然によるものが大きい。それは、「運命」的とも言える。

僕は決めている。結ばれるのなら、その相手は「運命」ではないといけない、と。

【楠】

「遠山とは、幼馴染で、いつも近くにるのが当たり前で、転校するって聞いたとき、本当に実感が湧かなかった。

けど、だからこそ僕は分かった。遠山が僕にとってどれだけ日常

に組み込まれていたかを。もう僕は、遠山なしでは僕ではなく別の僕になってしまうほど、遠山に依存していたんだ。

遠山、僕は君が好きだ」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／一章 幼馴染／三話 送別会（後書き）

一章は完結しました。

まだまだ続くので、楽しみにして下さい。

【奔洞】

私の仕事は、多いときは月に一度のペースで持ち込まれる。実際は、それ以上の申し込みがあるが、私が断っているのだ。

私の仕事は大まかに三段階に分かれる。

まず、現状視察。相手側に恋人はいないのか？ 恋人はいなくても想い人は？ そもそも依頼主に少しでも可能性はあるのか？ この段階で私が無理と判断した場合は依頼主にその旨を伝え、できるだけ退いてもらう。

次に、恋仲形成。手段を問わず、依頼を完遂する。

最後に後日支援。アフターケアは万全に。それが「クピド」の売り文句。

今まで私が手掛けてきたカップルは計十二組。その内、天原高校のカップルは半分。理由は簡単。自分の通う学校の生徒の方が楽だからだ。この辺りで共学の高校は二つしかない。

そして今、私と道長の目の前では、クラスメイトの松本が愛を語っていた。

「最初はそんなつもりはなかったんだよ。ただの隣席のクラスメイト。それだけだったんだ。あの日までは。

あの日、俺が落とした消しゴムを拾ったのがきっかけで、俺らは会話をする仲になった。最初は他愛もない世間話だったのが、次第に身の上話になっていった。

けど知っての通り、秋山は誰とでも分け隔てなく話す奴だから、最初は俺もその他大勢の一人だと思ってたんだ。

それが変わったのは、今年のクラス替えの発表のとき。あのとき、秋山は俺にこう言ったんだ。『よかった』って。しかも極上の笑み付で。

そして迎えた一学期の席替え。俺の隣はなんと、あの秋山。去年から同じクラスで、去年も隣の席で、気になってしょうがないあの秋山が、俺の隣になったんだ。

これはもう、『運命』でしかないでしょう。これを『運命』と言わずに何と言う？」

「……………」

「……………」

私と道長は互いに顔を合わせる。私達二人の顔には疲労が浮かんでいるだろう。

松本が語りだしてから約二十分。その間、松本の話は途切れることなく、秋山がいかに素晴らしいかを熱弁している。今はちょうど秋山との出会いを語っているところだ。

「俺のこの熱い想い、分かってくれたか？」

松本が肩で息をしながら聞いてくる。

「熱いわね」

「じゃあ——」

松本が顔を輝かせる。

私は松本の顔の前に手をおいた。

「でも、これはこれ。それはそれ。最初に言った通り、依頼を受けるかはすぐには判断できない」

私は松本に二度目の待機を言い渡す。

「それは、俺には見込みがないってことか？」

「そうじゃなくて、様子を見させて、って言ってるの。相手の方を見てみないには何とも言えないわ」

松本は私を説得するのは諦めて、道長に顔を向けた。

私は道長の足を踏む。

「僕の仕事は恋愛相談じゃないから」

その後、二十分にわたり松本は交渉してきたが、私は断固として首を振らなかった。

松本が帰った後、私にコーヒを淹れながら道長が聞いてきた。

「なあ、どうして依頼を受けないんだ？ 奔洞なら余裕だろ」

「依頼は受けるわよ」

私はコーヒーを受け取って、口をつける。

「じゃあ、何であんな思わせぶりなことを言ったんだ？」

「その方が向こうもやる気になるでしょ」

「十分やる気だと思うけど……」

「まあね。でも、それだけじゃ駄目なのよ」

それらしいことを言って、誤魔化す。

私はコップを置いて、道長の方を向いた。

「ねえ、道長。落とした消しゴムを拾ってもらっただけで、その人を好きになれると思う？」

「それは、松本のこと？」

「そう」

道長はコップを洗う手を止めて、考える。

「うーん。消しゴムを拾っただけっていうんなら無理があると思う。でも、松本の場合、それは原因じゃなくてきっかけだろう？ それだったら、まあ、普通かな？」

「まあ、普通はそんなもんよね」

「何？」

「いや、何でもないわよ」

道長は首を捻りながら食器洗いを再開する。

今日もお客はいない。新島さんもない。道長が洗っている食器は私と彼のお昼に使った物だ。遅いお昼が終わったときに、松本が来たのだ。

「奔洞ー。依頼を受けるのは分かったけど、見込みはあるのか？」

「私が依頼をこなせなかったことがある？」

私は自分のコップを道長にカウンター越しに渡す。

「いや。でも、松本が言ってた通り、秋山って、誰とでも話すし、勘違いってこともあるだろ？」

「だから、それを調べるんでしょ」

「？」

道長が頭を傾げる。

まあ、調べるまでもないんだけどね。

私は鼻歌を歌いながら雑誌を手にとった。

調べるまでもない。私は道長にそう言った。

勘違いかどうかは問題なのではない。どうであろうと、結果は分か
りきっているのだから。

そう、私には分かるのだ。秋山と松本の未来が。

私、奔洞智美には、「運命の赤い糸」が見える。

「運命の赤い糸」。結ばれる運命の二人の小指は決して切れるこ
とのない赤い糸で結ばれているという。その「赤い糸」だ。

いつから視えたのかは分からない。もしかしたら、最初から見え
ていたのかもしれない。どちらであろうと、視えることには変わら
ないのだけど。

「赤い糸」は伝承通り、男女の小指と小指に繋がれている。そし
て、常に最短距離を保っている。「赤い糸」は伸縮自在だが、直線
が曲線になることはない。「赤い糸」は物体を通り抜けて存在して
いるのだ。

伝承では仙人は「赤い糸」を自在に操っているが、残念ながらそ
うはいかないのが現実である。

まず、「赤い糸」が見えるからといって、簡単に運命の人が分か
るわけではない。地球上に存在する人類は六十億人以上だから、単
純に考えても「赤い糸」は三十億人以上ということになる。目の前
は「赤い糸」だらけで、どれがどれか分からない、というのが現状
だ。幸い、「赤い糸」は半透明だったおかげで、目の前が見えなく
なる、ということはないが。

又、「赤い糸」を辿ることは難しい。「赤い糸」は半透明で、物

体を通り貫け、無数に存在する、という性質上、互いに重なりあっているのだ。だけど、すでに存在するカップルが「赤い糸」で結ばれているかどうかの確認は容易い。二人が互いに接近してくれたら、「赤い糸」も見分けることが出来るからだ。

勘違いされているが、カップルの全てが「赤い糸」で結ばれているわけではない。というより、結ばれている者は少ない。熟年の夫婦でさへ、「赤い糸」で結ばれている者は滅多にいないのだ。

それまで「赤い糸」について、私は感覚的にしか捉えていなかった。そこに現れたのが、新島さんだった。

新島さんによると、「赤い糸」とは情報を人間が捕らえたときに認識するために脳が作り出した幻想らしい。人間の体は、絶えず何らかの情報を発信している。言葉はもちろんのことながら、顔の表情、服装、最近では電波なんかも飛ばしていたりするそう。DNAには匂いがあるとも言われている。

私達は、情報を発信している。その中に、自分が求める理想の相手像というものがあるそう。それはその人が思考したものではなく、その人の脳が直感的に想う理想像である。そしてもう一つ、自分を伝えることを目的としたものもある。これも、本人が思考したものではない。この二つの波長がそろっているのを感じたとき、当事者達の脳はそれを記録し（記録された波長の持ち主と遭遇したとき、脳がなんらかのシグナルを送る）、私達能力者がそれを感じたときは、脳がそれを伝えるために「赤い糸」という幻想を見せるのだ。

「赤い糸」は誰もが視ることができないわけではない。自らの波長の一致は感知できても、それは通常脳に記録されるだけで、「赤い糸」という幻想を見せることはない。選ばれた者だけが、その能力を持っているのだ。

「赤い糸」を視ることのできる人間には二種類いる。

一つは遺伝的に受け継いだ者。新島さんなんかそう。彼らは、その能力を血筋と共に受け継いできたらしい。けど血筋が増えるに

従って能力の質は薄くなり、今ではこの手の能力者は日本に五人ほどしか残っていないらしい。

そしてもう一つは、私のような突発的に能力が開眼した者。もともと人間はこの能力を持っており、数が増えるのと反比例して能力の質が落ちていったとされている。質は落ちて使い物にならなくなったものの、脳には記録されており、それがなんらかの拍子に目覚めることが稀にあるらしい。そして、そういった者は能力の質が優れていることが多い。

能力者は「赤い糸」が視えるわけだが、全ての「赤い糸」が視えるわけではない。もともと「赤い糸」を視るという行為自体が難解であるため、能力者が「赤い糸」を視ることができるのは、当事者達が現実でも結ばれていると認識している場合のみである。そのため、能力者達は恋愛の運命の当てる者ではなく、想い人を当てる、現状を認識する者として存在してきたのだ。よって、能力者達が世間的に注目されることはなかった。能力者は、せいぜい勘の鋭い人間、もしくは観察力がある人間としてしか認識されていない。

最初その話を新島さんから聞いたとき、私は違和感を覚えた。なぜなら、私には全員の「赤い糸」が視えたからだ。私は、当事者達の認識に関係なく波長が一致した全ての波長を「赤い糸」として感知することができたのだ。

新島さんはそのことを確認すると、私に「クピド」で働くように勧めてきた。「クピド」で恋愛相談師として働くことで、「赤い糸」の効率的な運用を身に付けてみないか、と。

そして私は高校生になって正式に「クピド」で働くようになり、今に至るわけだ。

このことはもちろん道長には話していない。話せるわけもない。なぜなら、私と「赤い糸」で結ばれているのは、紛れもない道長なのだから。

翌日から、私は秋山と松本に関する情報収集を行った。

といっても、そんな大掛かりなものではない。「赤い糸」が視えるといっても、私は一介の女子高校生にすぎない。やれることといえば、友達と話をしたり、習い事をしている知人の帰宅を待ちぐせして、それとなくそういう話にもっていくことだけだ。

そんな地道な努力を重ね、大まかな状況は把握できた。

確かに、去年から秋山と松本はたびたび接触しているようだ。周りもそれとなく二人を認知している。

でも問題はそこじゃない。要は、二人の間に「赤い糸」があるかがポイントなのだ。恋人が全員「赤い糸」で結ばれているわけではない。「赤い糸」で結ばれた者が必ずしも恋人であるとは限らない。しかし、恋人でも「赤い糸」で繋がれていなければ、いつ二人の仲が崩壊してもおかしくない。今恋人でなくても「赤い糸」で結ばれていさえすれば、いつ恋人になってもおかしくない。

聞くところによると、現在秋山は誰とも付き合っていないらしい。この状況でもし松本との間に「赤い糸」が確認されれば、イベントを用意して、状況を整理してやることで、二人は晴れて恋人になることができる、はず。

秋山と松本の「赤い糸」を確認するには、二人の距離を物理的に縮める必要がある。だが、あいにく今は夏休み。教室内ならともかく、夏休み中となると二人の物理的接近はなかなか望まれない。私としては二学期になってから行いたいのだが、「クピド」の宣伝で「依頼から一ヶ月以内に必ず完遂」としてしまっている。夏休みは残り一ヶ月もあるのだ。行動するしかない。

私は携帯電話を取り出して、道長に電話をする。

「とにかく、自然な感じで集められない？」

「うーん。男子の方は大丈夫だと思うけど、女子の方がなー。なあ、奔洞って、いつもどんな奴らと一緒になんだ？」

「別に、そこまで親しいグループはないわよ。って、私は影から観

察できればそれでいいから」

「あ、そう」

こういうとき、道長は助かる。私は、「赤い糸」が視えたせいであまり人と親しくなりすぎないようにしていたときがあった。今はそれほどでもないが、そのときのくせが抜けないのか、中学時代の噂のせいか、高校になっても親しい友人はいない。せっかく買った携帯の登録画面の一番上は、恋人でもなんでもないただのバイト仲間の道長だし、休みの日に映画館や遊園地に行った思いでもない。虐めにあっているわけでもなく、無視られるわけでもないけど、人付き合いは上手くない。

——だからまだ恋愛相談なんてやってるのかな？

たまにそう思うことがある。「赤い糸」については、新島さんのお陰で知識も得たし、扱いにも慣れた。何もいつまでも「クピド」いつくことはない。それに、私はこの力を使うことが好きではない。「赤い糸」は恋愛の「運命」を私に教えてくれる。それは何があっても変わることのない輝かしい未来で、何があっても変えることのできない残酷な未来なのだ。私は常に、未来と上手く一致しなかったばかりに訪れる不幸を取り除くため、「赤い糸」が視せる未来に自分の行動を合わせている。私の選択には失敗などなく、結果は予め分かっている。絶望もなければ感動もない。ルールの上を歩く私の人生は、何の思い入れもない。親しくなればなるほど、私は「赤い糸」に頼って不幸な未来を回避しようとする。私は自分の行動を型にはめ、周りの行動を制御しようとするはめになってしまうのだ。

私が他人と関わり合える場所、「赤い糸」を上手く利用できる場所は、ここしかないのかもしれない。

道長のお陰で、男女合計十人が集まった。

私は秋山と松本の物理的接近を図りたい。かといって二人を呼び出しては後々面倒くさい。だから、道長にクラスメイトを集めてもらったのだ。

この後、彼らはボーリングやらカラオケやらに行く予定になっているらしい。らしい、というのは、遊ぶのは私じゃないから、と言って道長に決めさせたからだ。道長達が遊んでいる間に一度でも秋山と松本が接近してくれたら、今回の目的は達成される。道長には、離れる方が周りの雰囲気にならずに冷静に観察することができる、と言ってある。

私は集合場所の駅前の噴水から少し離れた所で道長達を観察する。今日集まった男子は、道長、松本、女子に人気な杉原、その他女子受けが悪くない小林と時田。女子の方は秋山に場を盛り上げる三浦、その他活動的な古泉、松山、河井の三人。

全員が集まった所で、彼らは映画館に向かった。どうやら最近流行の Comedy 映画を観に行くようだ。

私は彼らが仲良く館の中に入った後で、一人寂しくチケットを買う。周りの目は気にしない。気にしていたら、やってられない。

後で腹癒せに道長を殴ることだけを考えて、私はしつこいナンパに耐える。

結局、秋山と松本が隣同士に座らなかったで「赤い糸」は確認できなかった。

次に道長達が向かったのはゲームセンター。

私は少しほっとする。ゲームセンターなら一人でも浮くことはない。その代わり、道長達に見つかる可能性が高くなるが。

道長達はプリクラを撮るらしかった。

――よし、プリクラなら密着する。

私はユーフォーキャッチャーの陰で息を潜める。

十分後、結果は失敗に終わった。

プリクラを撮るときに閉めるカーテンが邪魔で、「赤い糸」は確認できなかったのだ。

後で腹癒せに道長を殴ることだけを考えて、私は初めてのゲームセンターでの誘惑に耐えながら道長達を観察する。

最後に道長達が向かったのはボーリング場。ここで男女ペアになって五組の勝負をするそうだ。

秋山は杉原と、松本は古泉と組んでそれぞれ第三、第四レーンで行う。

隣同士だから今度こそいける、と思ったが、そうはいかなかった。まず、順番が逆だった。秋山の方は秋山から、松本の方は古泉から投げていたので、投げるときに隣同士になることがなかった。

次に、二チーム内側の席に座ったのが杉原と古泉だった。そのため、待っているときも秋山と松本の間には必ず杉原と古泉のどちらかがいた。

後で腹癒せに道長を殴ることだけを考えて、私は自分も初めてのボーリングをしたい気持ちを抑えて、道長達を観察した。

結局最後まで杉原と古泉が邪魔になって、秋山と松本の「赤い糸」は確認できなかった。

その日、帰宅時になってやっとチャンスが巡ってきた。

今日集まったメンバーの中で、駅の北側に帰るのは秋山と松本だけだったのだ。

私はやっと得られた今日の成果に満足する。

私は携帯を取り出すと、道長に電話した。

「道長、今どこ？」

「ん？ 今皆と帰ってるよ。あ、ごめん、先行ってて」

「何？ どうかした？」

「いや、こっちの話。んで、何？」

「松本に連絡して。依頼を受けるって」

「分かった。って、しまった。見失った。悪い、切るで」

道長が電話を切った。

私は携帯をポケットにしまうと、鼻歌を口ずさむ。

「赤い糸」はあった。

けど、そんなことはどうでもよかった。

次の日から、松本が「クピド」に通うようになった。

毎日「クピド」に来ては、私と秋山について話し込む。道長は恋愛相談師ではないので、隅で食器を洗っていた。時折こちらを向いてはすぐにもとに戻る。なんとなく、その瞬間が好きだった。

そんなある日、私はふと道長に聞かれた。

「なあ、奔洞。僕や松本が集まった日があっただろ。あの日、僕何かした？」

「ん？ どうして？」

「いや、次の日、奔洞に物凄く背中蹴られたんだけど……」

私はふふふっと笑う。

「さあね。分からないあんたが悪いんじゃないの？」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／二章 隣同士／一話 赤い糸（後書き）

二章が始まりました。今回は奔洞がメインです。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ / 二章 隣同士 / 二話 祭り

【道長】

夏休みも残り一週間と少しになる八月二十日に、僕の住んでいる町では月遅れの盆踊りがある。この祭りは踊りも踊るが、出店もかなり出る、町の一大イベントとなっている。もちろん、恋人達にとっても一大イベントである。

松本が「クピド」に通いだしてから一週間が経ったある日、奔洞が盆踊りに行こうと言い出した。

「行くなって誰と？」

僕と行くの？とは聞けない。

「あんたと行くのよ。他に誰がいるっていうの？」

——え、それ本当？

「確かにあんたは恋愛相談師ではないけど、その前に『クピド』の店員なんだから。ちゃんと自覚持ちなさい」

——あ、松本の件ね。まあ、そうだよね。

「何落ち込んでるの？　もしかして誰かと先約あった？」

——いやいや、ありませんよ。

「と、聞いてもらえるうちが花よ」

——うっせい。

「とにかく、ちゃんと予定空けといってね。遊びじゃないんだから」

盆踊りに女子と行くのは、実に八年ぶりだった。

小学二年生までは、幼馴染の蓑宮と一緒に行っていたが、茶化されたのが嫌で、四年生からは男子友達と行くようになったからだ。

まあ、その後蓑宮は蓑宮で女友達と一緒に祭りに行っているらし

いが。

そんな話が出たのは、蓑宮の家に回覧板を持って行ったときだった。

玄関の前で蓑宮と立ち話をしていたら、盆踊りの話題になったのだ。

「そう言えば、杉原が誰と行くか知ってる？」

「ん？ 杉原？ 誰と？」

蓑宮は少し自慢げに言う。

「あの、長谷川先輩と」

「え、長谷川先輩と付き合ってたの？」

美人の長谷川先輩は、僕と蓑宮と同じ中学出身だ。僕ら三人は同じ陸上部だったので面識がある。蓑宮と長谷川先輩は今でも陸上を続けおり、親しかったはずだ。

「へえ、長谷川先輩、付き合うことにしたんだ。中学の頃は『男より部活』って言ってたのに」

二回告られるところを見たことがある。聞いたところによると、毎年二回は告られていたらしい。全部振ったと言っていたけど。

「うん。最初はそうだったんだけどね。杉原を見たとき、ビビビってきたんだって」

「一目惚れってやつ？」

「そうじゃない。杉原ってかっこいいし。女子に人気だし」

僕は時間を確認する。立ち話が始まってからすでに二十分は経過していた。

蓑宮は昔から、立ち話をし始めるとなかなか終わらない。かといって、長くなるからと家に上がらせてもらえば、余計に帰れない。

蓑宮の立ち話に捕まったら、最低三十分は覚悟しないといけない。

——まったく、どこのおばさんだ。

「そうそう、道長は今年も盆踊り行くんだよね？」

「うん」

「どうせ、今年も花のない男どものグループで行くんでしょ？」

本当は蓑宮と行くのだけだ。

でも、なんとなくそのことは言わない方がいい気がした。

「ま、まあね」

「まったく、いつになったら誇れる幼馴染になるの？ あんたの告別式で、親族以外の代表なんて私嫌よ。葬式なんて面倒くさい」

嘘か本当か分からないけど、そういうことを言うのは止めてほしい。なんか現実になりそうで。

盆踊り当日は晴れだった。

祭りは夕方五時から行われる。盆踊りが始まるのは七時からで、売店が閉まりだすのが十一時。盆踊りの後は花火大会があるので、この時間になる。

僕と奔洞は駅の南口で待ち合わせをしていた。駅には浴衣姿の祭り客が溢れている。そんな中、奔洞を見つけたのは簡単だった。

やって来る奔洞を見て、僕はずっとこけそうになった。

「って、浴衣じゃないのかよ」

奔洞は周りの客と同じ浴衣ではなく、いつもと変わらぬ普段着だった。

「何？ 浴衣だと思った？ 残念でした」

さあ、行くわよといって、奔洞は僕の先頭を歩き出す。

——まあ、そうだよな。隣を歩くわけないか。

一般男子高校生としての些細な望みはあっけなく絶たれた。

盆踊りの会場は駅から歩いてすぐの場所にある大きな市民公園で行われる。

僕は誰かに自分の姿が見られないかびくびくしながら会場に向かった。女子と一緒に祭りに来ていたことが知れば、後でどんな噂になるか分からない。

歩きながら、奔洞が僕に今回の作戦を説明した。

今回の盆踊りはあくまで秋山と松本の仲を取り持ったためであって、自分達が遊ぶためではない、と奔洞は最初に断った。それゆえに、僕は終始秋山達を見守らないといけないらしい。

「ということは、松本は無事秋山を誘えたんだ？」

奔洞が盆踊りに行くと言い出したとき、最大の難関がこれだった。連れ出す理由がまったく思い浮かばないからだ。まさか、告白するためとは言えないし。かといって、秋山を誘う勇気もない。そんなことができたとしても「クピド」になんてやって来ない。

「ああ、それは大丈夫よ。私が呼んどいたから」

「呼んだって？」

「だから、最初は四人で回って、途中で分かれるのよ」

「ふーん。で、どこに集まるんだ？」

僕は周りを見渡す。周囲は浴衣姿の祭り客で一杯で、秋山や松本の姿は見えない。

「そこよ」

そう言って奔洞が指差したのは、迷子のお知らせセンターだった。

奔洞と違って浴衣姿の秋山と、私服姿の松本が目の前で歩いている。

祭りは人が多くて四人並んで歩くことができないため、目の前の二人の後を僕と奔洞が歩くという格好になった。

目の前の二人の会話はまったく弾まない。

「祭り、いつも来るの？」

「うん」

「……」

「……」

弾まない。

というか、普通もうちょっとくらいは会話が成立するだろう。そ

れに、秋山も松本もいつものらしくない。

——互いに意識しているのか？

僕は、隣の奔洞の肩を突っ突く。

「なあ、奔洞」

「……」

「奔洞？」

僕は奔洞の目の前に手を翳す。

「あ、何？」

——こいつ、周りの出店に気を取られていたな。
そのことには触れずに、質問する。

「どうやって松本の気持ちを秋山に伝えるんだ？」

「どうって、告白するに決まってるじゃない」

「そのためのシチュエーションとか、告白する言葉とか」

「そういうのは本人が決めるんじゃないの」

奔洞はちらちらと僕の後ろの屋台に目を向ける。

心ここにあらず、といった感じだ。

——そんなに遊びたいのか？

僕は前に行く二人を呼び止めた。

「ねえ、金魚すくいでもない？」

振り返る二人に、奔洞が見ていた屋台を指差す。

屋台のおじさんにお金を払って、僕達は水槽の前にしゃがみこんだ。

「金魚すくいかあー。こういうのは、久しぶりだな」

松本が腕を捲り上げる。

「よーし、いっぱいとりぞ！」

——頑張れ、松本。秋山にいいところ見せろ。

秋山の方は真剣に水槽の中の金魚を見つめている。

——すくわないのかな？

秋山を見ていると、水槽の上に待機していた彼女の右腕が一瞬で、的確に金魚をすくい上げた。

残念ながら、松本の勇姿よりすくい上げる金魚の方に秋山は目がいつているようだ。

金魚すくいに熱を入れるのはいいんだけど、「一匹」、「二匹」、と呟くのは止めてほしい。

——完全にキャラ違ってるよね？

反対側にいる奔洞の方は、初めてなのか、秋山とは違った意味で金魚に目が言っていた。

「ねえ、道長。本当にこれで金魚がすくえるの？」

信じられない、といった風に渡された物を見つめている。

「秋山を見てみる。ちゃんとすくえてるだろ。落ち着いてやればできる」

僕はなんの根拠もなしに適当に言ってみた。

「よし」

奔洞は年頃の女の子らしい気合を入れた。

得物を慎重に金魚に近づける。まだ金魚に気づかれてはいない。

僕も奔洞と一緒に息を止める。

緊張の一瞬。

風が吹いたときが、合図になった。

奔洞の得物が右から左へ、正確に金魚の腹の下へ滑り込む。

が、金魚は水の中にいるわけで。

得物には水の抵抗が掛かるわけで。

奔洞は一度も得物を水につけてなかったわけで。

初めての水の重みに傾いた得物は、そのまま金魚横腹に突き刺さった。

「え？」

流れ出したのは金魚の血潮。

口から漏れたのは乙女の悲鳴。

それは、一匹の金魚が生きた証だった。

「そんなに落ち込むなよ」

「……………」

「まあ、あれだ。金魚も疲れてたんだよ」

「……………」

「思い出にもなったし」

「……………」

「……………」

金魚事件の後、奔洞は黙ったままだった。よっぽど、ショックだったのだろう。

奔洞には悪いけど、あの事件のお陰で、秋山と松本の間にあった気まづさがなくなった。

「松本達も肩の力が抜けたようだし。他に誰も見てなかったし」

「——私ね」

「ん？」

「分かったの。金魚すくいがなんたるものか」

失敗がよい経験になったのかな？ だったら、めでたしめでたし。

「金魚すくいって、「金魚掬い」じゃなくて「金魚救い」だったのよ」

「——はあ？」

「金魚すくいの金魚って、ずっと水槽の中にいるわけじゃない。お客が金魚を獲ろうとするたびに、金魚は弱っていくわけでしょ？ で、売れ残った金魚は捨てられちゃう。だからね、私達はそんな金魚を水槽の中から救い出して、不幸な未来を取り除いてあげないといけないのよ」

「……………」

かわいそうなことに、奔洞の頭のネジはどこかおかしくなっちゃったようだ。

——それとも、やっと年頃の女の子ぽくなったのか？

どっちを聞いても結果は同じなので、何も言わないことにする。

それから暫く、奔洞は黙ったままだった。

前の二人は楽しそうだけど。

俯きかけの顔が上を向いたのは、射的屋台の前を通り掛かったときだった。

「ん？ やりたいの？」

顔が上がった奔洞に気づいて、聞いてみる。

「ねえ、射的やらない？」

僕を無視して、奔洞は前の二人に聞いた。

僕らはそれぞれお金を払って、鉄砲を受け取る。

弾の込め方を聞いてくる奔洞にやり方を教え、僕は鉄砲を構えた。残っている商品で一番高そうなのは、プラモデルのケース。

一番倒し易そうなのは、チョコの箱。

持ち球は十発。

僕は小手調べに、一番簡単なチョコの箱を狙う。

引き金に力を込める瞬間、チョコの箱が隣から飛んできた弾に当たって倒れた。

松本は次弾装填すると、その隣にあったガムの箱も落とした。

僕は出来るだけ松本から離れた位置の商品を探す。

松本と反対側にキーホルダーサイズのぬいぐるみを見つけると、今度こそ狙いをつける。

目を細めたら、ぬいぐるみが倒れてしまった。

眼力で倒したのではなく、誰かに横取りされたのだ。

秋山は手に入れた商品を受け取ると、ポケットにしまった。

僕は仕方なく、正面にあるぬいぐるみに目を向ける。

大丈夫。松本も秋山もそれぞれ別の物を狙っている。

狙いを定める。すでに誰かが挑戦したのか、ぬいぐるみの右足が棚から落ちかかっている。

まず、完全に右足を落としてしまう。それから本体を狙えば、斜めに落ちるはず。運がよければ他の商品も巻き添えにできる。

肩の力を抜く。邪魔はない。ぬいぐるみの足に弾が当たるところ

をイメージする。

「よし」

僕は引き金に指をかけた。

乾いた音がして、僕の頭に弾が当たった。

僕は弾が飛んできた方を向く。

「ごめん」

やけに素直な謝罪をしたのはもちろん奔洞。

「まあ、初めてならしょうがないよ」

いや、初めてでも頭には普通当たらないだろ、とは言わないでおく。

気を取り直してぬいぐるみに目を戻す。

すでにぬいぐるみは他の誰かの手によって落とされていた。

——無念。

ふと、秋山達の方を向く。二人とも全弾使い果たしたようだ。

残っているのは、今だ一発も撃っていない僕と、一発しか撃っていない奔洞。

残っている商品で手っ取り早く落ちそうなのは、お菓子の箱。

僕は今度こそ、と狙いを定める。

乾いた音と共に、お菓子の箱が落とされる。

店のおじさんはそれを奔洞に渡す。

僕の手元には今だ十発の弾が残っている。

まずい。僕以外の三人はすでに何らかの商品を手に入れている。

しかもさらにまずいことに、僕の目の前に棚には、後ぬいぐるみ一つしか残っていない。この店のルールは、立ち居地を変えてはいけないことになっている。道幅が狭いため、しょっちゅう変わっていると、通行客の邪魔になるからだ。

ぬいぐるみはまったく動いた形跡がない。誰もまだ狙ってはいないということだ。

僕はまず、ぬいぐるみのお腹に向けて、一発放つ。

ぬいぐるみは少し揺れた。どうやら結構重そうだ。

本来ならここで連射したいところだが、隣にはまだ奔洞が残っている。連射している最中に横取りされてはかなわない。

奔洞がぬいぐるみの右足に一発撃つ。

むいぐるみは少し右足を後ろに下げる。けど、まだ落とすには距離がある。

次に、僕がぬいぐるみの左足を撃つ。ぬいぐるみは全体的に後退する。

僕は勝負に出た。

ぬいぐるみの頭部を二回撃つことで、ぬいぐるみをその場で倒す。奔洞は今のところ弾が命中しているが、初めてなのは見て分かる。なら、当てる面積が小さくなれば、僕より外す可能性は高くなるわけだ。

そこからは何故か互いに交互に撃つという暗黙のルールに従って、少しづつ、持ち弾を減らしていった。

後、一発か二発でぬいぐるみは落ちる。

ここまでするのに、僕は三発当てて、二発外し、奔洞は一発当て、四発外している。

次は奔洞の番。

奔洞の放った弾がぬいぐるみを掠る。

外れ。

僕はぬいぐるみに鉄砲を向ける。

最後の一発。これで外れたら、二百円がばあになる。

引き金を引く。

放たれた弾はぬいぐるみに当たった。

ぬいぐるみはゴロリと動き、落ちそうになる。

けど、落ちそうになるだけで、結局は落ちなかった。

僕はため息をついて、鉄砲を店の人に返した。

その後奔洞が三発撃って、最後にぬいぐるみを落とすことに成功した。

「そんなに落ち込まない」

「……………」

「まあ、あれよ。金魚すくいで疲れてたのよ」

「……………」

「思い出にもなったし」

「……………」

「……………」

先ほどとよく似た会話。話している人は違うけど。

けど僕は奔洞と違うから、すぐに会話を続ける。

「次どこ行く？」

前に行く二人の方を向いて、でも本当は奔洞に聞いた。

「そうね」

と奔洞は思案顔になる。

頭で考えているというより、自分自身に聞いているといった感じだ。まあ、実際そうなんだろうけど。

今回の奔洞の行動には、いつもと違和感があった。

実は、奔洞に強制的にこうやって連れ出されたのは初めてではない。まあ、以前はこうやって依頼主と一緒に行動するのではなく、陰に隠れて指示を出すのが仕事だった。

今回奔洞が僕に指示したのは、秋山達と一緒にいて、盆踊りが始まるまで時間を潰すことだった。要は、遊べと言っているのである。

——けど、最初に「これは仕事だ」とか言っていなかったっけ？

今までの奔洞の仕事内容を全て覚えているわけではないけど、僕の記憶が正しければ、彼女はいつも告白の言葉や振舞い方、目のやり所などにもレクチャーしていた。なのに、今回の仕事ではそういう言葉をまったく聞かない。僕が聞き逃しているということもありえなくはないが、松本とは「クピド」にいるときはいつも同じ部屋にいたのでその可能性は限りなくゼロに近い。少なくとも一二回は

聞いているはずなのだ。

気になって、何回か奔洞に聞いてみたことがある。

そしたら奔洞は「大丈夫。やり方はそれぞれよ」と言って、その話は打ち切りになった。

——でも、いくら何か言ったところで、何か思ったところで、僕は恋愛相談師じゃないから関係ないんだけど。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／**二章 隣同士**／**二話 祭り（後書き）**

二章も架橋に入りました。次でこの章は終わりです。

【道長】

七時になった。盆踊りが始まる時間だ。

祭りの客達は皆、広場に集まり始める。

もちろん僕らも広場に向かった。

広場の中央には太鼓が据えられ、町内会のお兄さん達が声を張り上げながら打ち鳴らしている。

最初の一時間くらいは、いくつかの団体グループが予め決められていた通りに順番に踊る。基本的に地区同士の勝負みたいになっているが、それ以外の団体も毎年踊る。

今回最大の人数であろうチームが踊っているのを見ながら、僕らは休憩していた。

「はい」

僕は頼まれたコーヒーの缶を奔洞に渡す。松本には炭酸飲料、秋山にはオレンジジュースだ。

「凄い人だかりだったよ」

僕は三人と同じようにベンチに座って、自分の缶を開けた。僕は奔洞のと同じコーヒーだ。

「お勤めご苦労様」

松本が労ってくれた。秋山もお礼を言ってくれた。奔洞は遅いと文句を言ってくれた。

僕はじゃんけんで負けてパシリをすることになったのだが、これ人が多くて自動販売機に辿り着くのに一苦労した。

「それにしても、ほんと、懲りもせずに皆毎年来るわよね」

秋山が人の群れを見て関心して呟く。

「まあ、盆踊りだけじゃなくて、この後に花火大会もあるからな。それに、この町にはこれ以外にたいして行事ないし、大人達は収入

の為に頑張ってるし」

「そうそう。うちの親、市役所で働いてるんだけど、最近はずっと出店の確認で大忙し」

松本と秋山が自然に話している。

僕は二人を見て満足げに頷く。

――よしよし、うまくいっているようだ。

ふと、隣の奔洞を眺める。

今回、奔洞は二人に関してまったく何もしていない。というか、松本とはまったく話をしていない。松本の方も奔洞とは話そうとしていない。

――こっちは当たり前か。

本当に大丈夫なのか、と心配になってくる。

確かに、松本と秋山の間に不穏な空気はないが、松本はまだ秋山に何もアピールをしていない。思わせぶりのことを言うとか、積極的に話すとか。まあ、移動するときは二人ペアなので、僕とよりは話してはいるか。

団体の部が終わった。

僕らは立ち上がって、広場の中央に向かう。

僕らは男女二人ずつだから、ペアになるなら、男女ペアというのが、松本のことを考えたら当たり前だろう。となると、僕は奔洞と組むことになる。

その辺りのことを奔洞に聞こうと彼女の方を向くと、腕を引っ張られた。

そのまま松本の元から離れていく。

どうやら、松本と秋山を二人つきりにするのが目的なのだろう。

松本達からだいぶ離れると、奔洞は足を止めた。

「ねえ、道長」

「ん？」

「あんた、祭りに何年も来てるのよね？」

奔洞の言いたいことは分かった。だから、先に言ってやる。

「踊れなくても大丈夫だよ」

「え、そうなの？」

案外普通の反応。ちょっと残念。

「うん。周りに合わせて足動かして、腰振るだけ。踊り全体の動きは、左右の移動くらいしかないから」

「ふーん」

意外そうな声。

そう。この盆踊りははっきりいって踊らなくいい。もともと踊りを見る祭りだったのが、それを見て体を動かしたくなった人達が勝手にその後には踊り始めたのが始まりなのだ。だから、誰も型なんて気にしていない。

「じゃあ、リードしてよ」

奔洞が右手を差し出す。

僕はその手を握るべきか否か、物凄く悩んだ。

——こんなに気安く触ってしまったていいのか？ それとも、これは僕へのアピールなのか？

暫く悩んでいると、奔洞は僕の手首を掴んで、ついでに僕の足を踏んだ。

「早くしてよ」

仕方なく僕はステップを踏む。

僕は今まで男子と来ていたわけで。確かに蓑宮とも来ていたけど、そのころは保護者同伴だったし。

僕はひたすらステップ、ステップ、ターンを繰り返した。

個人の部が終わって花火大会が始まるまでの間、僕と奔洞は近く

にあったベンチに座っていた。

「五年以上踊ってて、まさかあれしかできないなんて」
奔洞がさきほどの盆踊りの内容を笑う。

「仕方ないだろ。女子と来たのは初めてだったんだから」

僕は恥ずかしくて顔が上げられない。

松本達とは完全にはぐれてしまった。

そのことは別に構わないらしい。

奔洞によると、ここから先は自由行動ということになっているそうだ。

「で、僕らはどうするの？」

「決まってるじゃない。見れるものは見とくものよ」

「そう」

僕は立ち上がると、奔洞に着いてくるように促した。

「どこに行くの？」

「花火見るんだろ。だったら、穴場がある」

僕は人だかりから離れて、近くの並木林に入った。

他の客達は皆花火大会が行われる会場に向かって歩いている。

並木林の中を少し行くと、人影が見えてきた。

「ん？ 待ち合わせ？」

「いや。してないけど」

なんとなく、忍び足で人影に近づくと、見覚えのある姿だった。
というか、さっきまでいた友人達だ。

僕らは松本達に気づかれないように、近くの木に隠れる。

二人は何も話していない。

先に口を開いたのは、松本だった。

「秋山。話があるんだ」

【奔洞】

「奔洞。もしかして、最初から知ってたの？ 二人が両思いだったこと」

道長が歩きながら私に聞く。

「ええ。知ってたわ」

正直に答える。

そう、私は知っていた。「赤い糸」を通してではなく、言質を得て知っていた。

松本が「クピド」に訪れた次の日。二人の関係を調べていたら、当の本人とばったり出くわしたのだ。

「ねえ、奔洞さん。昨日、あなたがバイトをしている店に松本君が入って行くのを見たんだけど、どういう関係？」

直球だった。清々しいほどのストレート。

「何でそんなことを聞くの？」

「奔洞さんには関係ないわ」

少し意地悪をすると、秋山はぷいっと、そっぽを向いてしまった。私は秋山に松本は道長に会いに来たんだ、と嘘をついてその場は誤魔化したけど。

松本に聞いて予想していたことが、秋山と会って確信に変わった。そして、道長に手伝ってもらって、それは事実となった。

二人は「赤い糸」によって意識し合っている。

きっかけは偶然で、想いをここまで育てたのは彼ら達だけど、その原因となったのは「赤い糸」だ。

私はそのことを、松本の話聞いてすぐに予想した。

普通、消しゴムを拾っただけで、相手に心を許すはずがない。

おそらくそのときに、彼らの脳は波長の一致を記憶してしまったのだろう。

確かに、きっかけは偶然だった。

けれど、その後に起きたことは全て必然なのだ。

二人とも想い人はおらず、今は隣同士の席にいる。ドラマや漫画

によって、そういうささいなことから恋愛が始まる、という知識が植えつけられている。

そこに、脳が相手のことを記録し、何らかのシグナルを送ってこれば、例えばやたら相手のことを考えるようになるとか、秋山達のように警戒心が削ぐられるとかが加われば、それを恋だと認識してしまう。

好きだと思う人を好きになるのは簡単だ。

好きだという前提で相手を見ているのだから、どんなマイナスもプラスに変わってしまう。

だから、松本と秋山は両思いになった。

私はそれを知っていたから、あえて何もしなかった。

必要なのは、告白という行為だけ。

はつきりいって、盆踊りに出る必要なんてなかった。両思いなのだから、告白さえしてしまえば必ず恋人になれるのだから。

「じゃあさ、何でこんなことしたの？」

道長が、盆踊りに出たわけを聞いてくる。

「イベントは、あった方がそれっぽいでしょ。だって、最初から教えてしまえば、内に来なくなるじゃない」

「つまり、収入のために騙してたわけ？」

「人聞きの悪い。教えるのを忘れてたのよ。それに、最終的には依頼を完遂してんだから、別にそんなことはどうでもいいでしょ」

——そう。完遂だ。

普通の恋人だったら、アフターケアが待っているが、「赤い糸」で結ばれた者同士がくっついた場合は、別れることは決してない。

あの二人は生涯一緒に生きていくことになるだろう。

それは幸なのか不幸なのか。

もう少し二人が出会ったのが遅ければ、もっといい恋人を見つけられたかもしれない。けど、それはもう叶わない。「赤い糸」で結ばれた二人には、他の異性が目に入ることはない。

「ねえ、道長。ただのクラスメイトが恋人になる確率って、どのく

らいかな？」

私はなんとなく聞いてみた。

「そうだね。単純に考えると、クラスメイトの異性は十五人くらい。それが毎年変わるとして、小学生から高校生までいくと、百八十人になる。だいたい二百人てどこか。地球上に存在する異性をざっと三十億人としたら、 $200 \div 3$ 、000、000、000で0、0000006666になるから、だいたい二億分の一かな」

二億分の一。

現実に取りこりえるような数値じゃない。けど、「赤い糸」はそれを可能にする。

「まあ、でも。実際は年齢差とかもあるし、住んでる地域とか、所得の違いとか、いろいろあるから、かなり確立は変わってくると思うけど。ほら、着いた」

道長が足を止めた。

この辺りだけ、木が植えられてない。

「低い花火は見えないけど、ここなら邪魔になる建物も、煩い喧騒もないだろ？」

道長が私に自慢げに言う。

「何でこんな所知ってるの？　もしかして、一人で来てたとか？」

「な、違うわい」

道長はそれっきり口を開こうとせず、じっと花火を見ていた。

私も、頭上に見える花火を眺める。

花火を誰かと一緒に見るのは久しぶりだった。

小さい頃は親と見に来ていたけど、すぐに来なくなった。

隣で花火を眺める道長の横顔を見ながら、私は思う。

これも、「赤い糸」がもたらしたものなのだろうか？

私には、「赤い糸」が視える。けれど、私はそれを一度も喜んだことはない。

だって、そうでしょ。

恋している人に、その人とは結ばれない運命だから諦めなさい、

って、誰が言える？ 誰が信じる？

「赤い糸」は私に何も与えないまま、私を縛ってしまおう。
けど、今の生活が嫌いなわけではない。

だって、私は今、一人というわけではないから。

【道長】

花火が終わる。

僕らは帰路についた。

暗がりの中、若い男女が二人きり、という状況だけど、奔洞には
何も期待できないし、期待しない。

けど、今の感じが嫌なわけではない。

蓑宮と祭りに行ったことをからかわれた僕は、次の祭りで、蓑宮
を誘えず、一人でこの場所から花火を眺めた。

もう、女の子と一緒に花火を眺めることはないと思っていた。

けど、今僕の隣には、奔洞がいる。正真正銘の女の子だ。

恋人とか、そんなんじゃないけど、僕らはこうして一緒にいる。

【松本】

「理由は分からない。けど、気づいたら秋山がいた。

時期は覚えていない。けど、思い返せば秋山がいた。

俺には何の根拠もないけれど。この想いが本物だということぐら
いは分かる。

好きだ。秋山」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／二章 隣同士／三話 必然（後書き）

これで二章は終わりです。次からは、道長がメインの三章に突入です。

【奔洞】

「一〇〇メートル走に出る人いませんか？」

体育委員の松山^{まつやま}が運動会の選手を募る。

夏休みは終わり、二学期になった。

二学期にはいろんな行事があり、その中で最初にあるのが運動会だ。

天原高校の運動会では、生徒一人につき最低一競技には出場しないといけない。その代わり、選手数の上限はなく、また、一人でいくつもの競技に出場することも可能である。

「それじゃあ、『ハットリ』の大将を決めたいと思うのですが」

松山が言うと同時に、クラスメイト達が騒ぎ始める。

「ハットリ」は「Hat 取り」の略で、帽子取りのことだ。

ルールは簡単。

制限時間内に相手クラスの帽子を多く取った方の勝ちだ。また、

大将の帽子には十人分の価値がある。そして、競技時間短縮のため、三クラスによる三つ巴の戦いとなっている。

「ここはやっぱり陸上部だろ」

「でも、陸上部はまっさきにやられるよ」

「そこをかくぐるのが陸上部だろ」

大将の帽子は内側に印があるだけで、外からは他の帽子と見分けがつかない。そこで、まず足の速い陸上部をまず数人がかりで狙うのだ。

ふと、一番多く名前が黒板に書かれている我がクラスの陸上部員に目を向ける。その内の一人はである皆本は皆に囲まれ、背中を叩かれている。

おそらく大将は皆本になるだろう。

もう一人の陸上部員、蓑宮は今日は休んでいる。

そういえば以前、道長も中学時代は陸上部だったと聞いた気がする。

あいつはどうなんだろう、と思って道長を見ると、ちょうど隣の席に座る、遠山と入れ替わりに転校してきた僅鴉闘己に「ハットリ」について聞かれているところだった。

耳を傾けていると、松山に呼ばれた。

「奔洞さんは何に出るの？ まだ決まっていないうだけど」

そう言われて、黒板に書かれた各種目の出場選手名を確認する。

——なるほど、名前がないのは私を含め残り三人だ。

「そうね。走り幅飛びでいいわよ」

まだ誰の名前も書かれていない競技を選んだ。

競技の出場枠に上限はないけど、どの競技にも各クラス一人は出場しないといけない。

「ありがとう。助かるわ」

松山はそう言うのと、まだ種目が決まっていないう他のクラスメイトの所に行った。

することのない私は保と窓の外を眺めてみる。

たそがれる、というのは実に都合のいい解釈だ。

何もしたくないだけのときや、邪魔されたくないときは、一人で空を眺めていれば周りは勝手に解釈してくれる。

夏休みのことを思い出す。

道長はどういうつもりで私に付き合ったのだろう。

自分の指に繋がれた「赤い糸」を直視する。

「赤い糸」の本質は、無意識下の強制認識だ。

それは、暗示とはほど遠い、洗脳の域を超える、本能による上書きなのだ。

だから私は、道長を好きにはならない。

運動会の準備が始まってから、「クピド」に行く時間が遅くなっていた。

特に道長は元陸上部のため、リレーの練習や「ハットリ」の作戦会議などで「クピド」に顔を出すのが閉店間際になることもしばしばあった。

そんなある日、久しぶりに早くやって来た道長に、私が飲み散らかしたコーヒーのカップをいつものように洗わしていた。

「何で僕がお前の飲み散らかしを片付けないといけないんだ？」

「別にいいでしょ。客がいなくて、仕事がないからって、何もせずに給料だけもらって行くつもり？」

「いや、僕が奔洞の後片付けをすることがこの店の売り上げに繋がったりはしないだろう」

「繋がるわよ。私の士気が上がるんだから」

「はいはい」

文句を言いながらも、道長はいつも私のコップを洗う。

それは、道長が優しいからではなく、本当に仕事がないからだ。

元々この店は小説家の抄吾さんが趣味で経営し始めたものだったので、客引きには力を入れていないのだ。

「そういや、抄吾さん、今日も来てないの？」

道長が洗い物を済ませて、私の元にやって来る。

「そうみたいね」

時刻は六時半。喫茶店としての稼ぎ時とはとくに過ぎている。そろそろ閉店の準備を始めても、喫茶業務に差し支えることはなにもない。

だから、道長に仕事がないのは当たり前なのだ。

それでも店を開けているのは、他でもない、恋愛相談者の為だ。

昼は抄吾さんが喫茶店を営み、夜は私が恋愛相談を行う。

「あの一」

ドアベルを鳴らして、誰かが入って来る。
おそる、おそるといった感じで、お客は口を開いた。
「ここで恋愛相談をやってるって聞いたんだけど」

【道長】

やって来たのは、我がクラスの「ハットリ」の大将（予定）の皆本だった。

店内の僕らを見ても驚かないところから、ここで僕らが働いていると知った上で、「クピド」に来たのだと推測する。

「ええ、ここは恋愛相談所『クピド』よ。こちらの要求した金額を支払い、私がやる気になって、あなたが指示に従ってくれたら、彼女との適切な距離や告白の仕方、付き合い始めてから三ヶ月間の私の献身的なサポートを提供するわ」

「やる気」って何だよ。やる気ないのか？　っていうか、お前の店じゃないだろ。

僕は心の中でつつこむ。

奔洞は皆本を椅子に座るように促した。

僕はカウンターに戻って、二人分のコーヒーを淹れる。

その間、二人の会話に耳を傾ける。

僕の仕事は恋愛相談ではないけど、奔洞の恋愛手腕には興味がある。あと、皆本の想い人が誰か、というんのも。

プライバシーの侵害に少しだけ心を痛めつつ、自らの好奇心に身を任せる。

「で、誰が好きなの？」

いきなりかよ。直球すぎるだろ。

「あ、ああ。うちの部、陸上部なんだけど、その先輩で、清元瑞穂先輩」

「そう。で、その清元先輩のおみ足に惚れた、と」

「え？ いや、足とかそういうのじゃなくて……」

「じゃあ、先輩の足、嫌いなもの？」

「いや、嫌いというわけでは……」

「じゃあ、好きなんですよ」

「いや、だからそうじゃなくて……って、奔洞？」

皆本が奔洞の視線に気付いて、会話を止め、視線を合わせる。

僕は二人に見つめられて、降参とばかりに両手を挙げて、店の奥に辞退した。

僕が引っ込んだのを確認して、奔洞は皆本と話し始める。

僕は一人、いつものようにカウンターの中で宙を見つめる。

奔洞はいつも、恋愛の話になると、僕に席を外させる。

あ、でも、三浦に頼まれたときと、夏休みのときは、違った。松本のときはともかく、三浦のときは奔洞の方から話し掛けてきた。

分からない。奔洞が何を考えているのか、その瞳で何を捕らえているのか、僕には分からない。

僕は店のドアの所に行くと、閉店の看板をかけて、従業員室に引っ込んだ。

「何でだ！」

次の日、「クピド」のドアを開けると、皆本の怒鳴り声が聞こえてきた。

僕は急いで店の中に入ると、現状を確認する。

店内にいるのは、皆本と奔洞だけ。例のごとく、お客と同様に抄吾さんもない。今日も自宅で執筆中ということだろう。

二人に目を向ける。

皆本がテールブル越しに奔洞に詰め寄っていた。

奔洞は平然と皆本を直視していたが、僕が入って来たのを見て、

気まずそうに目を逸らした。

「何で受けられないんだ？」

再度、皆本が問う。

「無理なものは無理なの」

間髪入れずに奔洞は答えた。

依然として強きの姿勢は変わらない。逸らしていた目も今は皆本を見据えている。

以前にもこんな風景を見たことがある。

確か、奔洞はそうとき言ったのだ。

「この店はね。一度依頼を受けたら、必ず恋愛を成就させるの。実際にそんなことは難しいけれど、私はそのつもりで仕事してるし、巷でもそういうことになってる。

だからね。受けた依頼は必ず成功させないといけないの。それが、この店の存在意義だから。そのためには、成功率の低い仕事は請けるべきじゃないのよ。

言っとくけど、私が保身に走ってるんじゃないくて、社会の常識だからね」

理由の真否までは知らないけど、奔洞が依頼主に脈なしと判断しているのは確かだ。

そのとき、僕は不思議に思ったのだ。

奔洞は依頼の、長くても三日後には承諾の有無を示している。まったく知らない他人のことを、そんな短時間で理解できるのか、とそして、如何にして奔洞は脈なし、と判断しているのか、ということ。

だから、つい、口を挟んでしまった。

「やってみなきゃ分からないんじゃないの？」

言った瞬間、奔洞が僕を睨んだ。

いつものような、黙れ、という軽いものじゃない。宿敵を見るような、本能にまで染み込んだ憎しみ。

「そんなに言うならさ」

奔洞が僕に告げる。

「あんたがやればいいじゃない。あんたが情報仕入れて、あんたがアピール考えて、あんたがイベント用意して」

「え？ あ、でも……」

いきなりの展開に言葉が詰まる。

「皆本もそれでいいわよね？」

もし、この件に関して誰かの手を借りたいのなら、私以外の者にしなさい。どうやら、そこのおバカさんは手伝ってくれるそうだし、ちようどいいじゃない。

どうしようとあなたの勝手だけど、私は忠告はしたわよ。後で悔やんでも、知らないからね。

あ、それと道長。『クピド』の名前は使わないでよ」

一気に捲くし立てて、店の奥に引っ込んでしまった奔洞。

その目にうつすらと浮かんでいた涙は、誰のために流すのか。

残された僕は、閉じた扉をじっと見つめていた。

「皆本、手伝おうか？」、と言おうとして、言葉を飲み込む。

奔洞の言葉を思い出したからだ。

『当事者の意志のない手助けは、恋愛を強制的なものへと変えるわ。そして、当事者の意思を捻じ曲げるの。放つとくと強迫概念にまで発達するわよ。そうになると、それはもう一種の洗脳って言っても過言ではないわ』

「で、どうするんだ？ 皆本。僕は、何の事情も知らない。だから、今の時点で僕に出来ることは何もないよ」

暫くの沈黙。

「俺は、清元先輩のことが好きだ。

けど、俺は意気地なしだから。俺一人じゃ気持ちの整理もつかない。

だから、道長。俺を助けてくれ」

形式上、これでいいはずだ。

まるで予め決まっている物語のように、あっけなくことは済む。ほんと、嘘のように。

僕は皆本の方を向いて、微笑んだ。

皆本も微笑み返す。

そして、僕は奔洞が消えていった扉を見つめた。

僕が本を読み始めたのは、小学四年生のとき。

きっかけは蓑宮だった。

経緯は忘れたが、蓑宮から本を借りたのだ。

それ以来、僕はいろんな恋愛小説を読み、様々な恋愛の起こりと育み、その結末を識った。

僕の頭には何通りもの恋愛が記録されている。

僕の前では、どんな恋愛も何通りもあるうちの一通りにしかすぎない。

それは、今回の場合も例外ではない。

僕は皆本との会話を続けた。

「まず大切なのは、かけがえのない思いでは、かけがえのない日常から作られる、ということなんだ」

「大切なのは日常って」

皆本が繰り返す。

「そう。日常が全ての基盤だ」

奔洞はイベント、つまり非日常を中心に恋愛を考えているようだが、僕は違う。

イベントは確かに、人間関係に大きな変化を与えるが、その基盤には日常があるのだ。日々の関係があってこそその変化であって、イベントだけでもたらした変化は崩れやすい。

将来のことも考えるのなら、脆い関係より、コツコツと地道に積み上げてきた固い関係の方がいいのは明白だ。

「でも、今回は時間が少ない」

通常、日常を作り出すにはそれなりの時間がかかる。事実を自ら認識してもらわないと、意味がないからだ。

「皆本の注文通り、十月までに告白したいのなら、やっぱり運動会しかないと思う。残り三週間だ。だから、秘策を使おうと思ってるんだ」

「秘策なんてあるのか？」

「ある」

秘策でも何でも無いが、一応そう思わせておく。

一度マイナスを見せることで、それを上回るプラスを見ると、その度合いは大きく見えるものだ。

「今回は後から二人の関係を築こうと思ってるんだ」

「え？　どういうこと？」

皆本が首を捻る。

僕は今回の計画を説明した。

「後からって言っても、別に先に既成事実を作ってしまうわけじゃない。あくまで、今までも互いに意識していたようにするだけだ。皆本は実際に以前から清元先輩のことを見てたんだから、大丈夫」

「んー？」

皆本は理解出来てないようだ。

当たり前か。わざと分かりにくく言っているのだから。

今回は、錯覚を利用する。実際には、勘違いさせるのだ。

今相手が好きなら、過去のことはどうでもいいのだが、やはり、騙すような手法を使うと説明すれば、皆本は難色を示すだろう。

人間関係を最も左右するのは、日常だ。インパクトを起こすイベントも、良かれ悪かれ、日常関係があってこそそのインパクトとなる。日常を作り上げるには、長い時間がかかってしまう。なぜなら、それを日常だと認識するのに時間が掛かるからだ。

だから今回はまず、日常だと無理やりにも認識してもらう。実際は長い時間掛けて形成したものではない日常を、まるでそうであるかのように勝手に思ってもらうのだ。

そのためには、周りの雰囲気を掴む必要がある。

「まあ、元々俺一人じゃどうにもならないんだし……よし、道長の言う通りにするよ」

皆本はうんうんと頷いていた。

三浦は二つ返事でオーケーしてくれた。

「まさか、道長からこんなことを頼まれることになるとは思ってもしなかったわ」

「虫が良すぎたかな？」

楠のことを濁らせる。

「いや、いいよ。和ちゃんのこととはもう終わったことだし。でも道長はいいの？ 私の手なんか借りて。奔洞さんにばれたらまずいんじゃない……」

「関係ないよ。ちゃんと、松本から正式に依頼が来てるから」
前回断った原因を思い出した。

「で、おうするつもりなの？」

「二人の話題がでるようになったら、後は僕がやる」

僕は握りこぶしを作ってみせた。

「ふーん。どうやら、本当に奔洞さんは無関係のようね。それじゃあ今回は共同戦っていうことで、二人の仲を応援しよう」

「うん。お互いに協力し合って、皆本の恋を成功させよう」

僕らはニコニコ笑顔で頷き合った。

三浦と別れると、僕はすぐに思案顔になる。急いで次の行動を実行に移す。

三浦とは協力がどうのこうのと言ったけど、僕としてはそんなつもりはない。これは、僕の仕事であると同時に、自分の恋愛感を裏付ける検証でもある。

僕は皆本の恋愛を僕のやり方で成功させることで、僕の理論の正しさを立証し、周囲に溢れる恋愛を否定する。そうして、僕は自分に降りかかる恋愛をなぎ払う。

僕はそのために自ら飛び込むことに決めた。

次の日から、僕は陸上部に仮入部した。

元々陸上部からお呼びが掛かっており、中学時代はそれなりに結果も残していたので、違和感なく入ることが出来た。この前の体育でも一五〇〇メートル走でも陸上部に勝つなど、実力は十分にこなったので、すぐに皆本達と一緒に練習する。

蓑宮は驚きながらも、うれしそうに寄ってきた。

「やっと来たんだね。もう、前から陸上続けるべきだって言ってるのに、急に部活はしないって言って、帰宅部になっちゃうんだもん」僕は曖昧に笑うことを言葉の代わりに返す。

その様子を周りの部員達は暖かな目で見つめる。

三浦はすでに皆本達のことを話したと言っていた。後は僕がこの空気を操るだけだ。

僕は相手方である清元先輩に目を向ける。

年の差というのは、学年がある学生の恋愛にとって、大きな利点となる可能性を秘めていると同時に、大きな欠点となることもある。先輩・後輩というのはそれだけで同級生よりも目がいくが、同級生知らないことは多い。先輩は大人の魅力が溢れているが、高嶺の花とふんでしまつて、いつしか恋愛対象から外されてしまう。後輩は

かわいいが、一度後輩と認識すると、恋愛対象になりにくい。

といって、いきなり恋愛にもっていくのは危険だ。かといって、なれなれしくし過ぎるのも危険だ。適度な距離感が必要なのだ。だが、すでに一年が経過しており、その間の二人の関係を僕は知らない。だから、清元先輩には悪いけど、こちらに都合のいいように過去を作らしてもらう。

まずは、僕が皆の仲に入らないといけない。だが、これは結構簡単だ。この学校には僕や蓑宮と同じ中学出身の陸上部員が多く、又、一時期蓑宮に連れられて、というか陸上部に入るつもりで顔を見せていたり、と顔見知りが多い。

僕は数日もせずに部員となじんだ。

運動会まで二週間。

運動会間近の陸上部は大会前のように活気付いていた。

天原高校にはスポーツ推薦があり、サッカー部や野球部はそんな生徒で一杯だ。

陸上部も弱くはないのだが、推薦で来るような強力なエースがない。そのため、短距離走などでは負けることも少なくないのだ。だから、陸上部の威厳を保つために部対抗リレーでは圧勝する必要があるのだ。

練習は長時間に及び、おかげで「クピド」に顔を出す時間がなくなった。そして、駅から自宅までの道のりを、蓑宮と二人で帰ることになった。

「そういえば、『ハットリ』の大将って誰になったの？」

「何のひねりもなく皆本になったよ。っというか、まだ知らなかったの？」

「うん。聞く機会がなくてね。昼休みや放課後に集まっているのは知ってたんだけど、やっぱり男子ばかりだと……ね。部の練習もある

るし、今さらって感じだし」

「まあ、確かにそうだね」

二人して、人気のない夜道を歩く。

夜遅いので体が冷える。日中はまだ暑さが残っていたが、夜はもう秋の夜だ。

蓑宮が身震いする。

僕は自分の上着を蓑宮に紳士として渡した。

「いいの？」

「この前、風ひいてたよね。またひいたら、運動会に差し支えるよ」
蓑宮は迷ってから、僕の上着を受け取った。

「ありがとう」

うれしそうに顔を綻ばせる蓑宮。

その様子を、僕は気づかれないようにため息について見ていた。

「一回百円ね」

「って、お金取るの？」

空気を変える。

「冗談」

二人でくすりと笑う。

家まで残り十分。

僕はこの空気を維持し続けた。

「クピド」に行けない理由は予め奔洞にも伝えてある。なのにすれ違う度に僕の足を踏みつける奔洞は、僕に陸上部の練習が終わった後も「クピド」で働けとでも言うのだろうか？ 奔洞の不機嫌な理由は、コップ洗いと一般客の相手が面倒臭いからだということにする。

「ハットリ」の方は順調に進んでいる。今年の面子なら、優勝も狙える。そして何より、一回戦で清元先輩のクラスと当たる。これ

は最後のアピールとして使う。

陸上部の方もうまくいっている。この前は写真を持って来させることに成功した。清元先輩の写真には思った通り皆本の姿があり、そのことをそれとなく指摘する。もちろん、逆もしかりだ。少しずつ、少しずつ清元先輩に先入観を植え付けていく。短期間における恋愛において、先入観は必須うテクだ。今回は長期恋愛に見せかけているのだが、事実上は短期恋愛だ。先入観でプラス思考を持っているのだと、計画は完遂できない。好印象の相手には比較的亲睦が深まり、悪印象の相手とは溝が深まりやすい。そこをひっくり返すやり方もあるが、危険だし、そもそも時間がない。

清元先輩には、自分で意識した、と思ってもらわなければならぬ。そして、それはずっと前からそうだったと思ってもらわなくてはならない。

僕は動き回った。あらゆる会話に耳を傾け、口を挟み、二人の関係を内外ともに強固なものにしていく。綻びももちろんあるが、この際仕方がない。計画完遂の暁には、それと知られぬように修復するだけなのだから。

そして、運動会当日を迎えた。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／三章 先輩・後輩／一話 初仕事（後

ついに三章に突入しました。この辺りから少し話が長めになっています。第一部最終章への布石もこの章から本格的に始まります。

【道長】

「よし、ついにこの日がやってきた。皆、優勝するぞ」
「おう！」

僕らはクラス全員で円陣を組んで、気合を入れる。
周りでも同じように互いに気合を入れ合う姿が見うけられる。
それもそのはず、クラス対抗で最も得点の多いクラスには、一日
休日が与えられるのだ。

天原高校では、運動会当日は六時まで競技があるため、その翌日
に道具の掃除がある。その掃除に行かなくていいのだ。

校長の挨拶もそこそこに、最初の競技の短距離走に出場する生徒
達がウォーミングアップを始める。

種目は五〇メートル走、一〇〇メートル走の二つ。たった二つだ
けだが、出場選手が多いため、予選にだけでも時間がかかる。その
間に次の競技の選手は十分に準備運動をする。その他の選手に各々
のクラスのメンバーを応援する。

僕も屈伸して、自分の出場に備える。

皆本達のはことは、今は忘れる。やれることは全てやった。後は、
皆本次第だ。

本日三回目の競技を終え、クラス席に帰って来た。

クラスメイトとハイタッチを交わして、自分の居場所を探す。
ようやく奔洞の隣に空きスペースを見つけて、腰を下ろした。

「おつかれ。そのままバンバン走って、私にハッピーライフをプレ
ゼントしてね」

なんか、折角の労いが台無しだ。

二人座って、クラスメイト達の活躍を見守る。
ふと、奔洞が口を開いた。

「そういえば、皆本達の件、順調なの？」

「え？ あ、うん」

おっ、障害物競走が始まった。

「いつまで陸上部にいるつもり？」

「そろそろ辞めて、『クピド』に戻るよ」

「あら、そう……」

暫く沈黙。

あ、誰かがこけた。

「うわ、痛そう」

呟いてみる。

「そうね……」

再度沈黙。

なんか、やりづらいな。

奔洞の顔を盗み見る。

競技を呆と見つめる奔洞は、迷いを振り払うかのように首を振った。

「道長」

「何？」

奔洞はそこでもう一度口を閉じる。

そして、徐に言葉を紡いだ。

「道長のせいじゃ、ないから」

は？ 一体何のことだろうか？

確認する間もなく奔洞は自分の出場競技の召集に行ってしまった。

「やあ、おつかれー」

入れ替わりにやって来た蓑宮がハイタッチを求めてくる。

「いえーい」と手を合わせて、互いに労う。

「速かったねー。一五〇〇メートル。どうどうの一位じゃない」

「いやー。それをいうなら蓑宮だって、『ケンケン跳び』レースでトップだったじゃん」

二〇〇メートルをケンケン跳びだけで進む。こけて失敗になりやすいこの競技で蓑宮はトップを取ったのだ。

「あ、そうそう。後でスタートダッシュの練習に付き合ってくれない？ ちょっと緊張してきて……」

部対抗リレーは午前最後の後にある。

「そうだね。僕もこの後『借り物競争』があるから、それが終わったら。って、皆本達と集まって、最後の確認があるんじゃないの？」
「あ、皆本は『ハットリ』の最終確認で、先輩達は係りの仕事で忙しいだろうし……」

まあ、いっか。

「じゃあ、僕が帰って来たら、スタートのタイミング合わせとウォームアップをしようか」

「うん」

蓑宮は頷くと、他のクラスメイトの元へハイタッチを求めて行った。

天原高校の「借り物競争」は三段階に分かれる。

まず、一〇〇メートル走って、箱の中から御題の書かれた紙を引く。最初の御題は物。借りてきたら、御代を受け取った場所に持っていく。

次に、また一〇〇メートル走って、さっきと同じように御題を手に入れる。今度は予め生徒会が用意した物なのだが、その所在地は運動場の角四箇所に分散している。

そして最後の御題は人間。その人と一緒に二人三脚で運動場を一周走り、ゴールテープを切る。

点数が加算されるのは上位六位まで。出場選手はだいたい三十人

弱。

そこまで本気でこの競技をする生徒はいない。「借り物競争」の勝敗なんて運によるものだし、競技の趣旨自体が娯楽の一部となっているのだ。下手に気負うよりも遊び心半分で参加するものだ。

ピストルが鳴って、走り出す。

本気になるつもりはないけど、手を抜くつもりもない。

トップ層で到着する。

御題が入った箱は横に六個並べてあり、右から三つ目の箱に手を入れる。

「傘」。

傘ねー。

僕は日傘を持つ父兄を探す。

が、見つからない。あいにく今日は曇りで、日傘の出番がないのだ。

ふと、近くにいた蓑宮に声を掛ける。

「ねえ、蓑宮って、折りたたみの傘いつも鞆に入れてなかったけ？
今すぐ持って来れる？」

「傘？ あるわよ。鞆もすぐそこに」

「本当？ よかった。貸してくれる？」

蓑宮に傘を借りて、次の御題を引きに行く。

走りながら、周りの選手に目を向ける。

現在順位は三位。借りてきたのであろう物の中にあるアイスクリーム屋の看板に目を疑いながら、（よく貸してくれたという意味で）、次の御題を引く。

「便器」。

いやいや、便器って……。今年の生徒会はどうなっているんだ？
いや、そういえば、去年もバイクとかおかしい物が混じってたよ
うな。

とにかく、四箇所回って調べないといけないので、時計回りに運動場の右上から回る。

一箇所目。便器なし。何故かトイレットペーパーが八個も置いてあった。

二箇所目。便器なし。ここでもウォシュレットが八個あった。

三箇所目。便器なし。石鹸が八個あった。

……。

僕は四箇所目、即ち運動場を一周して、便器の蓋を見つけた。持ち運びは楽そうだ。

一〇〇メートル走って、次の御題を手に入れる。

現在順位は十二位。運動場一周はかなりのロスとなった。お題を確認する。

「最初に物を借りた人」。

何これ？ 運動会実行委員の連中、サボったな。とにかく、蓑宮を探す。

すぐに見つかった。さすがに何年も幼馴染をやっていると、人ごみの中でもすぐに発見できるようになってしまう。

「ん？ 何？ また何か借りに来たの？」

「ごめん、借りるよ」

「へ？ って、ちょっとー」

説明も等閑に、蓑宮を引っ張って行く。

すぐに蓑宮も理解したらしく、自分から目的地まで走ってくれた。

「後で御題の内容教えてね」、と言う蓑宮に返事しながら、僕は所定位置に着いた。

現在順位は三位。一気に優勝圏内だ。

トップは今走り出した。二位は僕らと同じように互いの足を結んでいる最中。

「蓑宮でよかったよ」

「え？ あ、そう？」

僕らは一緒に走り出した。

スタートダッシュで二位に躍り出る。トップとの差は五十メートル。すでに四分の一周先行されている。生徒と保護者が「一、二、

一、二。」と、声を掛け合いながら走る姿が見える。

けど、僕らは無言で走った。掛け声を合わせる必要はない。十年以上の付き合いが、互いの意思を勝手に伝えてしまう。

蓑宮が右足を前に出すのが分かる。

蓑宮が右手を後ろに下げるのが分かる。

蓑宮が肺を膨らますのが分かる。

蓑宮が息を吐き出すのが分かる。

蓑宮の動きが、分かってしまう。

二人でゴールテープを切る瞬間まで蓑宮に握られていた手を、振り切ることはできなかった。

午前の部は全て終わり、午後の部も進み、残るは各競技の決勝、紅白競技、そして、「ハットリ」だけとなった。

少し忘れ掛けていたが、皆本の恋愛において、「ハットリ」は運命の分岐点である。

当初、運動会で事を成すことに僕は難色を示していたのだが、皆本がどうしてもこの日がいい、というので、決行となった。

僕らのクラスの一回戦は第九試合。一回戦最後の試合になる。

対戦クラスは一年五組と三年二組。三年二組は清元先輩の在籍するクラスにあたる。

皆本は「ハットリ」の最中に告白すると言っていたが、詳細は知らない。皆本が突然言い出したのと、僕がそこまでまだ考えていなかったからだ。

僕としてはこの運動会を最後のアピールに使うつもりだったのだが、当の本人がそう言うのなら仕方がない。僕は臨時であって、本物の恋愛相談師ではないのだから。

後は成功を祈るだけだ。

「もうすぐだね」

蓑宮が運動場を見ながら呟いた。

「そうだね」

僕らのクラスメイト達は、それぞれ足腰を伸ばしたり、靴紐を結び直したりと、最終調整で忙しそうだ。

今のところ、クラスの順位は第二位。ここは「ハットリ」で上位に食い込んで逆転しておきたいところだ。

ふと、皆本に目を向ける。皆本はじっと一点を見つめていた。その視線を追うと、対戦相手の三年二組があった。清元先輩は他のクラスメイト達と一緒に打ち合わせをしている。それもそのはずで、「ハットリ」で上位に食い込むだけで、景品が手に入ったりする。

総合優勝が見込まれないクラスにとって、「ハットリ」は唯一の景品ゲットのチャンスなのだ。

第八試合が終わる。

第八試合は波乱万丈だった。風が急にきつくなり始め、たくさん帽子が宙に舞った。

次の試合に向けて、各クラスが動き出す。

歩きながら、ふと奔洞に目を向けた。

これが終われば僕は陸上部を辞め、「クピド」に戻ることになる。三週間も「クピド」にいないと、奔洞との会話が大幅に減った。その代わりに陸上部員との、特に蓑宮との会話が増えたが。

こうして考えてみると、奔洞とは「クピド」がなければまったくといっていいほど接点がなかったのだ。

意識を「ハットリ」に戻す。

入場当初は、運動場に書かれた正三角形の一边に、それぞれクラスごとに並ぶ。そして、笛の合図で「おねがいします」。次の笛で試合開始。

礼をしながら、なんとなく奔洞の顔を盗み見る。が、帽子に隠れ

て見えなかった。一年五組は赤色、三年二組は青色、そして我が二年四組は黒色の帽子を被っている。これからこの帽子を奪い合うのだ。

二度目の笛が鳴った。

試合開始。僕達は予め決めていた通りに移動する。

皆本を中心に五人ほどのクラスメイトが円を囲む。この五人はすぐに帽子が取られるであろう生徒達だ。五人で囲って、大将の皆本の帽子を守る。

残りのクラスメイト達は、僕、蓑宮を中心に二手に分かれて、それぞれ一年生、三年生の固まりを狙う。足の速い生徒は狙わず、とにかく量を集める。

「ハットリ」が騎馬戦と違うのは、帽子を取られても動いていい、ということだ。つまり、強い敵を一人倒したところで、意味がないということである。

僕は逃げ惑う一年生を片っ端から狩っていく。

手に入れた帽子は手に持つのではなく、頭の上に重ねて運ぶ。

試合開始から二分が経過。僕の頭の上は、初めての経験で勝手が分からずおどおどしている一年生から奪い取った帽子で一杯だ。

前から来た一年生を右に避け、後ろから追って来た一年生を大回りで回りこんで、追い出す。僕を中心にクラスメイト達は大きな円を描くようにして移動しており、複数人で僕を襲うことはできない。一年生はほぼ狩ったとみていいだろう。「ハットリ」は帽子を取られても取り返すことができる。だが、そう簡単に返してくれるわけがない。極端に言えば、一人に、自分達の帽子も含め、全ての帽子を預けてしまえば、その一人さえ守り通せば、高得点を狙える、というわけである。こういうのは実際に体験してみないと分からない。五分間という競技時間を、短いようにみえて意外と長く、スタミナ計算も大切になってくる。

一年生は大方終わったな。

僕は注意を三年生に向ける。どうやら、うちのクラスのメンバー

は大方やられているようだった。

現状、うちのクラスと三年のクラスの得点は均衡している。一年生は戦力外として、実質的にはうちと三年の勝負になった。

残り時間は少ない。戦況は、相手の大将を倒した方に大いに傾く。三年生は清元先輩を中心に逆性三角形の形に陣をとっている。その周囲をうちのクラスのメンバーが突付いているが、帽子は予め全て中央に集められているらしく、自分達の帽子を奪われているだけで、中に入り込めずにいる。

三年二組は運動部が二、三人しかいないので、攻め合えば必ず勝てると踏んでいたが、どうやら最初から防戦一方のつもりだったようだ。

僕は皆本のところに駆け寄る。

「どうする？ 皆本」

「大丈夫だ。必ず清元先輩は出て来る」

「どうして？」

「運動部のいないあのクラスの得点源は清元先輩しかいない。帽子を被って出て来るさ」

皆本が自信満々に断言する。

三年の方からざわめきが聞こえてきた。

清元先輩が出て来たのだ。皆本の言った通り、帽子を被っている。

「二年。このままだと埒が明かない。だから、大将戦といきましょう」

「ハットリ」で引き分けになった場合、決勝戦以外は両者敗退となる。

「分かりました」

皆本が了承して、前に進み出る。

二年と三年は黙って両脇によって、二人のためのスペースを作った。一年を状況を理解できてはいないが、周りに合わせて移動した。

観客席がざわつく。

皆本と清元先輩が、運動場中央で睨み合う。

距離をとりながら互いに様子見。

身長のアドバンテージは皆本にある。だが、俊敏性に関しては清元先輩の方が上だ。

二人は一定の距離を保ちながら、ぐるぐると歩いて回る。

皆本が動いた。距離を縮めようと前に出るが、清元先輩は後ろに下がって逃げてしまう。それでも皆本は距離を詰めようとするが、清元先輩は華麗なバックステップで皆本の追撃を逃れる。少しずつ二人は中心から端に寄っていく。

突然、清元先輩が前に飛び出した。

清元先輩の腕が皆本の帽子に伸びる。そして、皆本の帽子を掴んだ。

が、皆本は離れていく清元先輩の腕を掴んで、帽子を取り返そうとする。

清元先輩は腰を使って体を捻り、皆本を振り払おうとした。

「あっ……」

帽子が清元先輩の手から飛び出る。

それを、皆本が蹴飛ばした。

空中に浮いた帽子は、強風煽られて、二人の下を離れる。

二人が同時にダッシュした。

帽子は風に煽られて、運動場中央に向かう。

二人の速度はほぼ互角。が、皆本の方がリーチが長い分、有利だ。皆本が手を伸ばす。

と、清元先輩がジャンプした。

皆本よりも先に帽子に手を掛ける。

歓声があがる。

だが、試合はまだ終わっていない。

清元先輩が地面に着地する。そのタイミングを狙って、皆本が横から帽子を掏り取った。

清元先輩が振り返って、奪い返そうと手を伸ばす。

と、清元先輩は体のバランスを崩して、皆本を巻き添えに倒れ込んだ。

そのまま二人は揉みくちやになり、試合終了の合図が鳴った。端によけていた生徒達が集まり始める。

僕は皆本を見つめた。

皆本と清元先輩の間には、今は何もない。

二人は運動場中央で向かい合って、立っている。

皆本が口を開く。

と、そのとき、一人の男子生徒がやって来て、清元先輩に声を掛けた。

清元先輩は振り向いて、その男子生徒に笑みを向ける。

「そうそう、まだ言っていなかったわね」

そう言って、皆本にその男子生徒を紹介する。

「本日付で、彼の彼女になりました。これからよろしくね」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／**三章 先輩・後輩**／**二話 運動会（後**

衝撃の展開！？ってな感じになってたらいんですが……。

三章も遂に架橋です。そろそろ第一部の本筋に入りたいと思います。

【道長】

「いやー、ほんとびっくりしたわねー」

帰り道、蓑宮が僕に話し掛ける。

運動会は終わり、陸上部は後片付け（掃除とは別）に駆り出され、今やっと帰路についたところだ。

歩きながら、筋肉痛に顔を顰める。

「って、大丈夫？」

「大丈夫。急に走ったから、ちょっと筋肉痛になっただけだよ」

「ハットリ」の後（「ハットリ」はうちのクラスが優勝した）、部対抗リレーの決勝があったのだが、長谷川先輩が現れなくて、急遽、仮入部の僕が出場することになったのだ。

「そういえば、あのリレーで杉原も来なかったらしいよ」

僕は後で聞いた話を口にする。

「それで、二人が一緒に帰って来たって」

「それって、逢引ってこと？」

僕は「さあ?」、と笑った。

会話が止まる。

僕は沈黙が怖くて、すぐに話を探す。いつもはこんなに怯えることはないのに。

「あ、そうだ。そういえば、駅前に新しくできたパン屋知ってる？」

「え? そうなの?」

「うん。それでね、……」

この状況も今日で終わり。

ラスト一日、僕は「幼馴染」で突き通す。

「ハットリ」で優勝したものの、僅差で敗れた僕達は、運動会翌日の今日こうして学校に来ている。

隣の家に住んでいる蓑宮は、陸上部の朝練で僕より先に登校している。

運動会が終わった以上、僕と蓑宮が一緒に登下校することはない。教室に入って、荷物を降ろす。

午前中一杯、道具を水拭きしたり、運動場の看板や杭などの撤去（昨日片付けたのは大道具等のみ）、保護者席の椅子の片付けに励むことになる。

蓑宮は教室にはいない。外で走っているのだろう。

奔洞は本を読んでいる。

そこに三浦がやって来て、奔洞の机をばん、と叩いた。

「話があるんだけど」

「何かしら？」

奔洞が顔を上げる。

「何でもいいけど、皆がいる中でしたい話じゃなさそうね」

奔洞は外に出るように促して、さっさと出て行ってしまった。

三浦はすぐに外に出ず、何故か僕の所にやって来た。

「一緒に来て」

有無を言わず僕を引っ張ると、そのまま連れ出されてしまった。

三浦に連れて来られたのは、中庭だった。

かつて、楠に蓑宮との関係を聞かれた所だ。

楠が座っていたベンチには、今は奔洞が座っている。

やって来た僕達を見て、奔洞は口を開いた。

「何で道長がいるの？」

僕が知りたいです。

「彼には聞く権利があると思うわ」

三浦が言う。

「別にいいけど。で、話って？」

奔洞はベンチから立ち上がって、三浦を見つめた。

「昨日の運動会で、陸上部の清元先輩に同学年の先輩が告白したわ」

「ええ、そうらしいわね」

奔洞の表情はよく分からない。

「で、私と道長は皆本が清元先輩に告白する手伝いをしていたのだけれども」

奔洞が僕に目を向けた。

「あら、知らなかったの？　で、あなたはその告白した先輩の恋愛相談を受けていた」

え？

「それは、質問かしら？　質問なら一個に絞ってほしいのだけど」

「いや、確認よ。質問はこれから」

「どういうことだ？　奔洞が告白先輩の依頼を受けていた？　いや、

それより、何故そんなことを聞くんだ？

奔洞はあくまで普段通り。

「私が調べたところによると、その先輩と皆本は同じ日に『クピド』に訪れている」

同じ日、ということは、僕が行く前か、帰った後だな。

「何で皆本の依頼は断って、その先輩の依頼は受けたの？　何であなたが担当したその先輩は、私達が担当した皆本と違って成功したの？」

何だ、その質問は。まるで、奔洞が何かしたような言い方じゃないか。いや、確かに何かはしているのだろうけど。

「質問は一個だけよ。そして、その質問には答えられないわ。企業

秘密」

「ふざけないで」

三浦が詰め寄る。

「なら、逆に聞くわよ。これに答えられたら私も答えてあげるわ。何でそんなに他人の恋愛に首を挟むの？」

「な、何を……」

今度は逆に奔洞が詰め寄る。

「ねえ、どうして？ どうして自分は恋愛をせずに、他人に恋愛させるの？」

三浦が後ろに下がる。

「そ、それは。私はただ、折角の恋を失敗してほしくなくて……」

「本当に？ それにしては、あなたのやり方はいつも強引すぎる気がするんだけど。私の気のせいかしら？」

「……」

奔洞がさらに詰め寄る。

「ねえ？ どうして？ どうして何も言わないの？ ねえ、何か言つてよ」

「……」

「私が代わりに答えてあげるわ。あなたは自分が恋愛するのが怖い。破局が、失恋が怖くて、他人の恋愛を見ることで自分を納得させている。友達だからと言って、あなたは、自分が意気地なしだということを誤魔化す為に友達に恋愛させている」

「そ、そんな……」

「あなたは、臆病で、意気地なしで、自分の為には他人の人生なんてどうでもいい、と考えるような悪魔のような女なのよ」

奔洞が言い放つ。

「話は終わりよ」

奔洞はそう言って、ベンチに座りなおした。

三浦はわなわな震えていたが、限界がきたのか、突然走り出してどっかに行った。

奔洞はそれでもただ表情を変えず、髪に手を伸ばす。

奔洞の知られざる一面を見たような気がした。いや、いつもの奔洞がきつくなっただけか。

「あんたは何かないの？」

ふと、奔洞が僕に声を掛けてきた。

「何かって？」

「三浦から聞いたでしょ。私が例の先輩の依頼を受けたって話」
もしかして気にしているのか？

それとも、単なる興味か？

「別に。恋愛相談師は奔洞であって、僕じゃない。そのことが分かっただけだよ」

僕はそう告げる。

奔洞は「そう」と言って、立ち上がった。

「戻るわよ。そろそろホームルームが始まる」

中庭を後にする。

でも、分かったのはそれだけじゃない。

僕も三浦と同じだった。

自分の恋愛感の為に皆本の恋愛を利用した。

奔洞の言葉を思い出す。

恋愛は人の人生を変える。

だからこそ、僕や三浦は失敗を恐れる。

けど、それは少なくとも僕においては違ったのだ。

僕の恋愛感に関する問題はあくまで、自分だけの問題。相手がどう思おうが関係ない、自分の意識によるものなのだ。

そのことに僕はさっきやっと気づいた。

「ふっふっふ……」

おかしくなった。

皆本の告白が失敗してから、僕の中にあつた違和感に気づいた。本当はどうに分かっていた。識っていたんだ。ただ、知るのが怖かっただけで。

その恋愛が本物なのか勘違いなのか、なんて毎日考えているのは僕だけなのだ。他の人間はそんなこと考えずに、恋を恋だと受け止めることができる。

こんなもの、自分の問題以外の何ものでもない。

「はっはっは……」

僕は何をしようとしていたんだろう。

まったく、ばかばかしい。

だけど。

一つ、とてつもない問題が生まれてしまった。

僕は。

恋愛をできない。

恋愛感情を信じられない僕を変えることは、他人にはできないのだから。

「ほんと、ばからしい」

【奔洞】

校舎に戻って、ホームルームを待つ。

その間、クラスメイト達と会話をする。

「あ、そうそう。知ってる？ 奔洞さん」

「知ってる、て、何を？」

「杉原君と長谷川先輩、別れたらしいよ」
え？

【皆本】

「先輩と一緒に部活をしていて、いつのまにか先輩を好きになって
いる俺がいました。」

きっかけはないけど、理由も分からないけど、それでも、俺は先
輩のことが好きです」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／三章 先輩・後輩／三話 後日談（後書

三章が完結し、第一部も残り半分になりました。物語は架橋にはいっていきますので、ご注目ください。

【道長】

運動会に引き続き、文化祭も終わった。季節は秋の盛りを越え、冬に入ろうとしていた。

「そういえば、道長君。この前駅前で見たんだけど――」

僅鵯が僕に話し掛ける。

クラスメイトの中に友人はいれども親友はいない僕に、転校生の僅鵯は何かと話掛ける。二年生の二学期から転校して来たので、クラスの中に入りにくいのだろう。数ヶ月経った今ではそういうわけではないが。

「道長君って、バイトしてるんだよね？ どこで働いてるの？」

「え？ あ、うん。しがない寂れた喫茶店だよ」

「ふーん。喫茶店か。いいね、喫茶店。コンビニ店員なんかより楽しそうだ」

「まあね」

確かに僅鵯の言う通り、「クピド」のバイトは、レジ打ちなんかよりもよい選択だったと思っている。

「そのバイト先って、奔洞さんと同じなんだって？」

「うん。でも、別にそこまで親しいってわけじゃないよ。バイトがなければ接点がない間柄だからね」

僅鵯は「そうなんだ」と呟く。

チャイムが鳴って、授業開始を告げた。

放課後はすぐに学校を出る。

陸上部が活動する運動場の脇を通る。

最近話題の長谷川先輩が目に入った。

杉原と長谷川先輩の破局は、一度知れ渡ると、たちどころに全校生徒の知るところとなった。それほど、二人の仲のよさは有名だったのである。そして、破局の原因が「何となく」では、注目を集めるのは当然である。人を好きになるのに理由はなくても、人を嫌になるのには理由がある、というのが世間の認識だ。

蓑宮と目が合った。

蓑宮は僕に手を振って、すぐに部活に戻る。

陸上部を辞めると言うのと、蓑宮は意外にも何も言わなかった。ただ笑って、「やっぱりそうか」と呟いただけだった。

僕は学校を出て、「クピド」に向かった。

いつものことだが、奔洞は僕より先に「クピド」に来ていた。

「遅い」

店に入って即行で文句を言われる。

「奔洞が早すぎるの」

カウンターに入る。

今日もお客はおらず、抄吾さんもない。

お客の方はともかく（よくないけど）、この店で唯一の大人である抄吾さんはこれほど店にいないのいいのだろうか？

毎度のごとく疑問に思うが、毎度のごとく奔洞にコーヒーの注文を受け、毎度のごとく思考が止められる。

「今日はいつもより多めにちょうだい」

「はいはい」

僕は、どうせだから、と自分のカップもいつもの20%増しに淹

れることにした。

本当にこんなに仕事をしなくて大丈夫なのか、と一瞬不安になるが、実害があるわけではないので、心配するのを止めた。

いつもと変わらない平穏な日常。

僕はいつもでここにいるつもりなのだろうか？

自問自答する。

例の問題は僕自身の問題なのだから、ここにいたところで意味はない。

「『友達に恋愛させている』、か」
呟いてみる。

「ん？ 何か言った？」

奔洞がこちらを振り向いた。

「いや、何も」

何も、ないよ。

お客のいない「クピド」だけど、お客が来ないなら店は開かない。
お客は来る。色恋沙汰を抱えて。

お客はコーヒーを飲み終わったカップを洗い終わった頃にやって来た。

ドアベルを鳴らして、おそろおそろ入って来る。

そして、奔洞に向かって、ぽつりと呟いたのだった。

「恋に落ちちゃった……」

彼女の名前は壺端透。

ちよっと自分の苗字にコンプレックスを抱く、天原高校の二年生、
ぶっちゃけ同級生だ。が、僕は知らなかった。

話をまとめると、どうも一目惚れらしい。

今日の下校途中、壱端は車にひかれそうになったそう。そのとき助けてくれた青年に心を奪われたらしいが（壱端によると胸がキュンと鳴ったらしい）、そのとき初めて会ったので、名前も年もどこに住んでいるのかも分からない、というのが現状だ。

「で、私に何をしてほしいの？」

奔洞が壱端に言う。

「その人を探してほしいの、智美ちゃん」

壱端は無理難題を依頼した。

「見つけて、どうするの？」

依頼の内容には触れずに、奔洞は質問する。

「まずはお礼を言いたい。あのときはびっくりしてお礼を言えなかったから。で、出来れば、そ、その、こ、告白した、い」

最後、途切れ途切れになりながら、壱端は答えた。

そして、「もう、智美ちゃんの意地悪」と、奔洞の背中を叩く。

「わ、分かったから、止めて」

奔洞は壱端の腕を取って、止めさせる。

「準備とか下調べとかあるから、今日はこれで終わりにして、また今度来てくれない？」

「分かったわ。ありがとう、智美ちゃん。やっぱり智美ちゃんに相談してよかった」

壱端は奔洞に言うとき微笑んで、「クピド」を出て行った。

終始、壱端は奔洞だけを見て、僕にはまったく目を向けなかった。

「ふうう」

壱端を帰して、奔洞がため息をつく。

「何よ」

奔洞を見ていた僕を睨む。

「いや、奔洞にも友達がいたんだなって」

「悪かったわね」

奔洞はもう一度ため息をついて、呟いた。

「一目惚れ、か」

気になったけど、閉店時間も迫っており、店の片付けを優先した。

その週の日曜日、僕は奔洞に朝から呼び出された。

集合場所となった「クピド」に向かうと、すでに奔洞と、今回の依頼者である壺端が来ていて、一服していた。

「遅い」

挨拶代わりの文句が飛んでくる。

「二人が早すぎるの。集合時間までまだ二十分もあるのに」

「分かっていますねー」

壺端が「ちっちゃ」と指を振る。

「智美ちゃんは道長君と接点を持ちたいんですよ」

壺端は奔洞に聞こえないように、僕に耳打ちした。

初めて会ったとき、僕を無視していたわけではなく、「クピド」のお客だと思っていたらしい。

自己紹介をすると。驚かれた。

「あなたが噂の道長君ですか？」

「有名なの？」

「そりゃあ、友達の近くにいた男子に興味のない女の子はいませんよ。男の子だって、そんなものでしょ？」

「……まあ」

「冗談ですよ。道長君は足が速いですから。陸上部を抜いて活躍しちゃったら、いやでも有名になりますよ」

思い返しはさせておき、僕らは例の一目惚れの相手を探しに集まったわけだが、方法はまだ聞いていない。

「さあ、行くわよ」

奔洞は店の戸締りをして、開店の看板を掛けた。お客様への謝罪の文句が書かれた紙と一緒に留める。

「え？ いいの？ 私のためにお店お休みにしちゃって」
「いいのよ？ どうせ誰も来ないし、謝罪文も書いたんだから」
仕事人にあるまじき発言をして、奔洞は「クピド」に背を向ける。
「ほら、早く」

僕らはまず、壱端がその一目惚れの王子様（仮名）と出会った場所に向かった。

クラクションを鳴らして車が通る。

運命の出会いを果たした交差点は、人と車で一杯だった。

さすが休日の駅南前である。車と人の往来は激しい。

「で、この中からどうやって探し出すの？ というより、本人はここにいてという保障はどこから？」

「王子様がいる確率は高いわよ、道長。」

壱端が王子様と巡り合ったのが午後7時過ぎ。壱端によると私服姿だったらしいわ。で、駅の方からやって来て、あっちの方へ向かった、と。

あっちって、企業ビルや商店街住宅地ではないのよね。ということは、外からこっちに来たっていうわけではない、ということになるわ。外からこっちにやって来た、と考えるのが妥当よね。で、問題は何をしに来たのか？ということ」

「習い事？ 塾とか？」

「その通りよ。調べてみると、あったわ。午後七時半から授業が始まる学生塾が一つ」

「なるほど。で、今日はこれからテストがある、とか？」

「大正解。どうしたの？ 今日はやけに理解が早いじゃない」

「あのね、奔洞――」

「智美ちゃん！」

壱端が声を上げた。

奔洞が壱端に目を向ける。

「ごめんなさい。これはあなたの王子様の搜索だったわね」

「だ、か、ら、その、『王子様』って言うの、止めて！ 智美ちゃん。道長君もですよ！ ああ、もう。智美ちゃんのせいで何を言おうとしたのか忘れちゃったじゃない」

壱端が奔洞の背中をポコポコ叩いた。

【奔洞】

「そろそろ電車が着くわよ」

時計を見て、私は言った。

この駅には上り、下り、合わせて十五分おきに電車が来る。王子様がどの電車で来るのか分からない以上、全ての電車の乗客を調べなくてはいけない。普通ならば。

「でも、どうするの？ 一人や二人ってわけじゃないでしょ、私が確認するのは。でも私、あの人の顔をそこまで覚えてないし。智美ちゃんの考えだと塾生ってことだけど、その塾の人も一杯来るんですよ？」

壱端が不安そうに聞く。

「ええ、そうよ。まあ、その辺りは私に任せて」

普通じゃない私にね。

壱端の「赤い糸」に目を向ける。

一目惚れには二種類ある。

単なる一目惚れと、「赤い糸」による強制認識だ。

壱端は一目惚れをするような女の子じゃない。それは何年間も一緒にいる私が知っている。そして、だからこそ私は彼女に「クピド」の裏家業のことを話した。

壱端の一目惚れは「赤い糸」によるものだろう。

だったら、その王子様を見つけるには、「赤い糸」を辿って行くだけでいい。

もし間違っていたら、「違ったね」と言うだけだ。

壱端の「赤い糸」は、今のところ北東に伸びている。ここを通る路線は基本的に東西に伸びており、王子様は現在ここから北東の方角にいるということが分かる。

「赤い糸」に大きな変化はない。

もし王子様が駅に着いたなら、「赤い糸」は右に左にと移動することになる。

人が大勢降りてくる。

道長と壱端は、交差点にやって来る人達に目を走らせているが、私は気にしない。

「皆行っちゃったけど、いいの？」

壱端が不安そうに聞いてくる。

「いいの。あの中にはいなかったんだから」

私はそう答えて、意識を「赤い糸」に移す。

次の電車が間もなく到着する。

「赤い糸」が動いた。

「赤い糸」の指す方向が突然変わる。

来た。

私は駅の出口に目を向ける。

他の二人も私につられて目を向けた。

「赤い糸」をこうやって使うのは、これで二回目だ。

私は、壱端の「赤い糸」に目を向ける。

壱端の「赤い糸」と結ばれた人が、あの中にいるはずだ。

壱端の「赤い糸」を目で追う。

「赤い糸」は、真っ直ぐ、王子様と思われる人物の小指に繋がっている。

壱端の顔色が変わる。

私は確信した。王子様は、運命の人だ。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 四章 一目惚れ／ 一話 搜索（後書き）

やっと四章に入りました。ここから、第一部の話の核に繋がってきます。

【道長】

「無理よ、無理！」

壱端が首を振り、叫ぶ。

一目惚れの相手との再会を果たした壱端は、顔を合わせるなり走って逃げ出してしまったのだった。

僕は壱端を追い、奔洞がターゲットを追うことになり（逆の方がいい、と言ったのだが、却下された）、駅前のベンチまで追ってきたのだ。

「あ、あのー、壱端？」

「大体、どんな顔して会えばいいのよ！ こんな所にまで追ってきて。完全なストーカーカーじゃない！ って、あつ……」

壱端が僕に気づいて、言葉を詰まらせた。

「えー、あー、おほんっ」と咳払いをして、いつもの口調に戻って白を切る。

「ところで、智美ちゃんはどこですか？」

「王子様のところ」

僕は何も突っ込まずに、質問に答える。

「道長君」

「はい」

「怒るよ」

二人でそんなことを言っていると、携帯が鳴っていることに気づいた。

相手を確認して電話に出る。

奔洞と話をして、駅前の噴水に一端集合ということになった。

壱端にその趣旨を伝え、二人で奔洞を待つ。

恋人ばかりの中に二人でいるのは気恥ずかしいので、少し離れた所に移動して、世間話に興じていると、何人かのクラスメイトを見かけた（僅鴉は手を振ってきたので、振り返しておいた）。

「そういえば、道長君は智美ちゃんとどんな風に出会ったんですか？」

壱端がふとそんなことを尋ねた。

「大したことはないよ。店長の抄吾のさんとちょっと面談しただけ」
僕は何度も言った答えを言う。

「僕と奔洞はそういう仲じゃないよ」

暫くの沈黙。

奔洞はまだ帰ってこない。

周囲の人達の笑い声が聞こえる。

「道長君、正直に答えて下さい」

ふと、壱端が真面目になった。

「え？ あ、うん……」

そんな壱端に押されて、僕はたじろぎながら答えた。

「私って変ですよ？」

質問の意図が図りきれず、僕は壱端の次の言葉を待った。

「私、今まで男の子を好きになったことなんて、なかったんです。ドラマや小説で識ってはいましたが、経験はありませんでした。なのに。突然、『恋に落ちた』だの『運命の人』だの興奮しちゃって。相手がどんな人か知らないのに、理由なんてあるわけではないのに、恋を知らない少女は、恋に恋して、その想像に溺れています。そんなことは分かっているのですが、分かっているのに、あの人のことを考えてしまうんです」

「僕は――」と答えようとして、僕は言葉を飲み込んだ。

言葉を念入りに選び直す。

「僕は奔洞と違って恋について大した考えは持っていないけど、誰

でも初めての恋にはそうやって戸惑うものだと思うよ」

気持ち悪くなりながら、僕は仮面の言葉を紡ぐ。

壱端はそれには何も答えず、呆と噴水の恋人達を見つめている。空気が重くなって、暫くしてから奔洞が帰ってきた。

例の男子の塾の確認と、終わる時間を報告して、奔洞はここにも意味がない、と言って、近くのファーストフード店に入った。お昼までまだ一、二時間くらいあるので、店内は人がまばらだった。

会話の内容はただの世間話で、奔洞が積極的に話を振った。

奔洞が壱端と最近始まった新ドラマの内容について話しているのを、呆と聞きながらただひたすらジンジャーエールを口に運ぶ。

一目惚れと初恋、か。

僕は壱端を見つめた。

壱端との会話を思い出す。

僕は、一目惚れを信じない。

結ばれるべき運命の人は、この世界中に一人しかない。

恋愛は結婚への道のりだと考えている。だから、恋人は運命のパートナーでなければならない。

地球上には軽く見積もっても、運命の人となりうる異性は三十億人以上もいる。恋愛の相手とは、運命の相手になるべき存在なので、そう簡単に見つかるはずがない。というか、運命の相手となる恋人を、そうやすやすと作っていいものではないのだ。だから、その出会い、その日々、その思い出は特別であるはずなのだ。僕らは野生動物ではないのだから。そう簡単に人は恋をするべきではない。

【奔洞】

「で、これからどうするの？」

昼食を食べ終わって、店内が静かになりだした頃、道長が口を開いた。

「そうね。片山君（盗み聞きにより何とか例の王子様の名前が手に入った）が帰るのはまだ先だし、自由行動にでもする？」

私の提案に以外そうな顔する。

今のは少し浅はかだったわ、と反省し、言葉を続ける。

「調子はどう？」

壱端を氣遣うことで、道長の疑問への答えとする。

「ねえ、智美ちゃん」

壱端が不安そうに聞く。

「恋愛相談師として、どう思うか答えて。私って変？」

意外なことを聞く。

私は形だけの言葉を羅列した。

「『初めて』は誰だって不安を覚えるものよ。大丈夫。私を信じなさい」

平然と嘘をつく。

躊躇いはない。

これが一番いい方法なのだから。

壱端を見つめながら、他に話題はないかと探す。

そして、外から私達を眺める蓑宮を見つけた。

偶然を装って、蓑宮を招き入れる。

アライバイ工作もばっちしな蓑宮は、右手に買い物袋を提げている。動揺をすぐに隠し、堂々と店内に入って、オレンジジュースを注文して、平常心を保つ。

その様子を見て壱端は、

「あ、ちよっと気分悪くなったんで、私は外へ……」
逃げた。

それに続こうとする道長の足を踏み、蓑宮の反応を待つ。
今、私と道長は四人テーブルに向かい合って座っている。

蓑宮としては私との差を埋めるために行動に出たいところだが、私と向かい合って座るということは、道長への表現となる。

私は道長が好きというわけではないが、危険因子は取り除いておくに限る。

蓑宮に席に座るように促す。

オレンジジュースを片手に道長の隣に座る。

以前と同じように、私は蓑宮と向かい合う。

「こうやって会うのは久しぶりだね」

私の方から声を掛けた。

「ええ」

必要最低限レベルの返答が返ってくる。

蓑宮の態度が変わったのはいつ頃だったかしら？

確か、二学期になってすぐの頃だったような気がする。

道長の方に目を向けてみると、当の本人は首をキョロキョロさせて、脱出の口実を探していた。

「ねえ、そうよ」

自分から話し掛けてきたことに多少驚きながら、私は話にのる。

「この間、杉原君と長谷川先輩が別れたんだよね？ 何でだと思う？」

「分からないわ。それは個人的な問題でしょうから」

使い古された私の答えに、蓑宮は何も言わない。

会話はストップ。思考はノンストップのフル回転。

私は自分から道長の気を引くようなことをするつもりはない。けど、道長が誰かに靡くのは困る。

それには今のところ蓑宮が一番の弊害となっている。

ここ数ヶ月、蓑宮は私に敵対行動を示してきた。

私を恋敵と認識したということだ。

問題は、私と張り合うために蓑宮が何らかの行動を起こしてしま

う可能性だ。

一度起こした行動はなかったことにはならない。
道長を駄目にされてはかなわない。

取り返しがつかなくなる前に、蓑宮を止める。

そのために、蓑宮の行動を分析する。

オレンジジュースを飲み終わると、蓑宮は立ち上がった。

「それじゃあ、私はこの辺りで」

そう言って店を出て行く蓑宮を私はじっと見つめる。

結局、蓑宮は一度も道長を相手にしなかった。

【道長】

蓑宮が帰ってすぐ壺端が戻って来た。

黙って自分の席に着き、すぐ立ち上がってトイレに行く。

「どうでした？」と聞いていると思っていたので、拍子抜けだった。

奔洞と二人っきりで壺端を待つ。

「クピド」での二人つきりとは違い、会話がしづらい（「クピド」での会話は一方的なものでもあるが）。

沈黙は意識を促す。

僕は沈黙を破るために話をふった。

「奔洞は勘違いの恋についてどう思う？」

壺端のことを含ませる。

「どうもこうも、勘違いなら、恋じゃないでしょ」

「はあ……」

はぐらかされた。

「でも——」

と、奔洞は続ける。

「本人がそうだと思ったら、結局はそれが恋になっちゃうのよね」
ほとんど独り言のように呟く。

奔洞は呆と、窓の外を眺めた。

僕もそれに合わせて、外に目をやった。

暫くして壺端が帰ってきた。

心なしか、やはり元気がないような気がする。

こちらが心配するようなふらふらした足取りで、僕らの前にやって来ると、奔洞にポツリと呟いた。

「ねえ、智美ちゃん。もういいよ」

「え？」

「だからね。今回の依頼、なかったことにしてくれない？」

「で、でも、突然何で？」

つい口を挟んでしまった。

「大した理由はありません。よく考えたら、これは恋じゃなかったと気づいただけです」

淡々と答える壺端。

奔洞も驚きを隠しきれていない。

奔洞が何か言うと思ったが、ただ壺端を見つめるだけ。

「――壺端、何があった？」

「何ありませんよ。道長君」

そう言うと、壺端は一人で店を出て行ってしまった。

突然の展開に、残された僕らは、ただ座りつくすだけだった。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／**四章 一目惚れ**／**二話 勘違い（後書き**

や」と話の本筋が見えてきました。次で四章は終わりです。

【道長】

壱端が依頼を取り消して、一週間が経った。

あれ以来、僕は壱端に会っていない。

「クピド」でも壱端のことは会話し辛く、話題にあがることはなかった。

この一週間で恋愛相談の依頼が三件もあったが、奔洞はその全てをその場で断っている。

壱端の件が堪えているのだろうか、恋愛について僕に蘊蓄を語ることがなくなった。

「クピド」での口数も減り、一人で考えていることが多くなった。今も奔洞は一人ノートに向かっている。

すっかり身に染み付いたコーヒーの準備を済ませ、黙って奔洞の座るテーブルに置く。

相変わらず抄吾さん店には顔を見せず、店内の人間は僕らだけ。

することのない僕は、棚に並べられた食器類を、一つ一つ取り出して磨いていく。

「はあー」

知らず知らずのうちにため息が出た。

奔洞の方にめを向ける。

あの日、壱端は突然依頼を取り消したわけではない。僕と奔洞、両方の見解を元に判断したのだろう。

だが、そうなる疑問が生じる。

あの発言のどこに依頼を取り消す要素が含まれていたのか？と、考えてみるも。まったく分からない。

恋愛相談師でない上に、自らの恋愛観に欠陥を持つ僕は、思考を中止する。

今日は早めに店じまいにしよう、と奔洞に声を掛けた。

「そろそろ閉店だよ」

「――そう」

ノートと睨めっこをしながら、奔洞はボソツと答える。

僕は今日何度目になるか分からないため息をついた。

「クピド」の鍵は抄吾さんと、そして何故か奔洞が持っており、

抄吾さんはあまり店に現れないので、奔洞が鍵を閉めることになる。

「僕はもうすぐ帰るけど、奔洞は？」

店内の片付けを粗方終えて、奔洞にも帰るように促す。

「――残るわ」

顔を上げずに答える奔洞。

「そういえば、最近はいぶ暗くなってきたね」

「――そう」

……。

伝わっているのか、いないのか？

別に最近治安が悪いわけではない。

だが、やはりここはこうするのが礼儀ではないだろうか？

「奔洞はいつ帰るの？」

もう一度声を掛ける。

「暫くしたら」

素っ気無い返事にため息をついて、僕は店を出た。

冬の夜風は体に堪える。

「クピド」の外に出て、風に煽られながら奔洞が出て来るのを待つ。

余計なお世話かもしれないが、奔洞だって十七歳の女子なのだから

ら、と自分に言い訳する。

「はあー」

これは自分の行動に対するため息。

僕は一体どうしたいのか？

全ての行動パターンは、頭の中で求愛行動と直結される。

あらゆる恋愛小説を読み漁ったがゆえの悲劇。

「はあー」

再び、ため息。

体が冷え始めた。

徐に腕時計で時間を確認する。

まだ十分も経っていないのに、ずっと待っているような感覚に陥る。

「いつまでいる気なんだろう」

一人呟いて「クピド」の方を向く。

店の明かりは点いたままだ。

僕は店内に戻ることにした。

【奔洞】

「はあー」

ノートを見つめながら、ため息をつく。

道長はもう帰ってしまった。

一緒に帰ってもよかったかなと、すこし後悔。

私からならともかく、道長からのアプローチなら別に断らなくてもいい。何があろうと、私の「運命の人」は道長なのだから、他の女に靡いてもらっては困る。だからといって雰囲気操られて私が道長に惚れるのは御免だが。

全ての現象には必ず何らかの原因がある。

どこかの誰かさんの言葉だ。

そんなことはどうでもいいが、とにかくそういうことだ。

恋愛において、その始まりは必ず存在する。本人が意識しているかどうかは関係ない。

恋愛とは、「運命の人」を見つけ出すための手段だ。だが、恋愛は一生にそう何回も出来るわけではないので、勝手に相手を「運命の人」だと決め付けてしまう。だから、初恋で「運命の人」を引き当てるのが一番いい。恋の数をこなすほど、「運命の人」が誰だか分からなくなる。

「『赤い糸』で結ばれていなくても、本人達が納得していればそれでいいんじゃないんですか？」

「クピド」での仕事を持ち掛けられたとき、私は抄吾さんに問うた。

「『赤い糸』の効力は無意識かで発生します。たとえば本人が今のパートナーで満足していても、『赤い糸』によって『運命の人』を脳は潜在的に探します。もし、そこに『運命の人』が現れたらどうなると思います？ 脳はそれを記録し、『運命の人』を物理的に求めます。そしてそれは、今のパートナーへの思いを惑わし、破局へ導きます。終わりが見える恋ならば、それを回避させるのが人情というものです」

私は道長が淹れてくれたコーヒーに目をやった。

すっかり冷めてしまったコーヒーに口をつける。

「うっ……にがい」

ミルクが入っていないことに気づいて、咳き込む。

道長がわざとミルクを抜いたのだろう。

明日文句言ってやらなきゃ、と思いながら、私は帰る準備をしに従業員室に入った。

【道長】

店に入ると、誰もいなかった。

奔洞が座っていたテーブルには、僕が用意したコーヒーと、彼女がいつも何かを書いているのへとが置いてある。

おそらく奔洞はトイレにでも言っているのだろう。

さすがにもう飲まないだろう、と冷えたコーヒーを流しに流そうとテーブルに近付いて、開かれたノートが目に入った。

「……………」

奔洞の仕事のノート。

おそらくこの中には奔洞の恋愛観が詰まっているのだろう。

手にとって、徐にページを開く。

杉原幹也。長谷川美久。

楠正史。遠山和子。

松本正宏。秋山楓。

皆本清。清元瑞穂。

壺端透。片山篤。

高二になってから奔洞が手掛けた恋愛相談。

五組中三組に破局の二文字が刻まれている。

なるほど。たしかにこう何回も失敗が続けば、さすがの奔洞でも落ち込むだろう。

けど、それは彼らの恋愛が偽物だっただけではないのだろうか？

「運命の人」はこの世にたった一人しかいない、特別な存在だ。

そう簡単に見つかるわけではない。

幼馴染に恋をして、クラスメイトに恋をして、先輩や後輩に恋をして、初めて会った人に恋をする。それは全部偽物だ。

僕はノートを閉じて、店を出ることにする。

奔洞と一緒に帰って、どうしようというのだ、僕は。

恋にでも落ちるか？ 御免だ。

僕らはあくまで、ただのアルバイト同士。そんな状況から生まれ

る恋なんて、所詮雰囲気に乗せられただけの、勘違い。

世の中は勘違いさせるための罠で溢れている。

特にここなんかは、勘違いを心の奥にまで植え込む手助けをしている。

なのになんでこんな所にいるのだろうか？

勘違いなのに。

【奔洞】

店内に戻ると、私のノートがさっきと逆向きに置いてあった。

「あっ……」

瞬時に、道長が戻ってきてノートを読んだものと推測する。

しかし、なにも心配することはない。

ノートには「赤い糸」については何も書いていないし、私が道長をどう思っているかが知られることもない。

ただ一つ気になることといえば。

道長がこの破局の連鎖の共通点に気づくかどうか。

「クピド」に鍵をかけ、帰路についた。

【壺端】

「あなたと初めて会ったあの日、私は直感しました。ああ、この人が私の運命の人なんだって。

だから私は自分の気持ちに素直になります。

あなたが、出会った瞬間から好きでした」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 四章 一目惚れ／ 三話 ずれ（後書き）

四章もやっと終わり、物語は山場を迎えます。向後期待ください。

【道長】

「僕、蓑宮さんのことが好きなんだ」

僅鵠にそう告白されたのは、十二月になってすぐのことだった。

「——そう……」

僕の素っ気無い態度に、僅鵠は不思議そうな顔をする。

「どうしたの？」

「いや、てっきりうろたえるものばかり思ってたから」

「別に……。僕はうろたえるほど蓑宮との男女の仲が深いわけではないよ」

ほんと、何度目だろう、この台詞。

「でも、自分に近い人だったら多少は驚くでしょう？」

「『多少』はね。僕、一応これでも修羅場を見ているから」

「『見てきた』んだね。それって、バイトのこと？」

「まああって、『クピド』のこと知ってたっけ？」

「前にも聞いたよ」

「そうだったっけ？」

でも、まあ、高二になってからはうちの学校の生徒を対象としていたし、噂が広がっていてもおかしくはないのか。

「それでお願いがあるんだけど」

僅鵠が僕に「お願い」のポーズをとる。

「僕の恋愛相談、受けてくれないかな？」

「ってわけなんだけど」

「調子が悪いなら断ろうか」と言うことはない。後が怖いから。奔洞はそれを黙って聞いていたが、話が終わると口を聞いた。

「あんたはどうなのよ？」

「え？ 僕？」

「そうよ」

奔洞は「分かってないわね」と首を振る。

「そりゃ、私は受けるわよ。仕事なもの」

依頼を断り続けている奔洞は平然と言う。

「問題は道長、あなたよ。あなたも一応この店員なのだから依頼を断ってもいいのよ。今回は特別だけど」

奔洞が気を使う。

僕はぶっきらぼうに答える。

「必要ないよ。蓑宮が誰とどういう関係になろうと、僕には関係ない。ただのお隣さんだよ」

「ふーん。そう……」

奔洞は呟いて、考え込む。

少し気まづくなったので、僕は話題を他に探す。

「そういえば杉原と長谷川先輩は何で別れたの？ 理由が『何となく』っていうのは納得がいかないんだけど」

奔洞は「さあ？」と素っ気無く答えるだけで、黙ってしまふ。

僕は会話を続けるのをあきらめて、沈黙に参加する。

暫くして、奔洞が口を開いた。

「道長は『赤い糸伝説』、知ってるわよね？」

意図の分からない質問に、大して考えず答える。

「まあ、概要程度なら……。で、どうしたの？」

「ちよっと抄吾さんと話しててね。私って、恋愛相談師じゃない。で、最近のことを話したら、そういう話題になったわけ。でも、もし、『赤い糸』で結ばれた恋人が別れたとしたら、何故だと思う？」

「何故って……。そんなの、簡単じゃん。切れたんじゃない？」
自分で言っときながら、あれ？と疑問に思う。

「赤い糸」って絶対に切れない設定じゃなかったっけ？

「で、どう？」

奔洞はそれには答えず、一人でぶつぶつ呟き始めた。

「一体何だったの？」とぼやいてみるも、反応なし。

【奔洞】

陸上部員に目を向ける。

グラウンドを走る部員の中に、長谷川先輩を見つける。

陸上部員は他の運動部に比べて人数が少ないので、近付かなくても「赤い糸」の確認ができる。

「赤い糸」は何者かに切られた——か。

昨日の道長の意見を思い出す。

なるほど。「切る」ね。

「切る」といっても、本当に「赤い糸」をぱっつんと「切る」わけではない。

そもそも、「赤い糸」という名の糸は実在しない。

認識するときに脳がそう解釈しているだけだ。

要はイメージの問題。だとすれば、「赤い糸」を「切る」ような動作をすることで、イメージが沸き、「赤い糸」を構成する情報をどうにかするのだろう。言っていて自分でもよく分からないが、まあ、いい。それにこれは道長が適当に言ったことだし。

大体、私はこの力について学問的な興味はない。あるのは、どうすれば視えなくできるのか、その方法だけだ。

長谷川先輩の手を見る。

やはり、「赤い糸」が消失している……。

途中で「切れている」のではない。「無くなっている」のだ。
だから最初、私は二人の身の方に問題が起きたのだと思ったわけだが。

事実、その可能性も否めない。

だが、全ての「赤い糸」が視える私がいるのだから、「赤い糸」を操る人間がいてもおかしくない、というのが抄吾さんの仮説だ。

「『赤い糸』を操る、か――」

もしそんなことができたら、私は何をするだろうか？ 何を求めるだろうか？

「そんなもの、分かるわけじゃないじゃない」

答えの出ない思考に終止符を打つ。

教室に戻ろうとして、視線を感じて振り返る。

蓑宮がじっと私を見つめていた。

【道長】

蓑宮は自分にとって何なのか？

「クピド」に僅鵯が来る前に、奔洞が僕に問うた。

その奔洞は、今は僅鵯の恋愛相談を行っている。

蓑宮は――。

蓑宮と過ごしたのは。

子供の頃から遊んでいたから、小学校に入る前の四年間、一週間に七割の確率で遊んでいたとして、 $365 \times 0,7 \times 4$ で、1022日。

義務教育期間の間、一週間で学校に行くのは五日間。祝日は一年間に十五日。春休み、冬休みは二週間。夏休みは四十日。これが九年間なので、 $(365 \times 5 / 7 + 15 + 7 \times 5 / 7 + 2 \times 2 + 40 \times 5 / 7) \times 9 \parallel 1774,35$ 。

同様に高校二年分は、天原高校は夏休みが二十日なので、 $(197, 15 + 20 \times 5 / 7) \times 2 \parallel 422, 86$ 。
よって、 $(1022 + 1774, 35 + 422, 86) \times 1 / 4 + 9 + 2 \parallel 214, 61$ 。

一年は三百六十五日で、一日の内、蓑宮と直接接するのは一時間程度なので、 $214, 61 \times 1 / 365 \times 1 / 24 \parallel 0, 024 \div \parallel 2\%$ 。

一緒に過ごしたのは二%。

蓑宮と共に過ごしたのは、僕の人生においてたった二%にしかすぎない。「幼馴染」という言葉の鎧がなければ、僕と蓑宮の関係はこんなにも脆い。

【奔洞】

「赤い糸」消失の件については、学園内の何者かによるもの、という方針でいくことを、抄吾さんと決めた。

可能性だけでいうなら他にも仮説は多くあったが、私の行動可能範囲内に絞ったための結果だ。

今私は松本と秋山の後を追って廊下を歩いている。

私の知っている覚醒した「赤い糸」はこの二人のものが最後。

忘れがちだが、私の「赤い糸」の感知能力は特別製だ。普通は覚醒した「赤い糸」しか視えない。ならばあの二人を監視するのは妥当というところだろう。

二人は会談を上がって屋上に向かっている。

天原高校の屋上は解放されており、昼休みの今は食事をとることができる。

二人が屋上へのドアを開けて入っていく。

「さてと」

ドアの前で立ち往生。

さて、誰でも進入可能、但しカップルに限る、という暗黙のルールをどうしようかしら？

ドアの窓から外を確認する。

「赤い糸」で繋がれていないカップルが三組。

階段のそばのトイレに入り、通行人を見張る。

これで二人が降りてきたときに「赤い糸」が切れていたら、犯人は確実に限定されてくる。

それにしても。

何かこれは惨めね。

松本と秋山が物理的に離れば離れるほど、監視はしづらくなり、「赤い糸」は切られやすくなる。

二人が離れると、その間に他の「赤い糸」が入ってきて判別しづらくなる。

だが、二人を繋ぐ「赤い糸」だけを感じている犯人にとっては、二人に見られずに「赤い糸」を切る絶好のチャンスになる。

放課後になり、生徒達が下校し始める。

こうなると私の手に負えなくなる。

私は靴を履き替えると、「クピド」に向かった。

【道長】

奔洞は僅鵠の依頼を断ることなく恋愛相談を続けている。

ということは、僅鵠には脈あり、ということなのだろうか？
それも、かなりの大脈の。

だが、二人の間に何かイベントが起こった記憶はない。僕が知らないだけ、というのもありえるが。

まあ、でも、これでよかったのかも。

奔洞と僅鵠の二人分のコーヒーを淹れながら思う。

蓑宮が僅鵠とくっつけば、僕が蓑宮のことについて思い悩まなくて済むようになる。

最も楽な恋愛とは、相手に自分から告白してもらい、相手に自分から諦めてもらい、相手に自分から振ってもらうことだ。全てを相手に委ねれば、自分がどれだけ思い悩んでいようと、恋の物語は進んでいく。

僕の止まった恋愛には、外方の力が必要なことは明白だ。

【奔洞】

昼休みの屋上への進出を果たす、という名目で道長に声を掛ける。昼休みになったばかりの教室ではクラスメイト達が各々昼食をとるために移動を始めている。

「屋上に行きましょう」

周りに聞こえるように、でも決して大きくない声で、道長に強制する。

道長は軽く了承して、音をたてて椅子から立ち上がった。

二人で教室を出て、廊下を歩く。

一応、私の目の前には屋上へ向かう松本と秋山の二人がいる。

後ろを振り返り、出てきた教室を確認して、前を向き直る。会話はない。

黙ったまま、階段を上る。

道長は私の横ではなく、一步後ろを保つ。

道長は一体何を考えて私と一緒にいるのだろうか？

私は屋上へのドアを見据えながら思った。

【道長】

今日のお昼に奔洞と一緒に屋上で昼食を食べたので、からかわれる要因が増えた。

おそらく屋上へ上がるために（屋上には奔洞が関わった、まだ破局していない松本と山下のカップルがいた）僕を連れて行ったのだろうか。

それにしても、奔洞はあの状況をどう思っていたのだろうか？
恋人しかいない屋上でのランチ。

他意がない、というには条件が揃い過ぎ。

かといって僕が雰囲気流されていないとはいえない。
これはわざとか偶然か？

それともただの取り越し苦労か？

コーヒーを淹れながら考える。

後ろでは、僅鴉と奔洞が話し込んでいた。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 五章 再び、幼馴染／ 一話 変化（後

やっと五章に入りました。

これから物語は加速していきます。

【道長】

蓑宮と会話して、僅鵲の話題を出すように。

昨日突然言い渡された僕の仕事。

自分でやればいいのに、と思うも、奔洞が言うところからさますぎる、という事実気付いて、渋々承諾した。

学校に着いてから、蓑宮は陸上部の朝練だったことを思い出して、今に至る。

よく考えると、学校では蓑宮との会話が少ないことに気付く。

教室を見渡す。

奔洞はきているようだが、姿は見受けられない。

松本と秋山がいないので、二人の心配でもして追っているのかもしれない。

僕は呆と朝の時間を過ごした。

十分の休み時間はいろいろ忙しく、蓑宮に話し掛ける機会がなかった。

昼休みになるのを待って、「ノート貸して」の口実で近寄ることにする。

いつものように気の合う数人と昼食をとって（奔洞と昼食をとったのは昨日が初めて）、蓑宮が一人になるときを待つ。

蓑宮が立ち上がるのに合わせて僕も立ったら、彼女はこっちに向

かって歩いて来た。

これは面倒くさいかも。

相手がこちらに目的を持って接してきたら、話題に乗せるのは難しい。

蓑宮が目の前で立ち止まると、僕は普段どおりに「何？」と首を向ける。

そこで、何故か沈黙があった。

不意に、不吉な予感がする。

頭に思い浮かんだキーワードは、「昼休み」。
まずい。

とっさに逃げ道を探す。

男子トイレに目標セット。

手を上げて「ちょっと後で」と口にする。

その前に、蓑宮は僕に杭を打ち込んだ。

「付き合ってください」

クラス中の視線が僕と蓑宮に集まる。

突然の展開に、目眩を感じる。

正常に戻りつつある脳に思い浮かぶ疑問は二つ。

何だって？

そして。

どうしてこんなところで？

蓑宮がじっと僕を見つめる。

周りの人間が僕を見つめる。

僕は。

蓑宮のその眼差しを見るしかなく。

一瞬にして、思考が停止する。

静まり返った教室。

自分の心臓の音だけが嫌にはつきり聞こえる。

蓑宮の思ひ。

周囲の重み。

空氣。

流れ。

蓑宮濤。

蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣、蓑宮漣……。

意識が乗っ取られる。

蓑宮とのよき思い出だけが思い返される。

誰よりも先に。すぐそば。握り合った手。笑み。隣。幼馴染の響き。意識したあの日。本……。

本。本。戀愛小説。

⋮
○

思考再開。

現狀解析。

損得勘定。

取捨選択。

まったく、僕は何を迷っているのだろう。

こんなものは。

簡單明瞭。

自明之理。

明々白々。

旗幟鮮明。

考えるまでもないことなのに。

「——蓑宮」

初めて知り合った女の子に。

そばにいた女の子に。

一緒に遊んだ女の子に。

手を繋いだ女の子に。

笑いあつた女の子に。

横を歩いていた女の子に。

幼馴染と呼ばれた女の子に。

勇気を振り絞った女の子に。

好きだった女の子に。

言葉を紡ぐ。

「答えは――」

それが崩壊の兆しになると分かっている。

「否だ」

近所の子供より近くにすんでいただけの女の子に。

家族付き合があっただけの女の子に。

他に年頃の遊び相手がいなかっただけの女の子に。

心細かっただけの女の子に。

話題が共通しただけの女の子に。

学校が同じだっただけの女の子に。

人生の二％を共有しただけの女の子に。

逃げられない状況下で安心しただけの女の子に。

恋愛小説を薦めてしまった女の子に。

思ったより大きな声で。

意識したのより冷たい声で。

拒絶の意を示す。

蓑宮の目が大きく見開かれる。

クラスメイトが動揺する。

僕はそれを視界の端に捕らえながら、さっさとこの場を後にすることにする。

蓑宮の隣を無言で通り過ぎ、教室を出る。

極度の緊張感からまだ抜け出せていない。

自分の選択が正しかったのか、頭がずっと気に掛けている。

できるだけ離れようと、急ぎ足になる。

「待って！」

人通りの少ない廊下に来たところで、蓑宮に呼び止められた。

僕は振り向き、蓑宮と対面する。

目に涙を浮かべて、哀願する蓑宮を、できるだけ冷めた目で見ると、心に心がける。

「ねえ、どうして？ どうして駄目なの？ 何で私じゃいけないの？

？ 奔洞さんが好きだから？ ねえ！」

僕に詰め寄る。

目を見ないように勤める。

「違うよ。別に他に好きな人がいるからじゃない……」

「だったら、どうし——」

「なら聞くけど、蓑宮はどうして僕のことを好きだと思ったの？」

蓑宮の言葉を遮る。

「えっ？」

「僕に告白したんだけら、それなりの理由があって然るべきでしょ？」

僕は蓑宮に一步近づく。

友好的ではなく、威圧的に。

「何でって、それは——」

蓑宮が何かを答える前に、一気に畳み掛ける。

「幼馴染だから？ 他に親しい男がいないから？」

「そ、そんな——」

蓑宮は僕に気圧され、一步下がってしまう。

僕はその一步を確認して、近づいた。

「付き合いが長いから？ 周りに言われたから？」

「ち、違うよ。そんなんじゃない！ 私は、純粹に道長のこと——」

「本当に？ 本当にそうだと言える？ 何かに重ね合わせて、そうかなって思っただけじゃないの？」

蓑宮の後ろには壁があるのみ。後退はできない。

僕ももう、引き返せない。

「ねえ、何か好きになる要因があった？　僕と蓑宮の間に何か決定的瞬間があった？」

「それは――」

「何もない。何もないだろ？　理由はない。きっかけはない。自分で気付いたわけでもない。それって違うよ。恋じゃないでしょ」

一気に捲し立てる。

「その思いは嘘だから、sっさと忘れてしまった方がいいよ」

そういう残して、僕は蓑宮の元を離れる。

蓑宮が泣き崩れるのが分かったけど、振り向きはしなかった。

僕の恋人候補が一人消えた。

「あんた、結構酷いわね」

廊下の曲がり角を曲がって、奔洞と出くわした。

「盗み聞き？　趣味が悪いよ」

「周りによく聞こえるように大声で話していたのは道長でしょ」

奔洞が「よく言うわ」と付け足す。

「それにしても、『好き』って気持ちまでは否定しなくてもよかったでしょうに。思いだけは個人の自由でしょ」

「普通に振るよりはよかったと僕は思っているよ。あれなら、自分の恋愛経歴に傷がつくこともない。真っ白なままでいられる」

奔洞と顔を合わせず、廊下で戯れる生徒に目を向ける。

「真っ白ね……。意外だわ。道長がそんなことを考えていたなんて奔洞も僕と顔を合わせようとは思えない。」

「でも、それでいいの？」

「何度も言うけど、これでいいんだ」

蓑宮がいる方へ目を向ける。

「いつまでも『幼馴染』の関係にしがみついているわけにはいかな
いから。僕にとっても、蓑宮にとっても、ね……」

「ふーん、そう……」

【奔洞】

道長が蓑宮を振ったことは、昼休みの間に高速で学内に広がっていた。

それもそうだろう。

白昼堂々と教室で告白したのだから。

昼休みぎりぎりまで道長は帰ってこなかった。

蓑宮は午後の授業になったも戻ってこなかった。

放課後、私はいつものように松本と秋山の「赤い糸」を監視していた。

今日は「クピド」の定休日で、学校に残っても問題ない。

松本と秋山はまだ学校に残っているようなので、二人の「赤い糸」を辿ってもみることにした。

松本は体育館で部活中。秋山は図書室で勉強中。

図書館のある第二校舎から体育館への間には、生徒の教室がある第一校舎が建っている。

図書館の壁を抜ける「赤い糸」を追って、廊下に出る。

ちょうど窓から第一校舎に向けて斜めに降下している「赤い糸」を眼で追う。

第一校舎への進入地点は、屋上へ繋がる階段の辺り。

下の階に降り、渡り廊下を通じて、第一校舎へ移動する。

この辺りはちょうど松本と秋山の「赤い糸」の中間地点に位置する。

階段を上がって、「赤い糸」の進入口に向かう。

踊り場に出て、上に誰かいることに気付いた。

自然に足取りが遅くなる。

鼓動が高鳴るのを感じる。

勘が告げる。

私はぐいっと息を潜めた。

その人物は鋏を取り出すと、何もない空中に向けて動かす。不振行動ではない。その切っ先はしっかりと「赤い糸」を捕らえている。

「っな……」

刃と刃が擦れ合う音が階段に響く。

鋏が実際にな何かを切ったわけではない。

だが、その瞬間、「赤い糸」は確実に消失していた。目を見開く。

可能性だけなら考えていた。

だが、本物を目にするのはやはり。違う。

上げようとしていた足を無理やり下ろしたのがいけなかった。

動揺していた私はバランスを崩し、手すりに捕まる。

上靴が擦れる、乾いた音が響く。

彼女が振り向く。

驚きを顔に表して、私達は共に見つめ合った。

「ど、どうして……」

蓑宮滯が、私を見て、怯えていた。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 五章 再び、幼馴染／ 二話 告白（後

五章も遂に終わりに近づきました。ここからは第一部の終焉に向けて進んでいきます。

【蓑宮】

私の姿を確認した蓑宮は、階段を走って上り始めた。

下に私がいたので、何故か怯えている蓑宮には上しか逃げ場がなかっただけの話だが。

私はすぐに追った。

途中で廊下に出ることができなかった蓑宮は、そのまま屋上へ繋がる階段を駆け上がる。

蓑宮は屋上へ飛び出して行った。

蓑宮の後を追って、屋上のドアを開ける。

屋上は危険な場所だ。

何かに怯えて逃げるならば、分岐路があった場合、何があっても屋上へは行かない。屋上へ行くのは、追い詰められに行くからだ。そこには袋小路しかない。

私がそのことに気付いたのは、コンクリートのタイルが敷き詰められた屋上の真ん中に佇んでいる蓑宮に追いついたときだった。

だが、そんなことに今気付いても、もう遅い。

現に、蓑宮は屋上に来てしまっている。

雲ひとつない青い空の下、蓑宮は虚ろな目で遠くを見ていた。

ここで私が立ち去ったら、最悪の事態は免れるだろうか？ いや、この場で起きなくても、数日もすれば必ず訪れるだろう。

なら、今聞いておこう。

「蓑宮さん。あなたがやったのね」

私の声に、蓑宮がこちらを振り返ったその瞬間、閉めた屋上のド

アが内側から開かれた！

「はあ、はあ」

息を切らしているその姿を確認して、私は動揺した。

道長！ 何であんたがここにいるの！

最悪のタイミングで、最もここにいてほしくない人物がやって来てしまった。

【道長】

屋上のドアを開けると、そこに蓑宮と奔洞はいた。

中央に虚ろな目で立つ蓑宮と、それを遠くから見つめる奔洞。

僕の姿を捉えた蓑宮は、「ふっ」と笑った。

「道長に知られちゃった。そうなる前に終わらせるつもりだったのに」

蓑宮は半ば魘されているように話し出した。

「そうよ、奔洞さん。あなたの言う通りよ。で、何？ それが何だっ
て言うの？ 悪いことかしら？ 運命を変えることが悪いことかしら？」

「でも、あなたは他人の運命までも変えた」

奔洞が蓑宮と話している。

僕は、ただその場に突っ立っている。

「仕方ないじゃない。確実に行うためには、経験が必要なんだから」
何のことだか僕にはさっぱり分からないが、二人の間に何かあった
たのだけは理解できる。

「そう、全てはあなたのせいよ、奔洞さん！」

蓑宮が叫びだす。

「あなたのせい。あなたが道長の前に現れたから。ううん。それだけならよかった。でも、あなたは道長に教えてしまった！ だから、

道長は永遠に私を好きにならない！」

「でも、あなた達の運命は結ばれてはいないのよ。私がいなくても、結ばれることはないわ」

僕の知らないところで二人が言い合っている。

僕といえば、一人、まったく違うことを考えていた。

「それでも、隣にいられたのに！ 例え結ばれていなくても、付き合うことも、結婚することもできたのにっ！ 今だけでも、私を見てくださいのに！ あなたさえ、あなたさえ、現れなければ！」

「そんなのただの甘えでしょ。自分の力で抗えばいいじゃない」

このまま事が展開すれば、どういう結末が待っているか？

「それができないのは、あんたが一番よく分かってるんじゃないの！ だからこそ、道長に教えたんでしょ！」

「はあ？ 何言ってるの？」

「惚けないで！」

三角関係の物語に、幸福な結末なんてない。それが、世界の常識。まあ、これは三角関係になりきれているかどうか微妙だけど。

「良いわ。もう遅いもの」

蓑宮がゆらりと体を揺らす。

「私は、道長に知られてしまった……」

蓑宮が体をゆっくり一回転させて、何かを探す。

僕は、その姿を呆と見守るのみ。

「だからね。決めたの」

蓑宮が目標を定めたらしく、一点を見つめる。

「運命は変えられない。結末が決まっているのなら、できるのは道筋を変えることだけ」

蓑宮が振り向く。

そして、奔洞ではなく、僕に向かって、微笑んだ。

「心は諦めたけど、思い出だけは渡さない」

最後に、僕のところへ走ってきて、抱きしめて。

蓑宮が走り出す。

天原高校の屋上には飛び降り防止用にフェンスが張り巡らされている。

けど、一箇所だけ例外がある。
作り変えられた給水タンクの裏側には、フェンスがないのだ。
第一校舎の給水タンクは屋上から少し外に突き出てしまっており、その手前にフェンスはあるものの、整備用の梯子もセットなので、用意に乗り越えられる。

蓑宮はそこに目掛けて一直線に走って行った。
梯子を駆け上がり、フェンスの向こうへ渡る。
蓑宮の体がふわりと宙に浮く。
僕が駆け出すのは、遅すぎた。

【奔洞】

蓑宮が給水タンクに向かって走り出すのと同時に、私は駆け出した。

蓑宮の体まで、徒歩にして二歩の距離。でも、現役陸上部の蓑宮の足は速い。

蓑宮がフェンスを乗り越え、向こう側に到達する。

このままでは蓑宮は飛び降りて、永遠に道長の記憶の中で行き続けるだろう。

自分が振ったばかりに死んだ幼馴染。

周囲もそう評価するに決まっている。

そうはさせない。

蓑宮の思い通りになんてさせない。

道長は、私が頂く。

「つく……」

蓑宮の体が宙に浮く。

まだ間に合う！

蓑宮の体が降下する。

だが、蓑宮は知らない。その下には新たに落下防止用のネットが張ってあることを。

教職員も馬鹿ではない。

給水タンクの取り付けの失敗に、何の対処もしないわけではない。今ある落下防止用ネットは一時的なもので、ネットから下に落ちることは可能だ。そのため、そのときになれば、給水タンクへの道を物理的に封鎖する予定のようだ。

蓑宮はそのことを何も知らない。

教職員も、何も知らせずに、解決してしまうつもりだったようだから、屋上で昼食をとったことのある者にしかその存在は知られていない。高校生にもなって、用もないのに屋上へ来る物好きもそうそういない。

蓑宮の体が消える。

おそらく、落下防止用ネットに落ちたことだろう。そこから出るには一苦労かかる。また、一度飛び降りるつもりで飛んだ者は、ちよつとま放心状態となるはずだ。

なら、今しかない。

私はフェンスを乗り越えようと、落下防止用ネットに向かって飛んだ。

一瞬間な無重力状態を味わうが、すぐにネットに体が沈む。

すぐそばに落ちている蓑宮が動き出す前に、私は彼女に馬乗りになり、全体重を使ってその動きを封じた。

だがそれが不運にも仇となり、落下防止用ネットが傾いて、私達の体を宙に放り出そうとする。

「っげ……」

やはり所詮は一時策に過ぎない代物のようだ。全然安全じゃない。だが、私と蓑宮の体はネットに巻きついてしまっており、幸い落ちることはなかった。

ふー、とため息をつく。

駆けてきた道長に先生を呼びに行くように言って、私は蓑宮に目をやる。

蓑宮はずっと放心状態のまま。

飛び降りたときに、全てを捨ててしまったのだろうか？

心理学や精神学なんて、私には分からない。

もし蓑宮が壊れてしまっていたら、それは私の責任だろうか？

それとも、道長のせいになるのだろうか？

「愚問ね」

空に向かって呟く。

雲ひとつない、憎らしいくらいに青い空。

自分の小指を視る。

結ばれた「赤い糸」は右へいたり左へいたり。道長が右往左往しているのが分かる。

「ばれたかな？」

何も反応しない蓑宮に向かって呟いてみる。

答えはない。

「ばれてないわよね？ うん、ばれてない」

一人で頷いて、私はネットに体を預ける。

さて、と。

どうしたものか。

このままでは必ず事の詳細を聞かれる。

道長に話を合わせさせて、誤魔化さなくてはならない。

まったく、とんだ迷惑だわ。

【蓑宮】

「彼と知り合ったのは、私が二歳のときだったらしいです。

その頃、ちょうど転勤だった私の親がこの町に引っ越してきたことがきっかけでした。

それから私と彼は、よく一緒に遊ぶようになりました。この辺りの子供は皆私達より年が上で、まだ赤ん坊の私達と遊べる相手はいませんでした。

そのまま成長して、私達は同じ小学校に入学しました。

うちの学校には登下校時の藩行動をとるという決まりはありませんでしたので、私は毎日彼と登校しました。

彼の手は暖かく、私はよく彼の手を握りました。

彼も満更ではない様子で、私の手を握り返してきました。

学校ではよく、『幼馴染』だと言われました。

物語の中では、『幼馴染』は恋人同士です。私は急に恥ずかしくなって、顔を真っ赤にしました。それを不信に思った彼が私の顔を覗き込んだので、ますます顔を赤く染め、あまりの熱さに倒れてしまいました。

その日の帰り道、彼は何故倒れたのかと私に尋ねました。

私は何でもないと言って、彼と別れました。

それからというもの、妙に彼を意識してしまうようになりました。彼の一言に、彼の行動に、何かを期待して、嬉しんだり悲しんだりしている私がいきました。

私の家にはたくさん本があります。

それはお母さんの趣味で、ほとんどが恋愛小説を占めています。

私はそれを読んでみることにしました。

そしたらこのもやもやした思いが何だか分かるかもしれない、と直感的に思ったからです。

そして、知りました。

恋でした。

恋。

特定の異性を好きになるという、あの恋。

私は彼に恋しているんだ。

そう思うたびに、私はふわふわした感覚に陥りました。

私は彼のことを考えました。

恋をしたら次は告白です。そして、デートを重ねて結婚。子供も作って、幸せの家庭を築く。

それが恋の道。

でもそのためには、彼にも私を好きになってもらわなくてはいいない。いや、彼は私が好きはず。ずっと一緒に過ごしてきた私がすなのだから。恋をしたら告白をするものなのだから、彼が私に告白しないのは、彼が私のことが好きだということに気付いていないだけ。

なら、気付かせてあげればいい。

だから私は、彼に恋愛小説を薦めました。私が気付いたように、彼も気付くはず。そう思って、できるだけ今の私達の状況に近いものを選んで、私は彼に小説を渡しました。

それから暫くして、彼は初々しい反応を私に示すようになりました。

これで告白してくれる。

そう私は確信しました。

ですが、彼は私に告白せずに、恋愛小説を読み漁るようになりました。

私は彼に頼まれる度に、小説を貸しました。

きつと、彼は照れ屋で、私と会う口実がほしいんだ。

ある日私は気付きました。

それから月日経ち、私達は中学生になりました。

新しい友達もでき、周囲の目もあり、私は昔ほど彼に近づくことができなくなりました。それでも、やはり私達は『幼馴染』なので、登校時是一緒でしたし、からかわれて顔を赤くすることもありました。

この頃から、私は彼との関係が希薄になりつつあることに気付きました。

私達の間にある最も大きな結びつきは、『幼馴染』という関係。これを意識させないと、彼は私から離れてしまうかもしれない。

私は勉強し、彼と同じ高校を受けました。

ですが、こればかりは、天に委ねるしかありません。

そして、神は私の願いを聞き入れました。

私は神に祝福された。私達の恋の旅路に障害なんてない。

ない、はずでした。

あの女が現れるまでは……。

彼がアルバイトを始めたのは知っていました。

本当は一緒に働きたかったのですが、あまりに近づきすぎて鬱陶しがられることが怖くて止めました。

暫くして、彼のアルバイト仲間がうちの高校の同級生であることが分かりました。

そこから先は、坂道を転げ落ちるに等しいものでした。

彼はほとんど私との時間を減らし、その女と時を共にするようになっていました。

私は自分の愚かさを呪いました。私からさっさと告白していれば、こんなことにはならなかったのではないかと。

私は『幼馴染』の関係で安心して過ぎていました。

ですが、私達の関係自体は確かなものです。それがそう簡単に崩れるわけがない。

そう気付いて、私はある情報を手に入れました。

二人が働いている店では、人の恋愛道を全て知る者がいるらしい、と。

初めは嘘だと思いました。けど、聞いていくうちに、馬鹿にできないことが判りました。

うちの学校で最も知名度の高い、杉原幹也と長谷川美久先輩のカップルの仲を取り持ったのが、あの女だったのです。

他にも何組かのカップルに、あの女の影がありました。

確信しました。

あの女が何かしたのだ。

だから彼は私のもとから離れていってしまったのだ。

そうでなければ、あれほどの月日を共に過ごした彼が、一年そのらの仕事の付き合いしかないどこの馬とも知れぬ女に靡くわけがないのだ。

私はあの女と戦うことにしました。

私は力を手に入れました。

私は罪を犯しました。

でも、全ては彼のため。

彼をあの女の悪の手から逃すため。

でも、そのためには私の罪が彼に知られてはいけなかったのです。知られれば、私は彼の前にいらなくなる。

これは、ある意味、この世で最も醜い罪かもしれない。

何故なら、人は愛するために生きているのだから。

愛があるゆえに生きているのだから。

それを無断で踏みにする好意は、何があってもいけないと分かっています。

でも、それは彼への思いが故。

その彼に知られてしまった。

私の罪が、あの女によって、彼の前に明かされてしまった。

私にはもう選択肢はありませんでした。

私は罪人です。それも、この世では決して裁かれることのない、罪人です。

そんな私にできることは一つでした。

決まってしまった運命を変えることはできない。

ならせめて、その道筋だけでも変えることはできないか？

それが私の決断でした。

でも、最後の悪あがきに、彼の耳元でそっと囁きました。

『それでも私はあなたが好きです』

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／**五章 再び、幼馴染**／**三話 急転直下**

次の章で第一部は終わりです。

「赤い糸」の説明は終わり、物語は現実へと走り出します。

【道長】

蓑宮の自殺未遂は公にされなかった。

駆けつけた先生達は奔動が考えた嘘の報告した。

フェンスに引っかかった帽子を取ろうとして落ちた、と。

先生達はいぶかしんでいたが、事を荒げるつもりはないようだ。

だが、生徒達の間では実しやかに蓑宮自殺説が囁かれていた。

周囲の視線が自分に注がれているのが嫌でも分かる。

そして、それはこの場にいない奔洞も同じだろう。

現場にいたという事実だけで、何があったのか想像できてしまう。

それを面と向かって言う者はいないが。

人目を避けて、教室を出る。

階段まで来る。

屋上は昨日、蓑宮を救急車に運んだ後、先生達が封鎖してしまっ
た。

階段を降り、中庭に向かう。

ベンチには誰も座っていなかった。

「何なんだ……」

一人呟く。

蓑宮が飛び降りた理由はおそらく、僕だ。

蓑宮を振ったから、せめて僕の記憶の中では特別であろうと、飛
び降りた。

状況証拠はそれを物語っている。

しかし。

しっくりこない。

飛び降りるほどの愛を持っていたのなら、たかが一回振られたぐらいでそんなにすぐ諦めるのか？

奔洞は何か知ってるのだろうか？

――。

頭を振る。

僕は何を考えているのだろうか。

それを知ったところで、もはやどうにもならない。

蓑宮を振ったのは他でもない僕なのだから。

今更掛ける言葉もない。

空を見上げる。

昨日と変わらぬ青い空。

蓑宮はこの空の下、去っていった。

屋上でのことを思い返す。

蓑宮が僕に好意を寄せていたのはずっと知っていた。

僕も蓑宮に好意を寄せていた。

けど、それは次第に偽りへと変わってしまった。

僕は、自分の感情を信じられなくなっていた。

小説を読む度に脳に記録される数多な恋愛パターン。

世の中には幼馴染の恋愛の道筋を示したものが溢れている。

それらの影響を受けていないと決して言えない。

僕は蓑宮への思いが、どこまで自分のものなか分からなくなってしまった。

皆はそこにちゃんと折り合いをつけて判断している。

けど。

僕にはそれが判らない。

だから僕は今まで、中途半端な対応しかしてこなかった。

蓑宮を自分から拒絶することもなく、思わせぶりな行動と発言を

重ねて。

蓑宮の思いが持続するように。

だから、蓑宮は僕を思い続けた。

けど昨日。

僕は蓑宮を振り、結果として彼女を自殺にまで追い込んだ。
僕のせいだ。

僕のせいで、蓑宮は自分の人生を狂わした。

恋愛は人の人生を大きく変える。

分かっているつもりだった。

けど、全然分かっていなかった。

「言った通り、大変なことになったわね」
頭上から声が聞こえ、頭を上げる。

「三浦……」

「こうやって話すのは、久しぶりね」

運動会の一件以来、話しづらくて距離があった。

三浦はベンチに座らず、僕を見ずに言った。

「蓑宮、怪我はなかったんだってね」

「……うん」

「よかったじゃない。大事に至らなくて」

僕は俯いて「――そうだね……」と口にする。

「で、何を怖がっているの？」

三浦の言葉が僕の中に響く。

「大体のことは察しがついているわ。私はてっきり平然と学校に来るか、病院にいるかのどちらかだと思ってたのだけど。けど、あなたはここにいて、教室にも行かず、こんな所で現実逃避」

僕は何も答えない。

三浦は一人で話し続ける。

「奔洞さんに罵倒されたあの日、私は何も言い返せなかったわ。悔しいけど、確かにそれは事実だったから」

運動会の後のあの日。

蓑宮と一緒に帰った最後の日も、あの辺りだけ。

「けどね。事実だけど真実ではなかったのよ」

三浦が空を見上げる。

「確かに私は失恋が怖かった。先例を作ることによって安心しようとしていたわ。けどね。それだけで人の心がそう簡単に変わるわけないのよ。」

私と道長は清元先輩と皆本をくつつけようとしたけど、結局はそれを決めたのは本人なのよ。

『恋愛は人の人生を大きく変える』。

だからって、他人が勝手に干渉できるものではないわ。だからね。

道長が何かして、それで誰かが何かしても、それはその人の決めたことで、その人がやったこと。道長がそれを背負う必要はないわ」三浦が僕を見る。

僕は――顔を上げはしない。

「それでも僕は――」

「だったら病院に行くべきよ。一人で落ち込んでいないで、ちゃんと向かい合って。そうして、背負うものでしょ」

三浦はそう言い残して去っていく。

予鈴が鳴る。

朝のホームルームが始まるはずだ。

僕はようやく顔を上げて空を仰ぐ。

足は、動かなかった。

途中、保険の先生がやってきたけど、変えるように薦めるだけで、すぐいなくなった。

幼馴染を追い込んでしまったことを悩む少年。

それが僕の立ち位置。

けど――。

僕は――。

「ちよつといい？」

後ろから声を掛けられた。

振り向きはしない。

半年前の再現。

「覚えてる？ 遠山のことで話したことがあったよね？」

楠が僕の横に立つ。

「うん」

「あのとき、お前は『ただの友達』なんてほざいてた。

まるで予め用意していた文章を機械が読み上げているような声だったよ。

確かに道長にとって幼馴染の蓑宮は恋愛対象にならなかったかもしれないけど。それでもやっぱり二人は幼馴染なんだよ。恋で揉めても、喧嘩しても、その事実だけは変えられない。

道長。

今はどうあれ、過去にあったことは、全て紛れもない真実なんだ。そこにいた自分は、確かに自分で、その頃の思いの決して嘘じゃない。

お前にとって蓑宮零は恋人云々の前に、幼馴染だろ？ その名称が嫌でも、付き合いの長い友人であることは変わらないはずだ」

予鈴が鳴る前に言い終えて、楠は教室に戻る。

「そんなことは分かってるんだ――」

楠の背中に呟く。

蓑宮は飛び降りた。

僕の目の前で。

僕のせいで。

その道を選んだ。

それ自体を僕はどうとも思わない。けど。

あのとき僕は。

中に舞う蓑宮の最期を目にしながら。
僕は。
思ったんだ。

——よかった、って……

昼休みになって、何人かの生徒が中庭を通ったが、誰も僕に話しかけることはなかった。

僕は今、教室にも病院にも行けずに、ここで半日も過ごしている。そろそろ決断しなくてはいけない。

いつまでもここにすることは許されないのだから。

三浦は言った。

僕が何を思っても、現状は変わらない、と。

そして未来を読む恋愛相談師は。

僕の目の前に立って、うな垂れた僕の頭を叩いた。

「いつまでここにいるの？ さっさと病院に行きなさい」

奔洞は淡々と告げて、その場を去ろうとする。

「行って——」

奔洞が振り向く。

「行ってどうしろと言うんだよ！」

僕は叫んでいた。

胸の中に溜め込んでいたものが暴れだす。

「奔洞はいいだろう。恋愛相談師なんだから、気構えもできてるだろうし、気持ちの切り替えも早いだろう。けど、僕は違うんだよ！

僕は、最低だ。

自分の問題なのに、他人の人生を喰った。

そして、それを僕はよしとしている。

僕は。

僕は……」

「あんた、何か勘違いしてない？」

奔洞が僕の口を押さえて黙らす。

「そんなに恋愛が大事？　馬鹿じゃないの！

確かに恋愛は人生を大きく変えるわ。

けど、そんなの恋愛に限ったことじゃない。

勉強だって、運動だって、何だって、人生を大きく変えるわよ。

そんなの当たり前じゃない。

何かしたら、それが何かの原因になるのは、当たり前じゃない。

そんなの誰だって分かってるし、誰だって知ってる。

あんただって、知ってるはずでしょ。

……。

いいかげん、目覚めなさい」

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 六章 運命の人／ 一話 後腐れ（後書き

遂に第一部、最終章に入りました。
物語は、これから動き始めます。

【奔洞】

放課後。

私は再び中庭に足を運んだ。

道長はもういない。

いては困る。

ここからは、彼に知られてはいけないのだから。

中央のベンチに男子生徒の姿を捉え、私は近づいた。

「まさか、あなたの方から呼び出しがあるとは思わなかったわ」

「そろそろ頃合だと思ってね。本当は屋上がよかったのだけど、あの騒ぎで封鎖されてるからね。まあ、ここもここで興味はあったんだけど」

僅鴉は私にベンチを勧めてきた。

断って、話の本題に入る。

「で、何の用かしら」

「奔洞さんだって、察しがいつてるくせに」

「……」

「もちろん、蓑宮滯のことだよ」

蓑宮滯。

道長の幼馴染を自称する、屋上から私達の前で飛び降りた、「赤い糸」を切って運命を変えようとした少女。

「彼女に『人類繁栄システム』のことを話したのは僕だ。あ、奔洞さんは『赤い糸』と呼んでいるんだったね」

「呼び名はともかく、蓑宮に力を与えたのはあなたじゃないの？」

「あれは彼女自身の力だよ。僕は、その力の発現をちょっと手助けしただけ」

「それで、目的は何？ 無関係な人達の人生まで変えて、何をしよ

うというの？」

「人生は常に何者にも左右される。奔洞さんの持論じゃなかたっけ？ まあ、そういう話は後にして。そう、目的だったね。僕が、蓑宮濤に奔洞さん達を噛ませた理由。僕はね。定められた運命なんて、なくなってしまうばいいと思っっているんだ」

定められた運命。

最初から、終わりが視える未来。

「運命の赤い糸」。

「人類繁栄システム」。

「『赤い糸』って何なんですか？」

「どうしたのですか？ 智美さん。何かありました？」

「新島さん。私は、あなたがこの眼の使い方を教えてくれるというから、ここにすることにしました。確かにあなたは、私に力の使い方と、力の使い場所を与えてくれた。そのことには感謝しています」

「それはどうも」

「そろそろ本当のことを教えてくれませんか？」

「……」

「『赤い糸』で結ばれた人達は、必ずしも思いあっているわけではありませんでした。『赤い糸』が恋愛道の『運命』というのなら、これは納得がいきません。『運命』として定められているというのに、その『運命』が成就するとは限らない。また、『赤い糸』そのものに関してもです。接近して対象を認識する必要があるなんて、こんなものを『運命』とはいえません。発動条件を必要とする『運命』なんて、『運命』ではありません。何もしなくてもそうなるから『運命』じゃないんですか？」

「……正解です」

「……」

「『人類繁栄システム』って知ってます？」

「いえ」

「単純に言えば、種の存続を望む生命体としての本能、といったところですよ」

「僕はね、奔洞さん。この世の全ての『赤い糸』を消し去り、真の恋愛が成就する世界を作りたいんだよ」

「真の、恋愛……」

「そう。君ならもう分かっていると思うけど、僕達人類は、『赤い糸』によって恋愛を支配されている。それは、安定した相手がいる、ということと同時に、相手は予め定められている、ということになる。君は、『赤い糸』によって惑わされた者を見てきたのだろうか？」

長谷川美久と杉原幹也。

先輩と後輩。

「赤い糸」で結ばれた二人。

互いに思いを告げながらも、「赤い糸」で結ばれていたために、その消滅がゆえに決別した。

楠正史と遠山和子。

幼馴染を自称する二人。

「赤い糸」で結ばれていなかったがために、私は二人の仲を取り持つことはしなかった。来るべき破局を待ちながら、二人は互いに寄り添いあう。

松本正史と秋山楓。

「赤い糸」で結ばれたクラスメイト。

恋愛感情よりも「赤い糸」が先行した結果、彼らの仲は嘘の塊。

清元瑞穂と皆本清。

「赤い糸」で結ばれることのなかった、先輩と後輩。
芽生えた思いは、「運命」によって打ち砕かれる。

壱端透と片山篤。

芽生えかけた思いは、「赤い糸」が結ばれていたために、その破壊によって途絶えた。

道長昨也と蓑宮漑。

「赤い糸」で結ばれなかった幼馴染。
最悪の形で終わりを迎えた二人の思い。

「蓑宮漑の力は素晴らしかった。『赤い糸』を書き換える能力。まあ、結局は『破壊』までにしか至らなかったけど。それでも、恋愛を革命させる足掛かりとしては十分だったよ。後は、奔洞さん、君の能力だけ。『全ての男女の未来を見通せる』その眼があれば、この世界に恋愛の革命を起こすことができる」

僅鴉は右手を差し出す。

「僕と、一緒に世界を救おう」

「運命の人」という言葉が嫌いだった。

地球上に存在する人類は六十億人以上。だが、結ばれる相手は予め定められている。それは、どんなに抗っても変えることはできない

「運命」。

けど、現実が違う。結ばれることのない者同士が互いに寄り添い、崩壊していく。

だから私は、私だけはそうはならない。

私だけは。

そう、心に決めたのだ。

始まりは幼稚園に入って暫らくしたときだった。

「赤い糸」自体は以前から視えていた。

だが、それが示すものについては、その年になるまで分からなかった。

いや、あのときも本当の意味で分かっていたわけではないだろう。だからあんなことを口にしてしまったのだ。

――ねえ。どうして××××××××××××××××？

幼い私は、その言葉の意味をしらなかった。

私は、その言葉を周囲に撒き散らした。

幼稚園の友達の母親に。

近所のお兄さんに。

売店のおばさんに……

結果として。

私の周りの世界は、粉々になった。

だからそのとき誓ったのだ。

悲しみに染まった人々の中で。

だから。

「議論の余地はないわね」

僅鵠が差し出した手を見つめて。

「そういつてくれるとうれしいよ」

「そうね」

その手を跳ね除けた。

「断る」

呆けた顔の僅鵠に背を向ける。

「ちよつ、ちよつと待て！ いいのか？ それで。道長昨也の傍に
いながら何もしないのは、『赤い糸』で繋がっているからなんだろ
う？」

「……だったら、何？」

「『赤い糸』を『消去』してしまえばいい。蓑宮滯は『破壊』の段
階で舞台を降りたが、君なら『架け直し』も夢ではない。何の気兼
ねもない、何の束縛もない真に自由な恋愛ができるんだよ」

「……そうかもしれないわね」

そうとだけ言い残して、私はその場を去った。

「ねえ、聞いてるの？ 道長。」

「……うん」

「もう、どうしたの？ 元気ないわね。何かあった？」

「……うん」

「うんって…… あ、そうそう。一つ、お願いがあるんだけど、い
いかな？」

「お願い？」

「……うん。あ、あのね。私達って、その、付き合ってるでしょ。
だからね、そ、その、名前で呼んでいいかな……？」

「そ、それは……」

病室の中から聞こえてくる会話。

道長と蓑宮だろう。

私はわざと音をたててドアを開ける。

「あ……」

私の姿を確認して、道長が顔を背ける。

「どうしたの？ 知り合い？」

「うん。ちよつと待ってて」

道長はそう言うと、蓑宮の元を離れ、病室の外に出る。

ドアを閉めるときに覗いた蓑宮の顔は、とても幸せそうだった。

「何やってるのよ!」

心配して来てみれば、案の定、心配した通りだった。

「ごめん」

「私に謝ってどうするのよ」

「……」

蓑宮の病室から十分離れた所にある休憩場まで、道長を連れて行く。

「会った瞬間、振るんじゃなかったの?」

「そのつもりだったけど、先に見つかって、タイミング逃した」

「タイミングとかそういう問題じゃないでしょ!」

「だったらどうしろっていうんだよ! 僕に蓑宮を壊せというのか!」

道長が声を張り上げる。

私は黙って席を立ち、ひとまず自動販売機でジュースを二本買った。

一本を放って、道長に渡す。

互いに黙り込む。

蓑宮の容態は、私達にとって最悪だった。

体に異常はなかった。だが、怪我をしてくれた方がよっぽどよかった。

彼女、蓑宮は、精神障害を引き起こしていた。

といっても、日常で生活していけないほどのものではない。ある者がそれを了承すれば……。

「つくそ……」

道長が呟く。

あの屋上で、蓑宮は宣言してみせた。

思い出だけは渡さない、と。

そして彼女は、見事道長に一生消すことの出来ない思い出を作ってくれた。

それは、自殺よりもえげつない。

……。

蓑宮は、自分の告白が成功したと信じている。

そして、私の存在は記憶から抹消してしまっていた。

最初はただの記憶の混乱だと思われていた。

面会に来た親に、道長と恋人になったと嬉しげに語ったらしい。

だが、事の詳細を聞いていた両親はそれを否定したらしい。

すると、蓑宮は狂ったように暴れだしたそう。

そこに何も事情を知らない道長が遭遇してしまった……。

本当なら、道長を会わせないのが定石だろう。だが、最早手遅れだった。

彼女は現れた道長に迫ったそう。 「私達、恋人だね」、と。
曖昧に濁そうとした道長を見て、 「ほら、否定しないでしょ」、と。

医師は言った。

道長が蓑宮の傍にいれば、彼女は落ち着くだろう。強いて言えば、もし本当の恋人になったら、彼女は問題なく日常に復帰できるだろう。

だが、拒絶すれば、彼女は壊れてしまうかもしれない。

体にダメージはなかったが、脳に異常が見られるらしい。

平然と過ごせているのも、道長という支えあってであろう、と。

もちろん、回復する可能性もある。

最後にそう付け加えたそう。

道長に蓑宮と一緒にいるつもりがなさそうなので、彼女に別れを告げるように仕向けたのだが。

どうやら失敗のようだった。

蓑宮滯は、道長昨也にとって赤の他人ではない。

そのことが、邪魔をしている。

私としては、道長にはこの際、きつちりと決別してもらいたい。

だが、それを決めるのはあくまで道長の意思。

私は、自分の恋愛まで捻じ曲げるつもりはない。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ／ 六章 運命の人／ 二話 意思（後書き）

第一部も遂にラストです。
恋愛革命が始まります。

【道長】

人類は異性に恋心を抱き、結婚をし、子を育む。

生命体としての最終目標は種の保存であるが、人類にとって異性との付き合いというのは、性交だけが目的ではない。

確かにその基盤は性交への遺伝子レベルでの生理的欲求だが、その上に新たな感情と目標を上乗せすることに人類は成功した。

それがいわゆる、恋心。

人類は他の生物と違い、一度確立した異性のカップルは、基本的に再編されることがない。

だから人は言う。

自分の選んだ相手は、運命の人だと。

「運命」とは人の意思に関わり無く、人智を超える神の手によってなされるものだ。

それはつまり。

「運命」を持たない恋人は。

代替可能。

――。

長谷川美久と杉原幹也。

彼女が彼を選んだのは、彼女が必要とした条件下にかれが現れたからだ。問題はシチュエーションであって、彼本人ではない。その証拠に、彼らは破局した。

楠正史と遠山和子。

ただ近くに住んでいて、他の人より関係が親密になる可能性が高かっただけ。

松本正宏と秋山楓。

誰が消しゴムを拾ったって、恋人になる確率は大して変わらない。

皆本清と清元瑞穂。

周りの雰囲気に関わされただけ。本人の意思は無いに等しい。

壱端透と片山篤。

一目惚れは勢いだ。相手が誰だろうと、恋の魔法が解けるまでは関係無い。

そして。

蓑宮滯。

僕に告白をした彼女。

まだ幼かったあの日、たとえ僕が手を差し伸べなくても、誰かが僕の代わりになっただろう。

だけど。

確かに。

恋人ではないけど。

たったの二パーセントだけど。

一緒に過ごしたあの時間は真実で。

僕は――。

「――道長は、蓑宮のことをどう思ってるの？」

「僕は――」

答えが出ない。

答えがない・・・・・・。

――。

「私は見捨てろ、ってみたいなことを言っただけど、それはあくまで私の考えよ。これはあんたの人生で、あんたの『運命』なんだから」

確かに、そうだ。

その通りだ。

だけど。

僕は今まで、蓑宮のことを正面から向き合ったことがあるだろうか？

蓑宮の気持ちに気づきながら、僕は何もしなかった。

蓑宮の告白に、僕は最低な方法で逃げた。

けど。

蓑宮と僕は幼馴染だ。

人生の二パーセントを共に過ごした、友人以上の存在。

そして、僕の人生を変えた人物。

今の僕を作った人物。

それは。

必然か、偶然か？

分かっていることは、僕の思考は、悩みは、普通ではなく、誰かが同じ思いに陥ることはないだろう、ということ。

それはもう。

「運命」といっても、過言ではないのかもしれない。

「・・・・・・奔洞。決めた」

これは無茶な選択かもしれない。

恋愛相談師には呆れられるかもしれない。

それでも。

始めたのは僕だ。

終幕は、自分で引く。

「僕は、蓑宮の恋人を演じる」

恋愛相談師は笑わなかった。

ただ、少し悲しそうな顔になった。

「そう・・・・・・。あんたがそう言うなら、止めはしないわ。ただ、きついわよ」

「分かってる。一度は逃げ出したしね」

「後悔、しないわね？」

僕はそれには答えず、蓑宮の待つ病室にまで足を運ぶ。
今ならまだ、戻れるだろう。

蓑宮の存在にフィルターを掛け、思い出を封印すれば、元の生活に戻るかもしれない。

けどこれは、僕の責任だ。

恋愛は他人の人生をも変える。

だから、それ相応の覚悟をしなければならないのだ。

僕は、病室の扉を開けた。

「あ、昨也！ お帰り」

「ただいま……」

——後悔しないわけ、ないじゃないか……

【僅鵒】

店内に入ると、前に来たときにはいなかった、大人の男性が待っていた。

「待っていましたよ。僅鵒君。正直、逃げられるかと思っています
た」

「もう僕に逃げ道はありませんよ」

僕はその男性が進めるカウンター席に座る。

お冷をもらい、お酒を注文する。

「駄目ですよ。うちは、未成年にはお酒は出しません」

「いいじゃないですか。僕はもう、終わりなんですから」

それもそうですね、と、彼はお酒を出してくれた。

初めてのお酒を飲む前に、最後の確認をしまおう。

「あなたが、奔洞智美の師匠ですか？ まさか、こんなところにあ

なたのような方がいるとは思いませんでした。最初、この店に来た

ときも、まったく気づきませんでしたよ」

「基本的に店はある子にまかせていますので。私が店に出ること事
態、珍しいですよ」

「そうですか。それにしても、何が悪かったのですかねー？ 僕の
計画は」

「強いて言うなら、運ですね。それこそ、『運命』とでもいうよう

な。君の計画自体は悪くなかったと思いますよ。『赤い糸』の掌握とその変更。二つの突発的な能力を併せ持ち、変革を起こす。当局が関知する前に終わらせれたらよかったのでしよう。けど、そこはやはり裏技に頼りすぎましたね。だから、あっけなく足元を掬われる」

「奔洞に何をしたんですか？」

「嘘を教えました。主に、『人類繁栄システム』について」

「はっ。なるほど。だからいきなり雰囲気と主張が変わったわけだ」

「すいませんね。君の変革には興味はありましたが、私も仕事ですから。まあ、そういう君も、蓑宮滯に嘘を教えたのでしようけど」

「まあ、そうです」

「考え方は私個人としては悪くないかと思いますよ。ただ、君のやり方だと時間は掛かるし、リスクも大きい」

「………どういことですか？」

「『赤い糸』の存在は直にばれます。現代の科学技術では今すぐは無理でも、後、十年、二十年もあれば真相に近づく人も現れるでしょう」

「もしかして、あなたは自ら全世界にばらすつもりなのですか？」

「ええ。それが最も効率的な変革になりますから」

「はっはっは。なるほど、僕とは格が違うわけだ。話のスケールが違い過ぎる」

「そろそろ時間です。長引くと、あの子が帰ってきてしまう」

「確かに、僕がここに居るのがばれたらまずいでしょうね？ 粘っては駄目ですか？」 「無理です。当局からも、急かされていますので」

「あちらさんも、あなたと同意見なんですか？」

「ええ。ただ、タイミングについては議論中ですが」

「そうですか。最後におもしろい話が聞けました」

「そうですか。では、さようなら。僅鵠闘己君」

瞼が重くなってきた。

おそらく、口にしたお酒のせいだろう。
意識が霞む。

——ほんと、まったく運がない。

僕は笑いながら目を閉じた。

第一部 赤い糸は偽りを結ぶ / 六章 運命の人 / 三話 結論（後書き）

第一部、終了です。

助走は終わりましたので、「恋愛革命」へ話を進めていきます。

登場人物紹介 《第二部》

《主な登場人物》

道長^{みちなが} 昨也^{さくや}・・・主人公 「クピド」でバイ
トする高二 蓑宮の彼氏の振りをしている

奔洞^{ほんどう} 智美^{さとみ}・・・ヒロイン 「クピド」でバ
イトする高二 「赤い糸」が視える

新島^{にいじま} 抄吾^{しょうご}・・・「クピド」の店長 「赤い
糸」について奔洞に教鞭を振るった

蓑宮^{みのみや} 滯^{みお}・・・道長の幼馴染 道長のことを
彼氏だと思い込んでいる、ように振舞っている

三浦^{みづら} 郁^{いく}・・・クラスメイト 御節介

【奔洞】

「赤い糸連続消失事件」が終わり、二週間が経とうとしていた。季節は冬。

世間はそろそろ期末テストの勉強に勤しんでいるであろう今日のこの頃。

「あ、いらっしやいませ」

ドアを開けた客に声を掛ける。

道長がいないので、一般客の相手も私がしないといけないのだ。

「何にしましょうか？」

「ブレンドコーヒー一つ」

注文をとり、カウンターに入る。

ふと、視線を感じて顔を上げると、スーツでピシッときめた青年

男性の客は、私をじっと見つめていた。

「どうかしましたか？」

「いえいえ、職業病みたいなものです。気になさらずに」

私はそれ以上何も言わずに、たんたんと仕事をする。

その間、その男性客は時折「ふむふむ、とすると……」などと言

っては、手帳に何やら熱心^{みちなが}に書き込んでいた。

おそらく今日も道長は来ないだろう。

となると、この客が帰ったら店じまいだ。

「君、他に店員は？」

「奥にいますけど、呼びます？」

「いや、少し気になったただだから」

男性の様子にいぶかしみながら、コーヒーを出す。

「この辺りに恋愛相談所があるって聞いたんですけど、知りませんか？」

男性が話しかけてきた。

「さあ？ 私は最近入ったばかりなので、その辺りのことは疎くてとぼける。」

大人の恋愛相談は受けていないのだ。

男性はそれ以上何も言わず。ただ何かを待つように、ずっと店内に居座り続けた。

朝の教室には生徒の姿が一つもない。

なぜなら、ついさっき校門が開いたばかりだからだ。

私は誰もいない教室に入り、自分の席についた。

寒いので窓は開けず、ポケットからカイロを取り出して手を温める。

「はあ」

白い息を吐く。

誰もいない教室に一人。

まるで、取り残されたみたいだ。

私は何をするでもなく、呆と待ち人を待った。

暫らくして、誰かが階段を上がってくる音が聞こえてきた。

人がいないため、足音が校舎中に響いているかのように思える。教室のドアを開けて入ってきたのは、待ち人である道長だった。

「遅い」

開口一番、私は愚痴った。

「ごめん、ごめん」

そう言って、道長は私の前の席に腰をおろした。

席替えしたため、今の彼の席はそこなのだ。

「で、みのみや蓑宮さんとは最近どうなの？」

一ヶ月前、道長の幼馴染であるみのみやみお蓑宮滯が屋上から飛び降りた。

幸い命に別状はなかったものの、その分ダメージは心の方について

てしまったらしい。

それ以来彼女は、道長のことを自分の恋人だと思い、それを糧にしなければ日々生きられない体になってしまったのだ。

道長はそんな蓑宮のために嘘の恋人を演じている。飛び降りの原因は道長が彼女の告白を断ったからだというのに。

「記憶が元に戻る気配はまったくなかった。検査の結果も同様」

「そうじゃなくて」

私は口調を荒くする。

「彼女とここ一ヶ月べったりだったんでしょ。で、どういう風に過ごしてたのよ？」

「って、そんなこと聞いて何になるの？」

「些細な行動が見逃してはいけないサインであることもあるのよ」
道長は「えーと……」と記憶を漁り始めた。

「行きは朝練に付き合っ一緒に登校して、帰りも大体は一緒かな。遊園地に行ったりもした。でも、あまり動かないように言われてるんで、大してデートらしいデートはしてないよ。この前の休日はあいつの家で勉強会やった」

ふーん、勉強会ね。

「キスはしたの？」

「え？」

「だから、キスはしたのかって聞いているの」

道長は頬を赤らめて、首を激しく横に振った。

「ない、ない、ない。それはない」

激しく否定する道長を観察する。

「なら、いいわ。道長、これはあんたが決めたことだから、もうそれ自体についてとやかく言うつもりはないけど」

道長を直視する。

「雰囲気流されないことね」

何度も言った忠告だ。

「……分かってる」

道長は少し思いつめたように答えた。

「ところで、いつになったら店に戻ってくるの？」

「今はまだ無理。でも、あいつが安定してきたら復帰するつもり」

「辞める気はないのね？」

「うん」

その確認さへとればいい。

「クピド」がある限り、私と道長の繋がりが途切れることはない。

「オーケー。新島^{にいじま}さんに伝えておくわ」

授業中、ふと窓の外を眺めたとき、空席が目に入った。

僅鵒が使っていた机だ。

誘いを断ったその日以来、彼は姿を見せてはいない。

僅鵒^{きんどう}闕^{けつ}己^み。

あの事件の首謀者であり、「赤い糸」に関して何らかの影響力と知識を持っていたであろう、全ての元凶。

道長と蓑宮の関係を加速させた彼は、今はいない。

学校で別れたからの足取りがまったく追えない、と私のもとにやってきた警察官が言っていた。

最初のうちは騒がれたいた事件だったが、今では風化して、ただの不登校生になっている。

視線を黒板に戻す。

誰かに見られている気がして、振り向いた。

だが、誰かは分からない。

蓑宮だろうか？

そう思って彼女の方を向くが、無表情でノートをとっている。

気のせいだろう、と自分を納得させた。

【道長】

「屋上で食べない？」

蓑宮が僕に提案した。

僕と彼女が付き合い始めてから、恋人は一緒に昼食を食べるものだ、という謎の文化に付き合っていた。そのため、僕らの仲は公然のものだったりする。

「寒いから中にしよう」

「だからいいんじゃない。他に誰もいないから、気兼ねなく使えるよ」

屋上を使っているカップルは長い間付き合っている者とカップルの中で決まっていた。

だが、現在屋上は閉鎖されているのだ。

そして、その原因である蓑宮自身は、そのことをきれいさっぱり忘れている。

「大体、僕お昼もってないから学食行かないといけないし」

「うーん。だったら仕方ないね」

蓑宮は納得してくれたようで、俺はほっと胸をなでおろす。

蓑宮の精神はまだ安定しきっていない。

あの事件との関係性を意識させたら、途端に発狂するか、放心状態に陥る。

屋上は厳禁だ。

「クリスマス会を開こうと思うのよ」

みうら
三浦が僕に言った。

「へえ……」

僕の態度を見て、三浦が続ける。

「それでね、奔洞さんも誘ってもらえる？」

「何で？」

「――即答ね……」

三浦が言った。

「あのさ、前から思ってたんだけど、何で奔洞を誘いたがるの？

三十人以上もクラスメイトがいたら、一人くらい仲間外れがいるのは自然なことだと思うけど」

「……結構酷いこと言うのね」

三浦が意外そうに言う。

「そうね。一番の理由は、彼女は花だから、かな」

「花ね……。棘が多そうだけど。うん、いいよ。来るように言ってく」

そんな僕を見て、三浦は「はあー」とため息をついた。

「ん？」

「私は意地悪のつもりだったのよね…… でもいいの？ 蓑宮と付き合ってる今。奔洞^{ほんどう}さんとは話しづらいんじゃないの？」

――ああ、そういうこと。

僕は納得した。

僕は蓑宮の仮の恋人ではあるが、そのことを周りには伝えていない。

だから、僕と周りでの意識にずれが生じる。

「別に。僕がどうなろうと、あそこにいる限り、僕らはバイト仲間だから」

「はあー、クリスマス会かー」

^{こぼやし}小林がため息をついた。

「せっかくのチャンスなのに、どうすりゃいんだよ」

^{ときた}時田も一緒にため息をつく。

「ん？ どうしたの？」

二人の前を通りかかったら、凄く陰気な空気を醸し出していたので声を掛けてみる。

「うっせー。彼女いるお前には関係ない話だよ。独り身の苦勞を舐めんな！」

「そうだそうだ。女子を天秤に掛けた挙句、蓑宮を――」

「……………」

「……………」

三人の間に沈黙が生まれる。

僕達の話聞いていた周りのクラスメイトも口を噤む。

「……悪い」

「いや、いい……」

嫌だな、こういう空気は。

僕は改めて蓑宮の存在を認識する。

彼女は、僕に多くのものを残していつてくれたようだ。

「あれ？ どうしたの？」

陸上部の集まりから帰ってきた蓑宮が教室に戻ってきた。

「いや、なんでもない」

僕がそう言うと同時に、クラスはいつもの賑やかさを取り戻した。

放課後、蓑宮は陸上部へ向かう。

いつもなら図書室で蓑宮の部活が終わるのを待っているのだが、

今日は久しぶりに「クピド」に寄ってみようと思い、蓑宮には先に帰ると伝えておく。

「クピド」には相変わらず奔洞の方が先に着いていた。

「あら、来たの？」

ドアベルを鳴らして入った僕に奔洞が意外そうな顔をする。

「抄吾さんにはやっぱり自分で言おうと思ってね」

「ふーん、そう。でも、新島さん、まだ来てないわよ」

「え？ 今日も？」

「ええ。今日も」

——抄吾さん。本当にそれでいいのか？

——年頃の少女一人店番に残すなんて。

「で、どうするの？　いつものパターンだと、今日も閉店まで来るとは思えないけど」

奔洞がカウンター席に座って、椅子の背もたれ頭を乗せる。

「そうだなー。久しぶりに働いて帰るよ」

「そう。それじゃあ、これ」

そう言って奔洞は空になったカップを差し出した。

「で、何で私とそのクリスマス会に行かなくちゃ行けないわけ？
不服そうな奔洞。

三浦絡みというのが嫌なのかもしれない。

「別にいいじゃん。それともクリスマスに何か用事でもあるの？」

「……別に」

「だったら、そういうことで」

僕は無理やり約束させる。

「——その代わりに」

奔洞が呟いた。

「ん？」

「その代わりに、絶対ここに戻ってきなさいよ」

一瞬何を言っているのか分からなかった。

が、すぐに見当をつける。

「分かった。必ずあいつとは終わらせる」

あのか、奔洞は自分で選べと言ったけど、おそらく僕の選択を
快く思っていない。

奔洞としての妥協点は、僕があいつときちんと別れる、というこ

となのだろう。

僕が「クピド」に帰ってくるには、そうしないといけない。

恋愛感情が信じられない僕には、ここで他人の恋愛を観察するしかない。

——奔洞のような恋愛相談師になれば、ちゃんと恋愛することができるようになれるのだろうか？

ふと、そんなことを思った。

第二部 求めた運命は偽り／**一章 運命探索**／**一話 あれから（後書き）**

ついに第二部が始まりました。

これから、「恋愛革命」が本格的に始動します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154j/>

運命の人/赤い糸伝説

2010年11月14日22時55分発行